

ある兵士の

物語



山中與隆

YAMAMONAKA YOSHIKAZU

Duo-Yamanaka

ある兵士の
物語

山中與隆

目次

(一)	ある兵士の物語	1
(二)		2
(三)		21
(四)		50
(五)		68
		85

(十)
(三)

(十)
(二)

(十)
(一)

(十)

(九)

(八)

(七)

(六)

192 150 112

244 168 135

275 216

(三十一)
(二十)
(十九)
(十八)
(十七)
(十六)
(十五)
(十四)

447 406 365 299

420 394 334

471

編者あとがき	(二十六)	(二十五)	(二十四)	(二十三)	(二十二)
		544	508		
	562	531	489		
589					

ある兵士の物語

山中與隆

これは吉田盆地（現在の広島県安芸高田市吉田）に生まれ育ったある平凡な男の物語である。時代は十六世紀なかば、西暦一五四〇年の夏から話は始まる。この年の秋、吉田の郡山城を本拠とする毛利元

就は北の強大勢力尼子の襲来を受けるのである。

(一)

町の周囲の山々から覆い被さるように湧き上がっていた入道雲は、午後になって崩れ広がって雷の夕立になるけはいであつた。

案の定その日は、午後の早い時間からゴロゴロ鳴

り出した。雷は初めのうち遠かったが、急に近くで鳴りだすと大粒の雨も落ち始めた。

与兵（よひょう）と峰（みね）は雨を避けるために野良から家に走り帰った。二人は並んで縁側に腰掛けて空を見上げた。この真つ黒い雲が散るまでしばらく休憩できるのがあるがたい。縁側の奥の部屋では、与兵の父太平（たへい）が雷の音にも気づかないようすで昼寝をしている。

その日も朝まだうす暗いうちから三人は野良に出た。二度の食事を挟んでいまままで働きづめだったのだ。太平も昼飯まで是一緒だったが、さすがに炎天下での野良仕事に疲れて、少し休ませてくれと昼飯のあと家にいたのだ。そのうち寝込んでしまったのだらう。

しばらく二人は雨を眺めていた。大粒にポトリポトリと降りだしたわりには本降りにならない。

峰が小さい声で言った。

「子供ができたかもしれない」

与兵は三十半ばであつた。数年前に母親を亡くしてから、六十になる太平と二人で荒れた土地を耕して畑を広げながら、細々と暮らしていた。与兵はその年になるまで嫁を貰う機会を逃していたのだが、弟の次平（じへい）が見つけてきた三十才の峰と二

年前に身を固めた。

与兵より五才下の次平は、長男より先に所帯をもつてすでに子供もいる。同じ吉田の城下で大工の棟梁の下で働いていた。その次平がたまたま仕事に出た先で峰を知ったとき、与兵にびったりだと思つたのである。次平が峰の父親にそれとなく、まだ独り者の兄のことを話すと、あんな年でも貰つてくれる人があつたら喜んで嫁に出すと乗り気であつた。当

の峰は、

「わたしみたいなおばあさんを貰ってくれる人なんてあるものですか」

と話をはぐらかしていた。

次平は、峰が口ではそう言っているけれども内心は嫌でなさそうだと思ったので、なかば強引に峰を与兵に引き合わせたのだった。

峰が住んでいるのは、吉田の北隣の村である。優

しくてよく気の利く女で、器量も悪くない。縁談はそれまでにいくつもあつたのだが、母親を早く亡くして五人の弟や妹の母親代わりをしていて、婚期を逃したのであつた。

次平が峰を引き合わせたとき、与兵は自分にはもつたいない人だと言つて断つた。峰は、
「やっぱりわたしは年を食っているからです。だか
らいいって言ったのに」

と次平に小言を言った。次平がさらにしつこく峰の気持ちを確認かめると、

「わたしは、お兄さんはいい人だと思いました」と言う。次平は諦めずに与兵にこの話を勧めることにした。

次平が兄のところを訪ねるたびに峰の話を持ち出しているうちに、与兵も峰を一目見たときから気に

入っていたのだと本音を覗かせるようになった。自分にはもつたいたないと言ったのは、まったく本当にそう思ったからなのだ。二人がお互いにまんざらでないことを知った次平は、もちまへの積極さで話を進めた。その結果とんとんとことが進んで、峰は与兵の家嫁に来ることになったのであった。

何事に付けて積極的な次平に比べて、与兵はやや優柔不断なところがあつた。その与兵と、自分のこ

とより母親代わりとして兄弟や父親の世話をしてきた峰であつたが、二人の恋は連れ添つてから燃えあがつた。その仲のよさは百姓の間でも評判で、

「うっかり近づくると火傷するぞ」

とか、

「与兵の親父さんは、狭い家の中で居り場がなくて、いつも外に出ている」
などとひやかされていた。

子供が出来たらしいと聞いて峰のことがいとおしくなつた与兵は、思わず肩を抱き寄せようとして手を伸ばした。部屋の中の太平が大きな声で伸びをしながら起き上がってきた。与兵は伸ばしかけた手を引つ込めた。峰はちらつと与兵と顔を見合わせて苦笑した。

「なんだ、さつきからゴロゴロ、ゴロゴロうるさいと思つたら空雷（かららい）さんか」

と縁側から黒い空を見上げながら太平が呟いた。そして、

「子供が出来たのか」

と二人に聞いた。眠っていたと思つたが、聞こえていたようである。

「めでたいことじゃが」

と言つてしばらく足早に流れる雲を見ながら次の言葉を探した。

「ときがよくないかも知れんろう」

と独り言のように言った。

幸せな気分になつていた二人は、思わず太平の顔を見た。太平はまた長い間を置いてから、

「わしの勘じゃが、この吉田で戦になるかも知れん」と言つた。

与兵も太平の言葉をかみしめるように、雲の流れを追いつながら考えた。戦ならこれまでもたびたびあ

った。それはたいいてい近隣の城主同士の勢力争いで、武士と武士の戦いであつて、一般領民はまたかという思いで見ているといつたものであつた。たまにはそのため畑が荒らされることもあつたが、城主たちにとつても領地の作物は大切なものなので、農地を戦場にするにはできるだけ避けてきたのである。

そのような勢力争いを繰り返しながら、いま吉田郡山城に君臨する毛利元就はのし上がつてきたので

ある。与兵は、兵を率いて遠征に出かけていく元就の姿を遠くから見たことがある。太平が言っているのはそのような戦のことではないと与兵は思った。いま元就が山口の強大勢力である大内側についていることは与兵たちも知っていた。そのために出雲の尼子（あまご）が脅威になっていることも城下では知らぬ者はなかった。ついひと月ほど前、峰の郷の近くまで尼子が攻めてきたが、毛利側が難なく尼子

三千の軍を敗走させたばかりであつた。

「尼子かね」

与兵が太平に聞いた。

「このまえ尼子が攻めてきたのは、ほんの小手調べじゃよ。あれで尼子を怒らせたから、必ず陣を立て直してここに攻め込んでくると思うんじゃないや。そうなら、これまでのこの辺の小競り合いとはちよつとわけが違ふことになるんじゃないかな」

「これまでとわけが違うつて、どう違うんかね」
与兵が聞いた。

「尼子が郡山城を落とそうとしたら、相当の大軍で攻めてくるはずじゃ。あれだけの城じゃ、ここの城は簡単には落ちんじやろう。そうなるよこの城下が長いこと戦場になると言うことじゃ」

「もしそうなたら、わしらはどうなるんじや」
と与兵は、太平の解説を求めると言つた。

「わからん」

そう言つて太平は峰の方を見た。

「そのときに峰が大きな腹を抱えとつたら、どつちみちいいことにはならんじやろう」

「すみません」

峰は自分が悪いことをしたように言つた。

「なにも峰が悪いわけじやない。それに親父が言うようになるとは限らんじやろう。毛利の殿様は戦が

上手いから、この前のように、尼子が攻めてきても吉田に入る前に追い帰してしまふに決まつとるわ」
与兵は峰を安心させたくて、父親の考えに異を唱えた。太平は与兵の言うことを黙って聞いていたが、与兵が言い終わつてずいぶん間を置いてから、
「そうだといいいんじやが」
とポツリと言つた。

しかし与兵は、ひとことずつ考え深そうに言う父

親の話に真実味を感じていた。

(二)

与兵たちは、それからも普段と同じように野良仕事
の毎日であった。八月に入ると、城の周辺はにわか
にあわただしさを加えていた。与兵たちの住まい

がある西浦は、郡山城の二キロくらい西で、多治比川（たじひがわ）が山裾に迫った地域である。ここにも、城門付近のあわたたしい動きは伝わってきた。与兵たちも、家の近くを通る石見（いわみ）に抜ける街道を、一群の騎馬の兵士たちが駆けて行くのをしばしば目にするようになっていた。与兵と峰は、太平の話がだんだん現実になっていくのではないかと不安であつた。

八月中旬、稲の穂が出揃ったころ、尼子の何万という大軍が郡山城攻めに向かっているという噂が城下一帯に火の手のように広まった。領民の誰もが、太平が予想したように、これまで高みの見物をしてきた小競り合いとは違うことを感じて、不安におののいた。小金をためた商人の中には、早々と店をたたんで広島方面に逃げ出した者もいるほどであった。しかし与兵たちのように何の術も持たない大部分の

者は、ただ不安を募らせながら日を送るしかなかつた。

八月の下旬に入ると、尼子の大軍が街道筋の谷を埋め尽くして、吉田に向かっているのを見たという者の話が伝わってきた。それによると、吉田の北西十キロあたりの寺に屯営していたと言うのである。そのあたり一帯に延々と兵馬が野営し、付近の民家はわずかな食料も調達されてしまい、勇敢にもそれ

に抗議して斬り捨てられた者もいるらしい。そこに至るまでも、彼らが通ったあとに残されたのは、おびただしい人馬の排泄物だけだという。与兵が期待したような毛利勢の迎撃はなく、尼子勢は悠々と進軍しているらしいのである。

五千人に及ぶ城下の全領民に、郡山城に入るようにとの命令が下されたのはそれからまもなくであつ

た。老若男女を問わず持てるだけの食料を持って、三日以内に城に入れというのである。

与兵のところにも役人が馬でやって来て城に入れという命令を伝えた。与兵が、

「病人もですか。」

と役人に聞いた。役人は、

「そうだ。病人がいるのか」

と聞くので、

「わしの女房のことじゃが、これは身籠っておる」と言つて、傍に立っている峰を指差した。役人は笑つて、

「妊みは病氣ではない。それにまだまだのようじゃな」

と峰の腹のあたりに目をやつて言つた。

「城内に祈祷師も医者もいるし、それに産婆も城に入るじやろうから心配は要らん。それよりも、ぐず

ぐずしていると尼子が押し寄せてきて、ひどい目にあうぞ。毛利の殿様が城下の民を守るために、城に入るように命令されたのじゃ。持てるだけの食料を担いで三日のうちに来るのじゃぞ」

そう言うと、忙しそうに馬に乗ると次の家を目指して走り去った。

太平もニヤリとして、

「峰を病人とは、そりや笑われてもしようがないな」

と言つてから、

「さあ、尼子はその気になつたら明日にでも入つて来られるくらいのところにいるらしい。わしらも急ごう」

と言つて、早くも持つていく物などの準備を始めた。与兵と峰も太平にならつた。大人ばかり三人の所帯はこのよふなときは身軽である。

「このぶんなら、今日中にでも行けるのう」

太平が言った。

「いまのお城の人、産婆とかなんとか言つてたけど何日くらい城に入っているのでしょうか」
峰が誰にともなく聞いた。

「そんなことはわからんよ。戦次第じゃからな」
太平が答えた。

「四、五日は覚悟しとかんにやならんじやろう」と与兵。

「ばかな、籠城となるとひと月、ふた月も珍しくない。敵の兵糧攻めがあるかもしれない。とにかく尼子は何万という兵で攻めて来てるんじゃない。毛利の兵はせいぜい三千くらいと聞いたことがある。大変なことになるかも知れんかう」

「おしらは、どうなるんかう」

与兵はだんだん緊迫した状況を飲み込んできた。

「お前が弱気なこと言っただうなる。そんなことよ

りさつさと支度じや」

と太平が叱った。

その日、一年に何度もないことだが、峰は米の飯を炊いて自分の家での最後の晩飯を三人で食べた。

翌日も朝から照りつける暑い日だった。与兵たちはわずかな身の回りの物と、命令どおり粟、麦、豆、それにわずかな米、みそなど三人で精一杯担いで行

くことにした。持ちきれない食料は瓶（かめ）に入れて床下に埋めた。戸締りをしながら太平が呟いた。「帰ってくるまでここが無事であればいいがのう」

与兵と峰は黙っていた。

与兵たちの西浦から郡山城までは二キロほどである。三人は重い荷を背負って、とぼとぼと歩いた。たちまち三人の額や腕を玉の汗が流れた。多治比川（たじひがわ）をわたって街道に出ると、あちこち

から同じように背負子に荷物を積み上げて城に向かう人たちに出会った。子供をぞろぞろ連れたもの、年寄りを背負ったものなどみな歩みはのろい。小さな子供たちだけがふざけあつて大人のまわりを走り回る。町屋が近づくと城に向かう人の群れは急に増えてきた。職人、商人、武士の家族、役人の家族などが大きな荷物を担ぎ、あるいは荷車に積み上げて城に向かっている。着ている物も、荷物の格好も与

兵たちとは違っていた。

「次平さんたちもいるはずですね」
峰が言った。

「ああ、でもこんなに大勢じゃあ、探すのも大変だと与兵。」

城に向かう人々の群れは、互いの荷物などをちらちら見ながらも、言葉を交わすことなく、ただ黙々と歩いている。祇園社（ぎおんしゃ）に向かう大通

りから武家屋敷の並ぶ道を、くいちがい交差を曲がりながら列をなして人の群れが続いた。やがて道は上り坂となった。いよいよ城の領域である。人々の歩みはさらに遅くなった。祇園社を過ぎると、行列は前が詰まって止まってしまった。

「どうした」

「なんじやろう」

列のあちこちで前の方を伸び上がって見ようとして

いる。それでもわずかずつ進んでいくと、

「女子供は右の方だ。男は左だ」

と役人が怒鳴っている。太平が峰に言った。

「男と女で分けるらしい。どこか居場所が決まった
ら、そこを仕切っている人を見つけて、身籠っている
ことを言うんだよ」

峰は、

「はい」

と言っただけで、こころもち青ざめた顔で与兵を見た。与兵もこれからどういふ状況に置かれるのかま
ったく見当もつかない。峰と別々にされるらしいこ
とがわかったただけでもうすっかかり雰囲気に飲まれて
しまつていた。

与兵たちが、役人の居るところに来た。

「食料はここに置いて行け。食事は共同ですること
になるから心配するな。身の回りの物は各自で持つ

て行け」

と繰り返し大声で言っている。

ここで、峰は右の坂道を、与兵と太平は左の坂道を人の流れに押し流されるように、ゆっくりと進んだ。与兵は峰の行った方を振り返った。一瞬峰のうしろ姿を見つけたが、峰は人に押されてつまずくような格好で林の陰に見えなくなつてしまつた。

与兵は、身重の体の峰が見ず知らずの人の中で、

どんなところでどのようになされるのかわからないことを考えると、不憫でならなかった。与兵の脳裏に、つまづくようにして見えなくなつた峰のうしろ姿が焼きついて離れなかつた。与兵は、こみ上げてくるものを必死でこらえた。女々しいところを太平にも、周りの他人にも見られなくなかつた。

山の中には、下から見たのでは想像もつかないく

らい、たくさん建物があつた。どの尾根の上も平らに整地されて、大小の建物が並んでいる。それぞれ役割を持った建物らしく、武士や役人などが忙しそうに出入りしている。

与兵たちは役人に、住んでいる地区をきかれた。西浦だと答えると、あつちだと指示された。そこはやはり尾根を切り開いて建てられた大きな兵舎のよきな建物であつた。中はだだっ広い部屋であつた。

薄暗さに目が慣れてくると、すでに広い床のそここ
こに、何人もの男たちが車座になつて座っている。

その周りには彼らの荷物も雑然と置かれている。ま
た、座っている者たちの間をうろろと空いている
所を探す者の姿もあつた。与兵と太平も空いた場所
を見つけて腰をおろした。入り口の方で役人が叫ん
だ。

「これから入り口の横で、名前などを聞くから、一

人ずつ順に来い」

それを聞いて何人かがすぐに立ち上がって、入り口の方にいそいだ。すると次々と他の者たちもそれにならった。与兵と太平もその列の後ろについた。役人の前にはたちまち長い列が出来た。外に出ると、さらに続々とあらたに城に上がって来る者たちが続いていた。人々はほとんど口をきかなかつた。近くのもの者と話すときも非常に抑えた声で、短く言葉を交

わすだけであつた。

与兵は、行列に並んで待っているうちに少し落ち着いてきた。周囲を見回すと、一段低くなつたところも広く整地してあつて、大きな建物が建っている。その建物の前にも同じような行列が出来ていて、低く抑えた人のざわめきが聞こえてきた。与兵は、あすこでも同じことをやっているなと思つた。

一方太平は、少し違つた気持ちであたりを見回し

ていた。太平は、十年以上前にこの城の拡張工事に何度も駆り出されたことがあつた。城内に入るのはそれ以来だが、自分が工事にかかわつた場所の記憶を手繰つていたのである。全山に亘つてあらゆる尾根という尾根に建物が建ち、当時すでにその数は優に百を超えると聞いたのを思い出していた。自分が何処の現場で働いたのか、ここに立つても思い出すことは出来なかつたが、この山の中の異様な繁華ぶ

りは記憶に残っていた。

城に入った者の登録は、夕方まで続いた。この日は昼飯というものはなかった。少しずつ場慣れしてきたのか、みなの話し声が徐々に大きくなり始めた。夕方が近づくくと腹が減ったという声があちこちから聞こえてきた。特に百姓たちは、昼飯を食べるのが習慣だったからなおさらであつた。

山の中は、薄暗くなるのが早い。汗の乾いた体の

周りには蚊が寄り集まってきた。また点された灯火には羽虫が群がった。夜になって、何人かの足軽が握り飯と漬物、それに汁を運んで来た。白米の握り飯が板の上に山積みされているのを見て、どよめきがおきた。

特に声を上げたのは百姓たちであつた。みなはこの予想外の待遇に、争うこともなく整然と分け合つて、城での最初の晩飯を食べた。運んできた足軽の

一人が、みなに向かつて言った。

「あすまではこうして運んでやるが、あさってから
は自分たちの面倒は、自分たちで見ることになるか
らな」

足軽たちが帰っていくとあちこちで、ごそごそと
話し声が湧きおこった。与兵と太平は二人で向かい
あつて黙々と食べた。白米の握り飯はうまかったが、
分け前の二個では空腹を満たすことはできなかつた。

そこここから、腹の足しにならんといいささやきが聞こえる。

与兵は、峰がどうしているのかさつきから気になつてしかたがない。太平が察して、

「心配しても仕方がない。あつちでもここと同じように食い物が出ているじやろう。あすになれば、もう少しいろんなことがわかつてくるじやろうよ」と慰めた。

(三)

女たちの居場所にはもつと活気があつた。そこはやはり大きな建物で、広い土間にはかまどや水瓶など、どがたくさん並んでいて、炊事をする設備であることがすぐにわかる。そこに女と小さな子供が収容されたのである。女たちは、到着するとすぐ、飯炊きが命じられた。全体の指示をしているのは城の役人

らしい男だが、実際の作業を仕切っているのは、領民の中から選ばれた幾人かの女たちであつた。峰も、目立ち始めた腹をいたわりながらも、てきぱきと働いていた。こういうとき女たちは頼もしい。日々を生きていく術を心得ているのは男より女の方だということがわかる。

峰のまわりで直接指図しながら仕事をこなしているのは常（つね）という町屋から来た五十がらみの

女だった。常は、峰が要領よく仕事をしていることにすぐ気づいて、何かと頼りにするようになった。

たちまちいくつものかまどから煙が立ちのぼり、やがて飯の炊ける匂いがあたりに流れた。その尾根には、炊事用の建物が何棟も並んでいて、どの棟からも煙が立ちのぼっている。

腹を空かせた子供たちは、飯の匂いに群がって来て、早く食べたいと立ち働いている母親にまわり

つく。女たちはそんな子供を叱りながら仕事に追われていた。彼女たちは、自分たちが食べる分だけではなく、男たちの分も作っているのである。男たちの分を作り、待ちかねた子供たちには先に食べさせ、ようやく自分たちが食べる番になったのは、夜遅くになってからだ。共同で作業をしたあととあって、みな大きな声で喋りながらの晩飯であった。

「あしたはもつと人が増えるからね。そうしたらち

やんと組を作つて、当番を決めてやるからね。城での生活は長くなるかも知れないって聞いたから、みんな仲良くやろうね」

常はよく通る大きな声で、みんなに言つた。

薄暗い中で車座になつてぼそぼそ喋っている男たちと違って、ここでは顔見知りになつた者同士、困つたときはお互い助け合おうと確かめ合つていたのだ。峰はこの戦場のような炊事騒ぎで、与兵や太平

のことを考えるひまもなかった。彼女たちには、食事の後も釜洗いやかまどの後始末などの仕事が残っていた。峰が与兵のことに思いをはせたのは、それらがすべて終わって、さすがに疲れきった女たちの寝息が周囲で聞こえ始めたころだった。

しかし考えてもどうすることも出来ない。そのうち峰も昼間の疲れで眠りに落ちていった。女も子供もみんな疲れきっていて、一旦眠り込んでしまおうと、

蚊に刺されても気がつかないほどであつた。

郡山城での最初の夜が明けた。寝るときは蒸し暑かつたが、九月初めの山の朝はもう肌寒いくらいである。汗に汚れた着の身着のままの雑魚寝であつた。寒さで朝早く目が覚めた者も多かつた。子供を連れてた母親は、しつかりと我が子を抱き寄せまるまつて寝ている。

峰も寒さで目が覚め、起き上がってただだっ広い部屋の中を見回した。薄暗い中、そこら中にごろごろと人が転がって寝ており、所々でむっくり起き上がったたり、寝返りをうったりするのが見える。寝ている者はみな丸まっている。夜中からさかんに咳をする者もいた。

峰は、寝ている者をまたぐようにして建物の外に出た。外の空気はしつとりと冷たく、あたりは霧に

包まれて、すぐ近くの木々もぼんやりしていた。峰は与兵たちがどつちの方にいるのだろうとあたりを見回したが、林の中に建物があるのがわかるだけで、ものの音ひとつしない。峰の建物の中から、また咳が聞こえてきた。まだ日の出前であつた。

やがて日が昇り、みなが起き出してきて女たちの棟は賑やかさを取り戻しはじめた。日が照り始めると気温はどんどん上がって、まだ夏であることをみ

なに思い出させた。

おおわらわの朝食準備から城での第二日が始まった。昼近くから新たな入城者たちがぞろぞろと増えてきた。食事は朝夕二食だ。夕食の準備にかかる前に城の役人が、三、四人の部下を連れて峰たちの棟にやって来た。みなを集めて話を始めた。

「みんなよく聞いてくれ」

穏やかな声だった。峰は役人などというものは、怖

いものだと思つていたが、この人はずいぶんと優し
そうな役人だと思つた。

「きょうまでに城下の全員が城に入ったはずだ。城
には殿以下武将、兵士、役人、下働きの者など合わ
せて二千五百人ほどいる。それにこのたび城下の民
およそ五千五百人が城に入った。合わせて八千人が
この郡山城の中で暮らすことになる。城の者のこと
は城の者がやる。民のことは民にしてもらおう。もう

やつてもらっているが、民の炊事は炊事棟に入っている女たちで、これからの民の食事を朝晩作ってもらう。食料は、お前たちがこのたび持つてきたものと、城の蓄えを使う。籠城がいつまで続くかわからないから、食料だけでなく生活に使うものはすべて節約しなければならぬ。特に食事を作るお前たちが、そのことを守ってほしい。私がこの棟の世話をすることになった佐々木半（はん）兵衛（べえ）と

いう者だ。わからないことは、私かこの者たちに聞いてくれ」

と言つて、部下たちの方を指した。そしてさらに、「この城は簡単には攻め落とされないように出てくる。わが毛利の殿様が必ずお前たちを守つてくださるから、戦のことは心配しなくていい」

そう言った後、組を作つて交代で仕事をする手はずなどをこまごまと指示して帰つて行つた。

女たちは、さつそく新たに指示された方法で、夕食の準備を始めた。かまどの火を起こしながらでっぷりとした中年の女が、

「いい男じゃないか。あんたの方ばかりちらちら見てたよ。気に入られたみたいだね」

と峰の横腹を肘でつついた。この女は名を初（はつ）と言つて、峰とは親しいというほどではないが、同じ西浦なのでお互い顔は知っていた。峰は少し笑顔

を作っただけでその話には乗らなかつた。初は、

「ああ、あんたは評判の旦那思いだったよね。他の男なんか目に入らんよね。それはそうと、妊んでるんじゃない。何となくそんな感じだけど」と話題を変えて続けた。

「腹もそんな感じだし、なんとなく顔の感じがそんな風になつてるからね。女は腹に子ができると最初に顔つきが変わってくるのさ。一生懸命働くのはい

いけど、無理にならないようにしたほうがいいよ。

特に初めてるときは大事だつて言うからね。常さんに言つといてやるよ」

「すみません。でもつわりもあんまりないし、特にきついこともないですから」

「まあ、町屋の女みたいに身重だからと言つて、大事にしすぎて何もしないのはかえつてよくないって言うからね。だけど、転んだり重いもの持ったりは

よくないよ」

そばで聞いていた別の女が口を挟んだ。

「そうよ、わたしはいま子供が三人いるけど、その前に一人流したの。初めてはらんだときよね。まわりからは、わたしが働きすぎたからだつて言われたけど、ほんとにはひどい転びかたしたのが原因なの。それが三か月くらいときだったよ。その子がだめになった後、ずいぶん長いこと体の調子が悪かった

よ」

初が大きな息をついてから言った。

「それにしても、悪いときに作ったものね。まあ、仕込んだときには籠城になるなんて誰にもわからんものね。しょうがないか」

まわりの何人かが笑った。峰もつられて笑ったが、太平にも『ときがよくない』と言われたのを思い出した。自分たちではどうしようもない時の流れのせ

いとはいえ、心から喜べないことがつらかった。しかし、峰は先ほどの役人の、『戦のことは心配しなくていい』という言葉を感じたいと思った。

(四)

与兵たちが来て二日目の午後、ここにも城の役人

が来て話をした。その内容は、女たちのところに向いた役人の話とは少し雰囲気が違っていた。

「きょう、城下の全領民五千五百人が城に入った。もともと城にいる者を含めると八千人が籠城生活に入ったことになる。食料その他の物資はふんだんにあるわけではない。籠城が長引けば飢えに耐えねばならなくなる。だからいまからその覚悟で、すべて嚴重に節約していく。

尼子だが、偵察の報告によると、きょう昼前に風越山（かざこしやま）に陣を構えたいらしい。みなも知つてのとおりここから西に一里と離れていないところだ。その数三万ということだ。郡山城にいる兵は二千五百だ。もちろん近隣の同盟を結んでいる領主も共に戦うし、山口から大内勢一万がまもなく着陣することになっておる。しかし、いずれにしても樂觀はできない。

後ほど沙汰をするが、お前たちの中からも武器を
持って戦うものを募ることになる。そのつもりでお
るように」

二日目になると与兵たちの顔見知りの者も何人か
見つかって、話の輪は昨夜より広がっていた。男た
ちの間では、風越山まで迫っているという三万の尼
子勢のことが話の中心であった。太平はここでも考

え深そうに持論を述べた。

「風越山に入ったということは、おそらく二、三日は砦建設に費やすじやろう。わしら全城下が籠城したことはもう知つとるはずじやから、あいつらも慌てんじやろう。それに、郡山城の守りが固いことはとうに知つとるはずじや。いいかげんな攻め方はしてこんじやろう」

輪の中の若者が太平に聞いた。

「あつちが砦を作つとる間に攻めたらどうなんじや」

太平は考えてからゆつくりとそれに答えた。

「おそらく三万というのは、実際に戦う武将や兵士だけでなく、建設をする者、食料資材を運ぶ者、食事の世話をする者を合わせた数じゃ。敵の領内に深く入り込んでいるのじゃから、将兵は武装を解かずにいつ来るかわからんこつちの攻撃に備えとるはず

じゃ。全員が武器の代わりに槌を持っているわけじゃあない。だからその間に攻めて行ってやっつけてしまえというような簡単なもんじゃやない」

与兵は、太平がいつそんな考えを身に付けたのかと感心して聞いていた。すると別の男が言った。

「そりやあそうじやろうのう。じゃあ、わしらの殿様はどうするつもりなんじやろう。ただ城にこもつとれば、そのうちやつらが出雲に帰ってくれるわけ

じやなかろう」

「毛利の殿様は戦上手じや。これまでも少ない人数で大軍を負かしてきたお人じや。城にしたって、向こうはにわか作りの出城、こっちは本拠地じや。大内の援軍もじきに来るといふことだし、勝算があるのじやろう。わしら全員を籠城させたのも作戦じやろうて」

言うまでもなく、元就を中心に郡山城の中枢部に

は緊迫した空気が張り詰め、情報収集や作戦会議が休みなく続けられていた。それに比べると、籠城してきた男たちはまだのんきなものであつた。

太平たちの話題は、兵士を募るといふことに移つていった。ある男が言つた。

「戦に出る兵を募ると言つとつたが、わしらみたいな百姓になにをさせるつもりなんじやろう」

「百姓じやろうがなんじやろうが、槍を持って敵の

前に出る人間は少ないより多い方がいいに決まってるじゃないか」

「おしらじや、敵の兵士と渡り合ったらいちころじや。お前ら、尼子の新宮党（しんぐうとう）って聞いたことがあるう。鍛えぬかれとるいうことじやないか」

「いちころでも、ひと一人殺すのにはそれなりの手間が要るといふことよ」

若い男が、

「じゃあ、わしらは殺される為に戦場に出て行け言うことか」

と言うと、それを聞いていた腹の出た町屋の者らしい男が、

「いや、ちゃんと戦って相手を殺せばもつといいさ。お前さんみたいな若くて元気によさそうなのはがんばってちようだいよ」

とちやかすように言つた。

みなは少し黙つた。よく考えれば深刻な事態なのである。

与兵は、領民の義務として志願すべきではないかと思つたが、身重の峰を残していちころに殺されでもしたらと考えると、とても志願する気にはなれなかつた。与兵は、太平の意見を聞いた。

「こつちが二千五百しかいなくて敵が三万じゃあ、

わしらは少しでも加勢せんといかんじやろう」

と与兵が話を向けると、太平はいつもよりもつと長く考えていたが、

「志願したらどうじゃ」

と言った。

太平はそれ以上何も付け加えなかつたが、その言葉を口にするまでの長い時間に考えたであろう、たくさんのことを与兵も考えてみた。

与兵はさらに聞いた。

「毛利が負けたらどうなる」

「籠城しとる者を皆殺しにはせんじやろう。負けたときに首を斬られるのは、上の方の者だけじや。吉田は尼子の領地になるじやろうが、そうなくても町屋も畑も必要だし、そこで畑を耕して年貢を納める人間は必要じやからな。じやが、それは落ち着いてからののはなしで、初めのうちは、やつらは略奪の限

りを尽くすじやろう。それが戦の常じや。これまでわしらが見てきた小競り合いではそのようなことはなかつたが、今度のような戦ではそれは避けられんじやろう。命をかけて戦いに勝った兵士たちに褒美のつもりで、好き放題させるんじや」

「じやあ、峰もなにされるかわからんいうことか」
「そうなたたときには、無事ではすまんじやろう」
与兵は決心した。自分が武器を持って出て行けば

毛利の勝利に貢献できる、とは思わなかったが何もせずに成り行きを待つ気にはなれなかったのだ。

与兵たちの二日目の夕食も、白米の握り飯二つと汁と漬物であった。何もしない一日だったが、それだけではみなの空腹感はおさまらなかつた。

しかしそれ以上に大変なのは五千五百人分の排泄物だつた。一応棟には斜面に突き出した便所が作つ

てあるが、突然の大群衆にはとても足りるものではなかつた。それで、ほとんどの者たちは山の中に入つていつて用をたした。なにしろ大勢のことなので、たちまちそこら中が臭いはじめた。雨でも降れば多少は流されるのだろうが、この二日間是好天で、夕立もなかつた。

そうして男たちは、蚊と明け方の寒さに悩まされる第二夜を迎えたのであつた。

(五)

翌日、役人と兵士数人が志願兵を募りに来たとき、与兵は申し出た。午後になつて、志願した者は三の丸前に集まれという命令があつた。与兵たちの棟で志願した者は十数名であつた。みな三の丸がどつちの方にあるのかわからなかつたが、人に聞きながらたどり着くことが出来た。与兵たちのところからは

かなりの坂道を登らなければならなかつた。途中林を抜けるたびに、開かれた土地があつて、そこに大きな建物があるという同じような景色を何度も見た。また途中で、急ごしらえの寺のような建物の前を二つ通り過ぎた。

三の丸は、尾根を広く整地して、まわりに石塁を配した立派な建物であつた。そこから少しずつ高くなつた平地がいくつも隣接しており、それぞれの平

地にがつしりした建物が建っている。そのむこうの一番高いところに櫓が見える。与兵たちは、あれが天守かと見とれた。それは与兵たちの西浦からも屋根だけが見えていたものだ。そのあたり一帯は兵士や役人らしい者たちが忙しそうに行き交っていて、いかにも武将らしい姿もあつた。

与兵たちが三の丸の前に来ると、ひと目で百姓や町人に見える大勢の者が集まっていた。与兵たちも

その群れに入り込んだ。

「兄貴」

与兵はふいに声をかけられて振り向いた。次平がここにこ笑って立っている。与兵が声を出す前に次平が言った。

「兄貴が志願するとは思わなかった。親父に行けつて言われたんじやろう。兄貴はいつも親父の言うとおりじやからな」

「いや、わしの考えで来た。峰と腹の子を守るためじゃ」

「子が出来たんか」

「峰がそうゆうとる」

「そうか、とうとう出来たんか」

「おまえのところは、源（げん）と百（ひやく）は元気なのか」

「ああ、ここに来てからも元気にやつとるよ。なに

しろ源がいたずらばっかりで手をやいとるようじや
がの」

「四つつじやったかのう」

「やたらに元気で、百を困らしとるらしい」

「ここに来てから、もう会ったのか」

「あたりまえじや。兄貴まだ峰さんに会ってないの
か」

「どうやって会うんじや。わしは峰がどこにいるか

も知らんのじゃ」

「女子供は、ここからじゃとあつちの方角になるかのう」

と言つて、次平は南東を指差した。そして、

「あの辺に広い尾根があつて、炊事ができるようになった棟が並んどるんじゃ。そこのどれかで飯炊きをしとるはずじゃ。百は峰さんを見かけたつて言つとつたぞ」

「勝手に行つてもいいんか」

そのとき、前の方で武将らしい者が話し始めた。

「みんなよく聞け。きょうからお前たちは志願兵だ。毛利の兵士として規律を守つて、立派な働きをしてくれ。よき働きをしたものには褒美が与えられる。これから武器と甲冑を配るから順に受け取るように。それらの品は自分の命を守るものとして大切にすように」

与兵と次平は鎧兜に身を固めた自分の姿を想像しながら、武器支給の列に並んだ。支給されたのは、一本の槍と一着の甲冑、それに毛利の印のついた鉢巻と三足の草鞋であつた。甲冑は厚手の布で出来た金時の腹当てのようなもので、鎧などではなかつた。もちろん兜などあろうはずもない。足軽たちが被っている陣笠さえ支給されなかつた。

「これだけで戦に出ろと言うのか。『それらの品』と

はよく言つたよ」

次平は支給されたものを眺め回しながら呟いた。

「そういえば、兵士と言つても足軽はこんな格好をしてたじゃないか。わしらは、足軽より下なんじゃ。

まあこんなもんじゃろう」

と隣にいた者が次平に答えるように言つた。あちこちで、支給品の簡素さにあきれたり、がっかりしたりしたような声が聞こえてきた。

志願兵の群れは、次に兵舎に案内された。三の丸からはかなり遠く離れた尾根に作られた大きな三つの兵舎であつた。兵舎の中は足軽と思われる兵士でかなりいっぱいになっていたが、百人くらいいると思われる志願兵たちは、これら三つの兵舎に分散して收容された。志願兵たちが入っていくと、

「おっ、来なすつたな」

と足軽たちは興味深そうに新参者たちをじろじろ見

回した。与兵たちが自分の場所を探してうろろうろしているときに、外で大声に呼ばわりながら走っていく声がした。

「足軽隊は三の丸の前に集まれえ」

それを聞いた足軽たちは、素早く立ち上がり、あるいは寝そべっていた者は跳ね起きるようにして、壁に立掛けてあつた槍をとつて駆け出して行つた。志願兵たちは、その機敏な動きをあつけにとられて

見ていた。

「さすがじやのう」

だれかが感心して言った。

「これからは、わしらもああいう風に動かんにやい
けんのじやな」

と別の者が言った。

「戦に出て行くんじやろうか。ということはどうと
う始まったんか」

「わしらは行かんでもいいのか」

「呼ばれとらんじやろう。わしらは、足軽じやなくて志願兵じやからな」

そうこうしているうちに、先ほど呼び出されて飛び出して行った足軽たちが、ばらばらと戻ってきた。「上村（かみむら）と言ったらお前の家の方じやないか。家を焼かれとるのにどうして出て行かんのじ

や。やつら無人の町を我が物顔で荒らしとるんじゃないんか」

「殿様の作戦だというんじやから仕方がないさ」
帰ってきた足輕はこんな会話を交わしていた。志願兵の一人が足輕に聞いた。

「尼子が町屋に火をつけたんかね」

「火をつけたと言つても、二、三軒焼いただけらしい。殿様は、相手の挑発に乗るなど言つて、こつち

は動かんらしい」

夕食は白米の握り飯が三つ出た。それもきのう与兵たちに出されたのより一つ一つが大きかった。志願兵はみな喜んだ。三日ぶりに腹に足りた感じであった。与兵は、峰が腹をすかしていないか気になった。

城に入つた領民たちはわからないことばかりで、みなそれなりに緊張していた。しかし、もともと城にいた正規の兵士たちは少し違っていた。もちろん戦が近づいた緊張感は大きかったが、それを和らげる楽しみもあつたのである。

彼らは戦がないときは、四日に一度城下に住む家族のところへ帰ることが許されていたのである。ところが、尼子の大軍が出雲を發つたという情報が城

に届いてからは、ずっと城の中に足止めされていた。もうひと月近くになる。ところが全領民籠城で、離れ離れになっていた兵士の家族も城に来て生活を始めたのである。

夜になると、ごそごそ出かけていく兵士が何人もいた。家族に会いに行くのである。馴染みの女郎のところに行く者もあつた。みな同じ城の中にあるのである。

夜遅く兵舎に帰つて来た若い足輕がまわりの者から臭い臭いと言われている。よくみると衣服に人の糞らしいものがべつたり付いている。足輕は慌てて、外に出てその衣服を脱ぎ洗った。その足輕が戻つて来ると、何しててあんなものを付けたんかと問い詰められて、藪の中で女房と会っていたことを白状した。

「糞にも気がつかんほど夢中じやつたんか」

とひやかされた。

「暗いからのう。じゃが臭いでわかりそうなもんじや」

「籠城が始まってから、そこいら中が臭くなつとるから鼻がおかしくなつとつたんじやろう」
みながどつと笑つた。与兵もつられて笑つたが、心和むことはなかつた。

与兵は、横になつても大きく目を見開いて、太い

梁で組み上げられた暗い天井を見つめていた。それを見た次平が、

「あした一緒に峰さんを探そう」と言つた。

翌日も尼子による放火があつた。南西の方角に黒い煙が上がっているのが城の中からも、見えた。そつちの方に家がある者は気が気ではなかつたが、ど

うすることも出来ない。この日は一団の騎兵が甲冑に身を固めて城を駆け下りて行つた。火を放つている尼子の兵が少人数であることを見て、攻撃をかけたのである。

一時間もしないうちにいくつかの生首を馬の背につけて戻つてきた。出番のなかつた兵士たちは歓声を上げて迎えたが、志願兵たちは声もなくその光景を見守るだけであつた。生首は放火に出ていた尼子

の足軽たちのものであつた。それらは、三の丸の近くに晒された。

この騒ぎがあつたために与兵と次平は、この日峰を探しに行くことが出来なかつた。

晩飯を、足軽たちは何事もなかつたようにうまそうに食つていたが、志願兵の多くは生唾を飲み込むばかりで、なかなか飯を口に入れる気にならなかつた。中には一口も食べられず、吐きそうになつて慌

てて外に出ていく者さえいた。それを見た足輕の一人が、

「戦のときは、出された飯はちゃんと食つとくもんじゃないや。次にいつ食えるかわからんと思つとかんとな」と言いながら、外に出た志願兵の握り飯をひとつとつて食べてしまった。

与兵もこの日は食べられなかつた。血の臭いが鼻につき、皮膚がめくられて血がどす黒くなり、白い骨

がのぞいた生首の様子が目に焼きついて離れないのだ。首がぶら下げられた馬の腹に飛び散った血の跡も生々しかった。次平も食は進まないようだった。が、なんとか割り当ての握り飯三個を食べきった。

翌朝、年配の足輕が与兵たち志願兵を集めて、晒し首の前に連れて行つた。もう血は固まって、生首の顔色はみな青黒くなっていた。目をつぶっている

のも見開いたままのもある。若い志願兵がその場で嘔吐した。足軽がその若者を一瞥してから言った、

「お前らよく見ておけ。これが戦じゃ。これくらいで飯も食えんようじゃあ、戦は出来んぞ。しつかり見て肝を据えろ。びくびくしとつたら、こんどはお前らがこうなるんじや」

きのうまともに目を向けられなかつた与兵は、気持ち悪さを必死で我慢しながら生首の一つ一つを見

ていった。そうしているうちに、無残に斬られた傷とか血とかではなく、一人一人の顔が見えてくるのだった。ここにある顔は一樣に断末魔の表情だが、きのうまではそれぞれ自分たちと同じように生活してきたただの男じゃないか。妻子や親もいるはずだ。一つ一つの生首にはそれぞれの人生があつたのだ。与兵に、怖いとか気持ち悪いとかいう感覚はなくなつていった。そして、この中の誰かには身籠つてい

る妻がいたかもしれないとも思った。

与兵は、次平に峰さがしに一緒に行ってくれよう頼んだ。

(六)

次平は道をよく知っているという感じで、林や建

物が入り組んだ山道を何度も曲がりながらどんどん進んだ。朝晩は涼しくなってきたが、天気の良い日中はまだ暑い。早足で歩く次平の後を与兵は汗を流しながらついて行った。

やがて何段かに分けて尾根を広く開いた敷地に、大きな建物が三棟並んでいるところに出た。次平は与兵を振り返って、

「たぶん、峰さんはあれのどれかにいるはずじゃ」

と言った。与兵は自分の女房に会うのにどきどきした。

「わしはここで待っているから、行つて会つてきなよ」

次平に促されて、与兵はおずおずと棟の方に降りて行つた。次平はそのうしろ姿を一本の大きな木に寄りかかつて見ていた。与兵は怖いものでも覗くよ
うに、一つの棟の入り口から中をうかがっている。

そこに一人の女が出てきて与兵と何事か話していたが、女はもう一つ下の段の棟を指差しているようだった。与兵はその女に会釈して次の棟に行つて、また入り口からそつと覗いている。しばらくして女が出てきた。峰だった。二人は少しの間立ち話をしていたが、やがて与兵は峰に見送られるようにして次平のいるところに戻つてきた。

「兄貴どうしたの」

次平が聞いた。

「元気でやっているらしい。帰ろうか」

「峰さんいまひまそうだったじゃないか。わしはかまわないからもつと話したらいいのに」

「いや、いいんだ。中にいる女たちが声を潜めて、わしと峰の話を聞いとるんじゃないや。あんなところでは話なんか出来んよ。帰ろう。居場所がわかったからいつでも来られるし」

「また来るって・・・、兄貴もいつ戦に出て行くことになるかわからんじやないか。志願兵になったことは峰さんに言ったのか」

次平の問いに、与兵は、

「心配するから」

とだけ答えた。

二人は来た道を引き返し始めた。

「お前は、」

与兵が急に気がついたように、

「百たちに会わんでいいのか。やっぱりあすこのど
れかにいるんじやろう」

「ああ、百と源はもうひとつ下の棟よ。わしらは今
晚会うことになつとるんじや。食料倉庫の裏手にち
ようど縁のようになつて、屋根もついとるところが
あるんじや。わしが見つけた秘密の逢引きの場所よ。
いまからその近くを通るから教えてやるよ。兄貴た

ちもそこを使うといい」

数日は尼子勢による放火も戦鬪もないまま過ぎた。それでも城の首脳部は連日偵察を出し、作戦会議を続けていた。生首に震え上がった領民たちも、城の生活に慣れてきて、おまけに戦鬪もないとなると、たちまち緊張感はなくなってきた。

晒されていた生首は下ろされて、城中の谷間に埋

められ、南無阿弥陀仏と書かれた木の墓標が立てられた。

緊張の緩みもあつて、与兵たちの棟の志願兵同士が些細なことで喧嘩になり、ついに殴り合いが始まった。周りの者はその二人を取り囲んでわいわいけしかけるように見物していたが、役人が飛んできて二人を引き立てていった。二人は、三の丸近くの木にがんじがらめに縛られて一昼夜放置された。喧嘩

を戒めるための見せしめであつた。

与兵と峰は、次平に教えられた逢引きの場所で城に来てから二度目の対面をした。そこで与兵は志願兵になつたことを話した。そして、

「よほどのことがない限り、わしらが出て行くことはないそうだ」

と峰を安心させるために、勝手な作り話を付け加え

た。

「よほどのことつて」

峰が聞きながら、与兵に肩を持たせかけてきた。与兵は峰の肩を抱き寄せながら、

「そうだな、この城が落ちそうになつたときじやないかな」

「でも、このお城は大丈夫なんでしょ」

「誰かがそう言ったのか」

「ええ、わたしの棟のお役人さんが、戦のことは一切心配しなくていいって。そのお役人さん、佐々木さんていうの。とても優しそうな人よ」

「じゃあ、大丈夫なんだろう」

「ええ」

そう言いながら峰は与兵の腰に手を回した。与兵も峰を強く抱きしめたが、

「腹の子にひびくからだめじやろう」

と言つて抱く力を緩めた。峰は、

「大丈夫」

と言つて与兵を押し倒すように抱きついた。二人はしばし官能の中に溶け込んでいった。

与兵が志願兵の棟に戻ると、次平がニヤニヤしながら、

「どうだった」

と聞いてきた。与兵は、

「腹の子も元気らしい」と照れ隠しをした。

このころ与兵だけでなく、女房持ちはそれぞれ適当に逢引きをしていることが、それとなく雰囲気でわかった。また城に入った女郎たちは独り者を相手に、おおっぴらにはないが商売を始めていた。

戦鬪がない日には、与兵たちは土木作業に駆り出

された。便所の増設やごみ捨て場の穴掘り、それに城内の道路の補修や草刈りであつた。

静かな日は長く続かなかつた。尼子の大軍が城下に攻め込み町屋に大掛かりな放火を始めたのだ。城中からは何組にも分かれて応戦に出て行つた。すぐ目の前の城の下に広がる町屋とは言え、戦場に向かう者たちは、武将から足軽までみな頬に緊張の色を

宿らせ、呼びかけに応じて大きな声は出しているが、一様に怯えた目をしてしていると与兵は思った。この戦鬪に志願兵は参加しなかつた。

領民は自分たちの家が焼かれる黒煙を眼下に見ながら、尼子勢を罵つた。戦鬪の様子はよく見えないが、町屋で繰り広げられているらしい戦鬪の叫び声や馬のいななきは手にとるように城内に聞こえてきた。

数時間の戦いの後、

「勝ち戦だ」

と喚きながら兵士たちは帰城してきた。しかし、ほとんどの者は大きな喚き声とは裏腹に疲れきった顔をしていた。今にも馬から落ちそうになりながらころうじて鞍につかまっている負傷者もいる。徒歩の足軽たちの中にも同僚に両側から抱きかかえられて、引きずられるようにして帰ってきた者が何人かいた。そして、馬の背に結ばれたたくさんの敵兵の首。さ

らに、馬の背に乗せられた毛利方の武将の遺体もあった。放火された町屋の煙はまだ上がっていて、煙の臭いが城中にも漂っていた。

この疲れきった凱旋を目の当たりにして、戦というものの現実を見せ付けられた志願兵たちの中から、は声を出す者もいなかった。無言の志願兵たちは、いつかは必ずやってくるはずの自分たちが戦場に出る日のことを考えずにはおれなかったのである。

その日、与兵たちは敵兵の生首を洗い、髪を整えて検分のために並べる作業をした。はじめみな尻込みしたが、鎧は破れ傷ついたまままで命令する兵士の姿に、甘い態度が許されないと悟って、一人また一人と仕事に取り掛かった。与兵も生首三つくらいを洗い整えたが、一つやっつけてしまおうとその後は、まるで物を扱ふような感覚になった。しかし、与兵はその夜、胴体のない顔がしつこく自分に纏わりついて

何かを言いたそうにして迫ってくる夢を見て目を覚ました。振り払っても、うとうとしかけるとまた夢の続きが出てくるのだった。

また部屋のそこここで、傷を負った足軽のうめき声が一晩中止むことがなかった。与兵の棟には戦死した足軽はいなかったが、その日の戦鬪で毛利方には七人の戦死者があつたそうだ。

翌日、三の丸で戦死者たちの葬儀が行われた。志

願兵も葬儀に参列した。城中の寺の僧が経を上げた。

与兵は、戦死した武将の妻と思われる女が、葬儀の間中泣き崩れることなく毅然として前を見ている姿に打たれた。それを見ながら、自分が戦死したら峰はどういう態度を取るだろうかと考えた。

それからひと月あまり、偵察隊同士の小競り合いを除いては、放火も戦闘もなかった。

そうしたある日、早朝から尼子勢の列が静々と西の方から郡山城の真向かい、目と鼻の先にある三塚山（みつかやま）の山裾を通つて山中に入つて行くのが見えた。兵馬の列は半日経つてもまだ続いていった。郡山城の真向かいの、青山（あおやま）三塚山一帯に陣換えしたのだ。その日から出城の建設が始まつたと見え、連日槌音が風に乗つて聞こえてきた。木が切り倒されるところが見えることもあつた。た

ちまち大掛かりな砦が出来始め、その一部は郡山城からも見えた。

これを見た籠城の全員が、長期戦になることを感じ取ったのであった。そして、決戦の日が来るまでにはまだ三か月以上の月日が経過するのである。

(七)

戦鬪のない日が続くと、生々しい血なまぐささに震え上がった領民たちの緊張はあつけなく解けていく。女たちの棟では、初が身ごもっている峰を何とかばうことから、取り仕切っている常との折り合いがしつくり行かなくなっていた。そのせいか、常は峰にことさらきつい仕事を言いつけたりすること

があつた。だんだん峰や初に味方する者と、常の肩を持つ者に分かれていがみ合うようになった。そんなとき、担当の役人があることで峰の側に理があるような言い方をしたため、常はその役人にも何かと異を唱えるようになった。役人は、佐々木半兵衛であつた。

ある日峰がひとりで食料倉庫に物を取りに行くと、

半兵衛が中で貯蔵品を調べていた。入って来た峰に半兵衛が話しかけた。

「そちは常と反目しあっていると聞かすが、どうしてなのじゃ」

峰は、最近の常の自分に対するとげとげしい態度に悩んでいた。半兵衛が言っていることが何のことかすぐにわかった。

「わたしが身籠っているので、きつい仕事をさせな

いようにと常さんに言ってくれた人がいて、それが勘にさわったのだと思います」

「当たり前前のことではないのか。それだけでか」

「常さんは勘違いしたのだと思います。わざとわたしにきつい仕事を回していると言つて非難されたと思つて。それに、もともと一人で仕切っている常さんに不満を持つてる人もいましたから」

ここまで言つて峰は、自分が半兵衛に告げ口をし

ているような気がして口をつぐんだ。そして、

「いや、本当はわたしがちゃんとしないうからいけないのです。わたしは常さんを悪くは思っていないませんから、どうぞお気使いなく」

半兵衛は、

「そうか、それならよいが。狭いところで大勢の間が生活していると、何かとイライラがつのつて反発しあうようになることがあるものじゃ。このよう

な籠城生活では最も気をつけねばならんことなのじや」

そう言つて、自分の仕事の続きを始めた。

峰は、自分ごとき者のことを気にかけてくれる半兵衛に親しみを感じた。取りに来た物が高いところに載っているのを見つけて、背伸びしながら手を伸ばした。それを見た半兵衛が、

「それはわしが取つてやろう」

と言つて、峰のそばに来て手を伸ばした。峰も、

「大丈夫です」

とその場を動かかなかつたので、二人は接触した。峰は思わず一步後ろに下がつた。ここに来てから着替へも思うに任せないし、まともに体も洗つていない。汗臭い自分のそばに男が来るのが恥ずかしかつたのだ。しかし、女の体臭を感じた半兵衛は、いきなり峰を抱きすくめた。驚いて強く突き放そうとした勢

いで、峰は激しく尻餅をついた。半兵衛はそれ以上峰を追うことはせず、その場に呆然と立っていた。明り取りから差し込む光の筋の中を埃が舞った。峰は乱れた裾を整えて座りなおした。そして、半兵衛の方を黙ったままにらみつけた。

半兵衛は、崩れるようにその場に座り込んで自分の頭を抱え込んだ。しばらくそうしていたが、やがて顔を上げて、

「すまないことをした」

と言つて峰に頭を下げた。峰はそれには黙つたまま、立ち上がつてさつきとろうとした物に手を伸ばした。その瞬間、下腹部に激痛が走つた。

「うっ」

とうなつて腹を抑えてかがみこんだ。半兵衛は氣を取り直して、

「どうした」

と近づいたが手をかけることがはばかられたので、峰がとろうとした物を下ろしたただけで、峰から離れたままで、

「どうした」

ともう一度きいた。峰はゆっくりと手をつきながら立ち上がると、

「大丈夫です」

と言って、半兵衛に軽く頭を下げてから、下ろして

くれた物を持って倉庫を出て行つた。

峰は下腹部の痛みを必死でこらえながら自分の棟まで戻つた。部屋の自分の場所に崩れるようにうずくまつた。そのとき、自分の足を伝う血に気づいた。

流産であつた。城の医者が来て処置をしてくれた。医者は三、四日は安静にするように指示して行つた。峰は医者の言いつけどおり横になつて過ごした。四日目、常はもう簡単なことなら出来るだらうと言つ

て、峰に仕事を言いつけた。病人を駆り出さなくて
はならないほど人手が足りないわけではなかったが、
誰かが、峰にわざと重い物を取りに行かせたのが流
産の原因だとささやきあっているのを、常が耳にし
たための報復であつた。峰は起き上がろうとしたが、
また出血しだして起きることが出来なかつた。結局
常がどう言おうと、峰は仕事ができる状態ではなく、
さらに数日寝込んでしまった。

峰の流産は噂となつて、与兵の耳に届いた。与兵は峰の棟に出かけて行つた。峰は横になつていたが、その場に起き上がった。そして、

「すみません」

と言つて両手をついた。

「それよりお前の具合はどうなんじゃ」

与兵が聞くと、峰は涙ぐんだ目で、

「すみません。わたしが不注意だったの。体の具合

はじきによくなると思う」

「よくなると言つても、これからはどんどん寒くなるが、夜など寒くないようにしているのか」

「ええ、大丈夫」

しかし、十月の山の夜はそうとう冷え込み、峰だけではなく、寒さで夜中に目が覚めてしまう者も少なくなかった。あちこちの棟から、城側に夜具の追加を求めていたのだが、十分には支給されていなか

ったのである。

与兵は、峰が熱を出していると思つた。峰に会つた帰りに、佐々木半兵衛をたずねて、峰の具合がよくなさそうなので医者に見せてもらいたいと願い出した。半兵衛は、

「わかつた。早速手配をする」

と約束してくれた。与兵は、役人などに直接ものを言うのは初めてであつたが、親切で優しそうな半兵

衛の応対に感銘を受けた。

それから数日暖かい日が続いて、峰の具合は徐々によくなつていった。軽い仕事ならできるところにもなつた。

(八)

尼子勢が陣を敷いた三塚山、青山の一带は郡山城の真正面で、直線距離にすると二キロと離れている。山の木々は少しづつ秋の色に変わり始めている。両軍のにらみ合いが続いていたが、十月に入ると尼子の大軍が城下に繰り出して、また激しい放火を始めた。毛利側はこれを迎え撃つために大掛かりな出撃隊を組織した。

初めて一部の志願兵も参加することになり、与兵

は参加組になった。志願兵は棟あたり何人という割り当てにしたがって指名されたのである。駆り出された志願兵たちは、何の訓練の経験さえなしに実戦の中に放り込まれることになったのである。正規兵たちの後方に並んだ志願兵はみな青白い顔をしている。だがこわばった表情は正規兵たちとて同じであった。前の方で武将たちが入れ替わり立ち代り何かを喚んでいるが、与兵たちのところからは、その内

容が聞き取れない。そうしているうちに前の方が動き出した。そのとき近くにきた武将が大声で言った、

「殿ご自身も出陣されるぞ。手柄を立てた者には褒美がある。死を恐れずに一人でも多くの尼子の首をとってこい」

殿という言葉に、志願兵たちは一目元就の姿を見ようと伸び上がったたりしていたが、どこにいいのかその姿を捉えることはできなかつた。

足輕も志願兵も小走りに前進を始めた。城の下り坂を駆け下りるのはそれほど苦ではなかった。城下を見下ろせるところまで来ると、町屋のいたるところから黒煙が上がっている。炎も見える。前の方では早くも戦鬨が始まっているのか、ワーワーと叫び声があがっている。騎馬の武将が足輕や志願兵に東西に広く展開して進むように指示している。与兵たちは燃え盛る屋敷の前を通り過ぎて前進した。与兵

はまだ敵に会わない。

「広がれえ」

と騎馬の武将が叫んでいる。与兵はくいちがい交差の四つ角を右に取った。前の方を数人の足軽や志願兵が走っているのが見えたからだ。与兵は息が切れてきたが前に遅れないように休まず進んだ。

次の角を曲がろうとしたとき、何かにつまずいてもんどりうつて転んだ。つまずくというより足首を

捉れたような気がした。振り返った与兵はぞつとす
るような恐怖に襲われて全身がこわばった。鎧に身
をかためた武将が刀を支えによるよろと立ち上がる
うとしている。血の滲んだ鉢巻の四つ目結の印から、
尼子の武将であることは与兵にもすぐわかった。そ
の男は懸命に立ち上がろうとしているが、よろめい
て膝を突いてしまう。そうしながらも険しい眼光で
与兵をにらみつけている。与兵も槍を拾って立ち上

がったが、激しい動悸と足の震えで自分が地面に立っているような気がしなかった。武将はついに立ち上がったが、深手を負っていると見えて、よろめきながら顔を歪めた。そのよろめく動きが自分の方に向かってくるように見えた。与兵は、自分でも何を始めたのかわからないままに、槍を構えて武将めがけて突進した。武将の引きつった顔が一瞬与兵の目に入った。与兵は目をつぶって突っ込んだわけではな

かつたが、それと変わらぬほどほとんど何も見ていなかった。しかし、立ち上がりはしたものの一步も動けないでいる武将は、与兵のめくらめっぼうの槍に喉を突き抜かれて再び倒れた。与兵は慌てて槍を引き抜こうとしたがひっかかってなかなか抜けない。気が狂ったように振り回してやっと抜き取った。その間意識を失って白目を剥いたままの武将の首が右に左に踊った。与兵は槍先に付いた肉片や血を武将

の袴に擦りつけて拭いた。そのとき、味方の兵士が数人駆け寄って来て、与兵の血がついた槍の先に倒れている尼子の武將を見つけた。その首から噴出した血は地面に血だまりを作り、武將自身の頭を浸していた。兵士たちは、呆然と立ち尽くしている。与兵と武將をかわるがわるに見た。

後ろの方にいた兵士がいきなり武將に近づいたかと思うと、武將の髪を持ち上げて一刀のもとに首を

斬り落とした。兵士はその首をぶら下げて、

「尼子の武将の首を取ったぞー」

と喚きながら走り去った。残った者はみな足軽だったが、その様をあつけに取られて見ていた。

足軽の一人が、

「お前が討ったのか」

と聞いた。与兵は、

「いや、わしが通りかかったときにはもう誰かにや

られて倒れていたんじや。だが死んではいなかつた。よろよろ立ち上がってきたんで、無我夢中で槍を出したら首を突いてしもうたんじや」

「どうしてこんな武将がたった一人で倒れとつたんじや」

と別の足輕が不審そうに言った。もう一人の足輕が武將の倒れている後ろの家のあいた扉の中を覗いて叫んだ。

「おい、見ろ。すごい血じゃ」

みなは一斉に家の中を覗き込んだ。上がり口には大量の血が広がっていて、入り口の方に引きずるように血が続いている。

「斬られてここに逃げ込んで隠れたんじゃ」

「出て来たところを、こいつにやられたんじゃ」

足軽たちは、首のない武将が体につけているものを剥ぎ取って、先ほどの兵士の後を追った。与兵は

まだ立ち尽くしていたが、足輕の一人に促されてあとを追った。

この戦いで毛利勢は、尼子勢を三塚山の麓まで追い詰め十人以上の武将を討つて郡山城に凱旋した。

味方よりはるかに多い敵を追い帰したことに、城内は沸き返っていた。末端の兵士や足輕、志願兵にまで酒が振舞われた。だが与兵は浮かれる気分にはなれなかった。ブスツと柔らかいものに突き刺さる

自分の槍の感触と、武将の白目の顔が瞼から離れず、悪夢にうなされた。戦勝の酒が振舞われたとは言つても、与兵の棟のその夜は、負傷した者の苦痛のうめきや、初めての戦場での恐怖から抜けられない者たちのうなされる声は一晩中続いた。

翌日手柄の申請が行われた。戦闘に加わった者が、自分の功績を申し出て、それを立証する証人がいれ

ば、戦功が認められてその程度に応じた褒美が与えられるのだ。

与兵は、自分には関係ないことと思つて見物していた。一人の兵士が志願兵の中から与兵を見つけ出して、あの武将の首はこの男の手柄だと申し出た。与兵も、あるとき現場に居合わせた足軽たちも驚いた。てつきりあの首を取った兵士が自分の手柄にしたのだと思ひ込んでいたからである。しかし与兵は、

「いや、わしは首を取ったりしませんでした。わしが槍で突いたんですが、そのときにはもう死にかけていたんです」

と言つて手柄を否定した。

「そんなことはない、とどめを刺したものの手柄なんじゃ。遠慮することはない。名はなんと云うのじや」

兵士は与兵に促した。こうして与兵はけがの功名と

もいえるような手柄を上げてしまったのである。この兵士は足輕に近い下級の兵士であつた。

この戦いでは、郡山城から怒涛の勢いで責め下つた毛利勢に狼狽気味の尼子勢が腰砕け状態で敗走したもので、尼子側の油断が毛利側の勝因であつた。

これで籠城の者たちが元気付いたことは確かであつた。しかし、与兵はあの不快な感触が口の中にまだ広がって、何日も食べるものに味が感じられなか

った。それでも、『戦では、次にいつ食えるかわからんのじゃ』という言葉を出して、懸命に食べ物を口に押し込んだ。

郡山は日を追って寒さを増していった。

(九)

そのころ、城の中をうろつきまわる老婆がいた。みなから婆（ばあ）と呼ばれてその見当はずれの行動が心無い者たちのからかいの対象になっていた。婆がひよこひよここと通りかかると退屈した志願兵たちが、

「婆、婆、きようの気分はどうじゃ」と声をかける。婆は決まっつて、

「家に帰りたいたいんじや。家に帰りたいたいんじや……」

と際限もなく言いながら、その辺を歩き回る。その様子がいかにも間が抜けていておかしいのでみなが面白がつて笑うのである。

入り組んだ段差のある敷地に似たような建物が並んだ城中では、婆には自分の棟が探し当たらない。そんなとき優しく手をとって導くのが峰であつた。また婆は、しばしば失禁をした。暖かいうちはまだよかつたが、寒くなつてくると濡れた着物は冷たい。

洗濯をしてもなかなか乾かない。そういつた世話も峰はできる限りしていた。だから、峰が具合を悪くして寝ている間、婆はみじめな姿でほつつき歩いていたのだった。

婆には、一緒に籠城している嫁がいる。四十過ぎの後家である。ところがこの女は、城に入ってから兵士の一人と仲良くなつてしまつて、それに夢中になつて婆の面倒をろくに見ようとしなくなつていた。

婆が粗相をするとひどい剣幕で叱るだけで、汚れたものを始末してやることもしない。見かねた峰が世話をするのを好都合とばかり、自分はふいと男に会いに姿を消してしまふ。

この女を知る者の話では、以前はよく婆の面倒を見ていたのだそうだ。面倒を見ても見ても婆は、際限なく手を焼かせていたという。夜中でもふらつとどこかに出て行くし、自分の家に帰るにも家がわか

らず、よその家に入り込む。親切な人は、

「婆が来ていたぞ」

と連れて来てくれるが、親切な人ばかりではない。

「また汚いかつこうしてあがりこんできた。ちやんと見とかんか」

と怒鳴り込む者も少なくない。それでも女は一生懸命面倒を見ていた。ところが、一年ほど前に、夫が病で急死してしまった。女は後家になっても亡き夫

の母親である婆の面倒を見ながら暮らしてきた。そんなときのこの籠城であつた。ここに来ると、共同生活でなんとなく婆を見る目が多くなつたように感じたのだらうか、後家は少し婆から開放されたような気分になつた。

普段女気の少ない城に、大勢の女が入ってきて生活を始めたのである。兵士たちにとっては、下心がある者もない者も、老いも若きもみな女たちの品

定めをした。それぞれが、自分の気に入つた女の姿を探すようになっていた。あの棟の娘はとびきりのべっぴんだとか、あつちの棟の女はたまらん色気があるなどと話題にして楽しむのだった。しかし、だからといって実際に関係が出来てしまうという例はそう多くはない。共同生活では、みなのが目が届かない場所が少ないし、ほとんどの女には、別棟に夫がいる。若い娘には親の目が光っている。その点、こ

の後家の場合は比較的自由的な立場であつた。これまでの、婆相手の出口のない生活への反動のように、優しくしてくれる男にのめりこんでいったのであつた。

ところがあまり運に恵まれない女のようにあつた。後家と仲良くなつた兵士は、毛利勢が大勝し与兵が手柄を立てたあの戦で、毛利側わずか三人の戦死者の一人となつたのである。その夜後家は自分の棟に

帰つてこなかつた。そして次の朝、霜が降りそうな寒い北側の谷で、自分の腰紐で首をつつてゐる後家が発見されたのであつた。

「ばあを おねが いし ます」

とたどたどしく書いたものが、袂の中に入つていた。彼女が慕つた兵士は、戦死者として弔われたが、後家の方は自らが命を絶つた谷に程近い領民のための共同墓地に葬られた。領民としては籠城後始めての

死者であつた。

峰は、暖かい日は多少具合がよかつたが、寒い日が続くと調子が悪かつた。風邪気味になつたのがいつまでも尾を引いて微熱が続いた。そんな峰に、常は仕事をさせるのを諦めて、婆の世話だけをさせることにした。

ある日婆は馬の前によろけ出し、蹄にかかつて転

倒して動けなくなつてしまつた。骨折したのである。それから毎日毎晩、婆は痛がつて大声を出し続けた。同じ棟の者は、初めのうちは我慢していたが、あま
りひっきりなしに泣き続けるので、何とかしてくれ
と、世話役の峰に要求するようになった。だが峰に
もどうすることもできない。峰は婆に優しく声をか
けて気分を和ませようとするが、婆はかえつて大声
を出したりした。治療らしい治療など何も受けなか

った婆だが、日が経つと痛みは軽くなり、いざるようにして部屋の中を動きまわるようになった。

一方峰は寒さが増す中で、全く起き上がれない日が続いた。与兵は毎日一度は峰の様子を見に来た。そして何度も医者に来てもらう交渉をして、実際に医者が何度か診察にきた。しかし、峰の病気は悪い方に向かうばかりであつた。祈祷師も一度峰のために松明をたいて祈つた。百姓の女房の病に対しては

異例のことであつた。

その日も与兵が来て、二人は長い時間ぼそぼそと話していた。与兵が帰つたあと、初が様子を見に行くと峰はよく眠っているようであつた。そつとしておこうと初はその場を離れた。しばらくして、もう一度峰のところに行つたとき、まだ眠り続けているように見えた。しかし、峰がまったく顔の向きも変

えずに眠っているのを不審に思った初は、近づいて峰の顔を覗き込んでみた。顔にはまったく血の気がなく、かすかに開いた口から黄色い嘔吐物のようなものが流れている。そつと峰の肩に手を当ててみると、呼吸の動きがない。

峰は与兵が帰って行ってから、初が見に来るまでのわずかな間に、誰にも気づかれずに息を引き取ったのである。

知らせを聞いて与兵が駆けつけたとき、峰の髪にはきちんと櫛が入れられ、きれいなふとんに寝かされていた。与兵は、峰から二、三步離れたところで立ちすくんだ。与兵は、ついさつきまでお互いに姿を認め合い言葉を交わしたのに、いまは峰の固く閉ざした目も口も、自分に向けて二度と開かれることはないということに信じられない気持ちであつた。

周囲にいた者たちもこの悲しい対面を声もなく見

ていた。すすり泣く声も漏れてきた。やがて誰からともなく与兵と峰だけを残してその場を離れた。与兵は峰のそばにひざまずいて峰の手をとった。まだかすかに残っている温かみを感じた瞬間、与兵の目から堰を切ったように涙が溢れ出した。

城内の寺の僧侶が経を読んだ。北の谷にある領民の墓地に埋葬されることになった。自ら命を絶った

後家が埋葬されているところである。役人が木の簡単な墓標を与兵に渡した。佐々木半兵衛であつた。埋葬を手伝つた者や、親しかつた者の別れがすみ、みなが帰つて行つた後も与兵はその場を動かかなかつた。与兵はもう泣いてはいなかつたが、うつろな気持ちでただぼんやりとそこに座つていた。遠くから、城内のいつもの営みの物音が聞こえてくる。

『あの雷のわか雨の日に、子供ができたと告げら

れてから、たいして月日は経っていない。なんとあ
つけないのだらう』

与兵はしみじみと思った。そして、ふと峰とは関係
ないことが頭に浮かんだ。

『自分が突き刺したあの尼子の武将にも家族があつ
ただらう。でもその家族は武将が死んだことすらま
だ知らないかもしれない』

与兵は城に来てからたくさんの死を見てきた。農

作業の日々からは想像もできなかつたことだがここ
では、死は日常的事となのである。自分も戦場で
いつ死ぬかわからない。しかしいまは、死なずに人
を殺して帰ってきた。与兵は自分が人を殺したこと
に対する天罰で、自分の身代わりに大切な者が死ん
だのではないかという気がしてきた。

次平が与兵を迎えに来た。与兵があまり戻つて来
ないので、心配になつて様子を見に来たのである。

案の定与兵は、日がかげつてすつかり寒くなつた墓地に座り込んだままで、ぼんやり林の方を眺めていた。

「兄貴、寒くなつてきたからきようは引き上げよう」次平は与兵の心中を思いやりながら声をかけた。

「おお、お前か。そうしようか」

と言つて与兵はゆつくりと腰を上げた。次平は男の涙顔を覗き込むのを遠慮して、与兵の顔を見ないよ

うにしていた。

「病氣は悪い方に向かっていたようだし、医者も診てはくれたがどうにもならんかったみたいじゃ。これから寒くなれば、病氣で寝ている者にとってはおとつとつらくなるばかりじゃ。峰は楽になつたんだと考えることにしたよ」

与兵は、意外に悟つたようなものの言い方だつた。次平は、

「そうだね、兄貴がこれから元気にやっついて貰わんと、じいさんもいるしね」とありあわせの言葉を返した。

与兵は次の日も、その次の日も峰の墓にやっつて来た。そのころ城内の土木作業が与兵たちに課せられていたが、与兵はそれがすむとすぐここへやっつて来た。そしてただ長い時間座っていた。土にまみれて仕事をしているときも、一息つくたびに、ぼそぼそ

と弱々しい声で話す峰の面影が与兵の頭に去来した。最後に話したとき、峰は力ない小さな話し声だったが、あと何時間かで自分の余命が尽きると知っていたのだらうか。峰の最後の言葉は、『また来て』だった。与兵はそれを振り払うように、ことさら激しく働いた。

しかしここに座っていると、不思議に気持ちちが落ち着いて、峰の面影も現れてこない。

(十)

佐々木半兵衛は、峰の病と死が自分と無関係でないことを、峰が流産してそのあと病に伏せってしまったときから知っていた。そしてそのことで思い悩み続けていたが、誰にも打ち明けることもできずにいた。だから精一杯、医者に見てもらおうようはからった。もともと、城の幹部たちのための医者で、

領民の病氣を見ることはあつても、何度も一人の患者のところを足を運ぶなどめつたにないことであつた。半兵衛が必死に頼み込む姿に、どうしてもそうまでしてといふかる者もいたが、それでもしつこく医者に頼みつづけた。そのためになけなしの金品を医者に使ふことさえした。その結果医者は峰の枕もとに行つて、容態を見るだけにしてくれたが、それ以上のことはしなかつた。峰の病状が悪化するにつれ

て、半兵衛の悩みも深くなつていった。

峰が死んで数日後、半兵衛は兵士になることを志願した。彼が籠城の領民の担当として有能だったのでなかなか申し出は受け入れられなかった。しかし半兵衛の意志は固く、足輕でいいからとの願い出にとうとう認められた。

十月初旬に大きな合戦があつてから、ほとんど一か月近くも両軍鳴りを静めていたが、十一月に入つて安芸（あき）の銀山城（かなやまじょう）の武田勢が、尼子の援軍として襲撃してきて、毛利勢はこれを迎撃した。この戦いに佐々木半兵衛は早くも出陣したのであつた。この戦いでも毛利勢は勝ちを収め、わずかの負傷者だけで戦死者も出さなかつた。帰還した者達の間では、初陣の半兵衛は恐れを知ら

ない古強者のように戦ったという評判であつた。勢
いだけはよかつたが、半兵衛の戦い振りはいささか
無謀で見えていられたと言ふ者もあつた。

いずれにしても、敵の攻撃はさして執念のないも
ので、毛利勢に分ありと見るや早々と銀山城目指し
て退却したと、勝利して帰つた者たちの怪気炎がさ
かんであつた。この戦いに志願兵の参加は無かつた。
籠城が長引き、しかもいつ終わるともわからない

中、城中には疲労の色が見え始めていた。老人たちの中には、日増しにつのる寒さで体調を崩す者が増えていた。

この秋には目立った台風がなく、雨が例年になく少なかったため水の蓄えに不安が広まり始めていた。城中には井戸があるのだが、なにしろこの大人数の生活をまかなうために使用量が多く、その上少雨とあつてどの井戸の水位も下がり気味であつた。城中

には節水の通達が回り、体を拭くために湯を使うことが制限された。領民たちにとってさらに不自由な生活が始まったのである。また、雨があれば適当に押し流されるはずの八千人分の排泄物が溜まりにたまつて、城中は何処に行つても臭気芬々であつた。初めのうちはこのことにひどく神経質になる者もいたが、いつのまにかこの雰囲気に慣れてきたのか、苦情を言う者もいなくなつた。

与兵は、戦の無い日々を毎日のように峰の墓地で長い時間を過ごした。そこで泣き暮らすというわけではなく、そこに居ると落ち着くのであった。この季節になると木々は葉の数を減らして、林の中はやや明るくなっていた。そこに座っていると、北の方の山々が林を透かして見える。与兵は、声を出して峰の墓に話しかけたりはしなかったが、自分が心で感じたことは峰も共に感じているような気がしてい

た。与兵はぼんやりとではあるが、これから先どうなるのだろうかと思いをめぐらしていた。あの北に見える山のさらに幾百もかなたから来て、いまこの城のすぐ南に対峙している尼子の者たちは、何を考えているのだろうか。太平の解説によると、尼子は食料補給の道を確保しているはずだという。しかし、国を遠くはなれて敵地に深く入り込んでいては、たとえ飢える心配はなくても、心安らかなはずは無い

だろろうと思った。自分に殺された武将の家族はどうしているのだろろうか。どんな家族なのだろろう。与兵はあの武将の妻が、夫の戦死を知ったときのことを想像した。それに峰の死が重なって涙が溢れ出した。与兵はしばし感傷の中を彷徨うのだった。

また、戦鬪が無い日々が続くと、城に入った領民たちの間では、自分たちの問題が浮かび上がってくる

る。わずかな身の回りの物だけを持って籠城を始め
た者たちは、寒さに備えてはいなかった。そもそも
籠城が何か月も続くものとは思っていなかったの
である。籠城の期間についての発想が無かったと言
つてもいい。文字通り着の身着のままに来た者も多
くいる。低い山ではあるが、山中は日当たりも悪く農
地や町屋よりははるかに寒さがこたえる。城側から
多少の夜具の足しになるものや、衣類の足しになる

ものの支給はあつたが、十分行き渡るだけはない。その厳しさが領民たちの気持ちをとげとげしたものにしていった。これまでの合戦ではいずれも勝ち戦となっていたが、三万という尼子勢がたいした手傷を負っていないことはみんな知っていた。いつ敵の総攻撃があるかわからないという不安が籠城の領民たちの間には常にあるのだつた。

志願兵の中には戦鬪に出たときに、焼け落ちた民

家を目の当たりにした者が多く、自分の家が焼かれてしまったことを知っている者もたくさんいた。そういう者たちの落胆は大きく、妻を失った与兵と同じように大きな喪失感に襲われていた。

籠城生活にようやく慣れ始めたころのような、新しい生活を構築しようとする庶民の旺盛な生活力から来る一種の活気は、いまはなくみな梢を鳴らす寒風に身を縮めてうつむいていた。昼間も棟の中に臥

せつて、咳き込むばかりの老人がどの棟にもあふれ
ていた。

そんな中太平はひとり元気で、誰かれなく戦況の
見通しなどを話しかけていた。

「この戦は年を越すぞ。なぜなら、尼子は三万もい
ていままでこの城に攻め込まんということは、それ
だけいても攻め落とせんと思つとるんじや。つまり、
向こうも打つ手がいまのところ無いんじや。だから

こつちを城からおびき出そうとしとるんじや。じやが、わしらの殿様もそれを知つとるからうかつには出て行かん。これは相当長引きそうじや」

太平の周りに集まった者は、太平の話に感心して聞き入った。足輕の一人が話に加わった。

「山口から大内の大軍が助太刀に来ると聞いた。そうなればこつちから一気に攻めていけるんじやがのう」

別の足軽がいらいらした調子で言った。

「大内いうのはいつ来るんか」

「もうじきじやろ」

「もうじきじや、わからん」

「そんなことわしにわかるわけないじやろうが」

「わかりもせんことを言うな」

「なにい」

「まあ、落ち着け。大内が助太刀に来るといふ話は

ほんまじやろう。ただ、いつ来るかをはつきりさせるのはむつかしいのう。もしかしたら雪がのいた春になるかも知れんのう」

と、太平がみななのいらついたやり取りを静めた。

そうした間にも、敵兵ならぬ寒さが籠城の人々に襲いかかり始めた。十一月の半ばには早くも雪がちらつく日があつた。風邪をこじらせた老人が相次い

で二人死んだ。

そして真つ白に霜の降りた朝、峰の墓標の近くで婆が凍死しているのが見つかった。峰がいなくなつてから、婆の面倒を親身に見る者はなく、ただ食事だけが与えられる状態で放置されていた。泥と汚物と垢にまみれ、髪は鬼のように乱れ、異様に光るまなこで野良犬のようにうろついていた。その姿の婆を部屋に上げて、少しでも暖かいところで休ませよ

うという者はいなかつた。あまりのひどさに、体を拭いて着替えさせようと思つた者もいなかつたわけではないが、その救いの手が差し伸べられたとき、婆は危害を加えられると思つたのか、その手に噛み付いたりして激しく抵抗した。仮に着替えさせたとしても、すぐに糞尿を垂れ流しにすることをみな知っていたので、それ以上手を差し伸べることはなくなっていた。

そのうち寒くなつて、婆が棟の中に入ろうとする
と、追い払うようにさえなつた。婆は、縁のある軒
下で筵をかぶつて寝るようになった。夏の間、与兵
や次平が妻との逢引きに使つた場所である。

籠城の人々の寒々とした気持ちに追い討ちをかけ
るように、赤ん坊が死んだ。若い母親は、その埋葬
を拒んで三日間死んだ子を抱き続け、自らも飲まず
食わずで衰弱していった。夫の説得でやつと埋葬し

たときには、赤子の遺体は腐臭を放ち始めていた。

このことで次平と百は、五才になつたばかりの我が子源に細心の注意を払つて守ろうとした。領民担当の役人に金を渡して、特別に源のための着るものを回してもらつたりもした。与兵はこのことに不満であつた。

「自分の子供だけがぬくい思いをして平気なのか」と次平に文句を言つた。

「わしには、ここにいる子供みなに着るものを調達することはできん。それにみなやっていることじゃ」と抗弁した。与兵は、

「役人にわたす金の無い親の子はどうすればいいんじゃ」

「そんなこと言つても、自分の子は自分たちで守るしかないじゃないか。じゃ、兄貴役人にかけてあつてみるよ」

「おう、そうする」

もともとはそのようなことをしない与兵であつたが、峰の時にはなりふりかまわず半兵衛に医者を頼み込んだことを思い出した。次平がそのことを引き合いに出したわけではなかつたが、与兵自身はあのとときの自分の行動を思い出してはつとした。だが、行きがかり上憤慨しながら出て行つた。与兵は役人に掛け合つたが、埒があくはずもない。実際に城に

はそれほど余裕はなくなっていたのである。与兵は無力感に打たれた。すぐに次平のいるところに帰る気になれず、墓地に向かった。このまま弱い者が犠牲になっていくのを、ただ見ているしかない状態を考えると、与兵は絶望的な気持ちになっていた。いまは峰を失った自分よりもつと気の毒な者たちがいる。与兵は悲しみよりも、やり場の無い怒りを感じた。突然後で声がした。

「どうしようもない時というものはあるものじゃ。気を落ち着けて時を待つしかないんじや」
太平であつた。

(十一)

十二月に入つて間もなく、伝令の騎馬が忙しく出

入りしたあと、東の方角から勢いのいい陣太鼓の音に混じって、法螺と喚声が聞こえてきた。兵士が息を切らせて、領民たちの棟にも知らせて回った。

「みな喜べ。いまみなも聞いたと思うが、大内一万の援軍が山田（やまだ）中山（なかやま）に着陣したのじゃ。もうこれで大丈夫じゃ。決戦も近い。みなもがんばってくれ」

領民たちからも喚声が上がった。久々に活気のあ

る場面であつた。だが、その後もやってきたのは決戦ではなく、郡山の城を凍えさせる雪であつた。

大内勢の到着によつて、大きな戦鬪が間近に迫つてゐることは誰の目にも明らかであつた。そうした緊張をはらんだまま年の瀬が迫つてきた。城内では質素ながら年越しの準備が行われた。餅もつかれた。元旦には兵士も志願兵も領民もそれぞれの場所で簡単な儀式が行われた。このときも兵士は軍装を解か

なかつた。年末には何日か雪が降つたが、正月三日は晴天が続いた。

正月三日に早くも尼子勢が城下に進出してきたので、毛利勢も出撃した。このとき与兵も参加した。二度目の戦闘参加である。与兵は味方の後方について進んで行くうちに、敵兵を見ることも無く、戦闘は終わった。このとき毛利側は尼子の兵士の首十個

を持ち帰ったが、味方に死傷者はなかった。与兵は敵兵とあいまみえなかつたことでほつとした。怖いからではなく、相手を殺すことになるかもしれないことを恐れたのである。味方の後方でうろろろすることは多少の後ろめたさはあつたが、志願兵の多くは前線に突出する足軽などの後にいる場合が多く、相手と槍を交えて戦うことよりも、資材を運んだり、負傷した味方の兵士を介抱したりする役が割当てら

れていたのである。

そうは言っても白兵戦であるから、前方も後方もなくなることは常で、敵とぶつかれば戦わざるを得ない。この戦鬪のように味方優勢で展開している場合は、与兵のように敵の姿さえまともに見ないうちに戦鬪が終わってしまうこともあったのである。

与兵は、戦鬪に関しては前回のような衝撃的な体験は何も無かったが、町の荒れた姿には強い印象を

受けた。全焼して炭のようになった柱が数本残っただけの家、半分焼けて焦げた家具に融け残った雪が積もっているもの、焼けてはいないが、入り口が壊されて中を荒らされたような家など、人気の無い死の町と化した中を通って戦鬪場所に向かったのであった。野良犬の群れが走るのも何回か目にした。

その夜、棟の隅で四、五人の男が額を寄せ合って

何事か相談していた。それが与兵の寝場所に近いところだったので、

「今晚だな・・・」

と言っているのが聞こえた。与兵が何気なくそちらを見たとき、中の一人と目が合った。その男は与兵からなかなか目を離さない。与兵の方が目をそらすと、男は小声で与兵を呼んだ。与兵は気が進まなかつたが、呼ばれた方に近寄った。目の合った男が言

つた。

「いま、ここにいる者で、今晚町の様子を見に行く相談をしているところだ。みな自分たちの家がどうなっているのか知りたがっているからな。わしらで調べて来てやろうというんじや。お前も一緒に行かんか」

与兵は、

「いや、わしは町屋の者じやないし、行かんよ」

と断つた。男はなおも、

「『行かんよ』じゃない。わしらの相談を聞いたからには、一緒に行つてもらわんと困るんじゃない」
と声をひそめてはいるが威圧的に言った。そして、
男たちは与兵の腕を抱えるようにして外に出た。

外は半月が寒々と輝いていて、かすかに足元が見える。城内には要所要所に見張りがいて、領民が立ち入りを認められてないところに入ろうとすると制

止される。もちろん城外に出ることは固く禁じられている。そのことを与兵も男たちも知っている。男たちは棟を出るとすぐ藪の中に入って進んだ。しかし、藪はすぐ開けて別の建物のところに出る。開けたところに出る前に様子をうかがって、誰もいないのを確かめてからそつと建物のそばを通り抜けて、またすぐ藪に入る。与兵は一人の男に手を掴まれたまままで歩いた。

与兵は、籠城者の中に夜陰に乗じて城下に降りて空家で目ぼしい物を物色する者がいるという噂を聞いたことがある。彼らの行動がお互い暗黙の了解のうちに進められているのを見て、もしかしたら彼らがあき家荒らしの一味かもしれないと思った。そうだとすると、自分は一味に捉われの身になっていることになる。男たちは城の東側の急な藪の斜面を下って街道筋に出てから、山裾を迂回して町屋に入っ

た。誰もいないはずの町だが、辺りに目を配りながら家の陰を伝うようにして進んだ。大きな商家の前で男たちは顔を見合わせてうなずきあつた。与兵はまだ手首を掴まれたままである。玄関には嚴重に錠がかかっている。みな軽がると低い塀を乗り越えて庭に入った。与兵も乗り越えさせられた。男の一人が懐から匕首のようなものを出して閉ざされた雨戸の隙間に差し込んで戸を持ち上げるようにしてから

一枚はずした。男たちと与兵は草鞋のまま家の上上がりこんだ。誰かが山を降りるときに人糞を踏んだらしく、さつきからひどく臭かったが、誰もそんなことにかまっていない。暗くてよくわからないが、おそらく畳に泥と人糞の足跡をつけながら、物色し始めた。どこで調達したのか、手持ちの明かりが点された。鍵のかかった箱は打ち壊して中を調べた。

無人の町で、夜盗の一味は悠々と時間をかけて仕

事をした。その間与兵は掴まれていた手を離され、ひとりほったらかされていた。だから彼らの仕事の中に、城に逃げ帰えることもできたかもしれない。だが、そうはしなかった。と言うより、できなかつたのだ。男たちは仕事に熱中していたが、与兵は相変わらず目に見えない呪縛にかかったようにその場に立ったままであった。悪事を黙って見ていることに自責の念はあつたが、彼らに盗みをやめろと説得する

勇気など無かった。寒さと怖さで足が震えていた。とんでもないことに巻き込まれたという思いが与兵の頭の中を駆け巡っていた。

仕事をすませたとき、最初に視線の合った男が与兵に押さえた声で言った。

「お前さんもこれでわしらと同罪じゃ」

「わしは何も盗まんかった」

与兵はやつとこれだけを言った。

「盗まなくても、わしらが仕事をしている間だまつて見ていたじゃないか。それが同罪ということよ」

男の一人が、仕事のすんだ部屋の畳の上に放尿した。小さくせせら笑う声が聞こえた。外に出ると、来たときと同じように誰もいない町を用心深く身を隠しながら建物から建物へと伝いながら城の東麓に向かった。そのとき、三人の人影が前方を走った。一人が囁いた。

「なんだ、お仲間じゃないか。何処の棟のやつらじや」

「いままで出会ったのは尼子のやつらばっかりだったが、いまのは吉田の者じや」と別の男が言う。

「忍び込んだら尼子のやつらが先に仕事をしていたときには、肝を冷やしたよな。でも結局仲良く一緒に仕事をすることになったのにはわれながらあきれ

たよ」

「静かにしろ。それにこいつの前でべらべら喋るんじゃない」

首領格の男が制止した。与兵と目の合った男である。いま来た町の方で犬の吠える声が聞こえる。犬が吠えるのは城の中にも時々聞こえていた。しかし、いまこうしてその現場にみると、これまで遠くで聞こえていたのとは違った生々しさがあつた。

城の山は黒々と盛り上がっていて、与兵にはさつきどのあたりから降りて来たのか見当がつかなかった。昼間だと祇園社の大杉が目印になるのだが、いまはその杉も背後の森の黒さに紛れてまったく見分けがつかない。男たちは、そんな中でも少しも迷うことなく降りてきた藪の辺りまで来た。そのとき、誰かがさつと合図すると山の藪とは反対側の可愛川（えのかわ）の川原の方に走って身を隠した。息を

潜めていると、四人の兵士が城門の方角から歩いてくるではないか。四人の兵士は、与兵たちが取り付こうとした藪の前を通り過ぎてさらに北の方に歩いて行つた。しかし、男たちは川原の枯れ草の中に隠れたまま動こうとしない。

与兵は体の芯まで冷え切つて、震えが止まらなくなつていた。男たちも寒いらしく、手をこすり合わせたり、頬をこすつたりしている。首領格の男が、

「しずかにしろ」

と強く囁いた。さっきの四人が戻ってきたのだ。四人が城門の方に去ってだいぶ間を置いてから、与兵たちは川原を出て山の藪に入り込んだ。このように夜中も城の周りを自軍の兵士が見回っていることを与兵は知らなかった。考えて見れば当然のこと、見回りは敵の潜入を見張っているのである。それとも籠城中の領民が夜な夜な夜盗を働いているのを

知つてそれを見張つてゐるのだろうか。

藪を登つていく途中、後からがさごそと誰かが登つてくる音がする。みなが息を殺して身をかがめていると、近づいてきたのは女二人であつた。女たちも前を行く足音に気づいていたと見えて、

「収穫はあつたのかね」

と、なれなれしく声をかけてきた。

「おまえら、何しに行つてたんじゃ」

男の一人が聞いた。

「尼子の陣地に決まってるじゃないか。あつちは国を遠く離れてずっと寂しい生活しているからね」

「ああ、そっちの仕事ね」

男たちは声を殺して笑った。

「笑うのは勝手だけど、わたしらは大事なお役目で行ってるんだからね。お前さんたちのこそ泥と一緒にしないで貰いたいわ」

「お役目ってなんじやい」

「そうさ。槍を持った偵察隊なんかじや、遠くから見て、『まだ動きが無いらしい』とか言ってるだけでしよ。わたしらは、敵のお偉いさんの寢床まで入り込むんだからね。それに腰をひとひねりするだけで、べらべら戦のことを喋るばかりがいるからね。これから城に帰ったら、さっそくこつちのお偉い方に報告さ。先に行くよ」

女たちは立ち上がって登り始めた。その後を追うように男が聞いた、

「よくこつちに帰って来られたな」

「あたりまえさ。この城に籠城しているなんて言ったら、その場でぐさりさ。よその村の者ってことになってるのさ。わたしらはあほじゃないからね」

二人の女は身軽に暗い林の斜面に消えていった。

何事も無かったように、その夜は更けていった。

与兵は自分の寢床で、目を開けて天井を見つめていた。なかなか寝付けないのだ。こんなにひしめいて同じ屋根の下で三か月も暮らしているのに、自分が知らない世界がすぐ身の回りに、まるで背中合わせのように存在していることを知ってすっかり頭がさえてしまっていた。

与兵は、空家での窃盗よりも女郎たちの台詞の方

が生々しく頭に残っていた。そう言えば、自分は峰が元気なときにも城に来てから一度しか情を交わす機会が無かったが、周りの者はそれぞれ適当にやっているようなのである。若い独り者も、妻子が籠城組みの中にいない兵士たちもそんなに不自由していかないようであった。考えて見れば、吉田の町にたくさんいた女郎たちも一緒に籠城しているのだからそれもさして不思議なことではない。そんなことを考

えているうちに与兵は久しぶりに情欲を感じてなか
なか眠りにつけなかつた。

(十二)

それからまもなく大内勢が、郡山の西に尾根続き
の天神山に陣換えをした。大内の大軍は可愛川（え

のかわ)を渡り、郡山の真下の道を延々と兵馬の列を連ねて通り過ぎていった。籠城の領民たちのところまで、蹄の音、荷車のきしむ音が半日聞こえていた。

この様子は、向かいの三塚山の尼子側からも丸見えであったろう。決戦近しの緊張感が両城中に広がった。それからは大内と毛利の間に伝令の兵士が忙しく出入りし始めた。

翌日与兵たち志願兵を含めた全員に集合がかかった。何段にも段差をもつて並んだ建物の周囲の空き地という空き地に兵が満ちた。一番高いところで武将らしい者が、大声で話し始めた。武将のところからはるかに遠く低く離れたところにいる与兵たちには、声だけは何とか聞こえてきたが、話の内容は聞き取れなかった。前の方からさささやき声で伝わってきたところでは、

「あすの朝、全軍で総攻撃をかける。全員きょう中にその準備をしておけ」といふことであつた。そして、

「きょうのうち、妻子に会っておけ」とも言つたそうである。

与兵が戦に出るのは三回目になる。九月初めに城に入つて以来、正規の兵士たちは入れ替わり立ち代

り城を出て行って、そのたびに敵兵の首を幾つもぶら下げて帰って来ていたし、自軍の負傷者や戦死者を連れ戻ることもあった。そうした期間、城に来てから兵士になった志願兵と領民の男たちは、戦鬪よりも城内での土木作業に従事することがほとんどであつた。

その日の夜、与兵は峰の墓地に行った。峰が埋葬されたところに行つても、与兵は特に手を合わせる

でもなく、そこに座つてぼんやりするだけであつた。この日吉田地方は寒気が厳しく、与兵はたちまち手足が痺れるように冷たくなつてきた。たまらず立ち上がつて、手を擦り合わせ、足踏みをしながらもまだその場を離れなかつた。

与兵はあすの戦鬪はこれまでの二回と違ふような気がしていた。大内勢との共同の作戦に違ひないから、尼子側も大軍を出してくるだろう。これまでの

小競り合いでは、彼らはあまり本気で戦闘しているようには思えなかつた。きつと満を持して襲い掛かつてくるだろう。もしかしたら自分の命はきょうが最後かもしれない。それでもいいと与兵は思った。もう峰はいないし、子供もいない。父太平はまだ元気でしつかりしているし、次平だっている。だから自分がいなくなつても何とかやっついていくだろう。そう考えると、気が楽になつた。怖さもあまり感じて

いないような気がした。

頭上で人がうめくような音がして与兵はその方を見上げた。周りの背の高い木が風にゆつくりと揺らいでいる。ときどき隣りあつた木の枝が擦れ合つて音が出ているのだつた。見上げた空に丸い月が冷たく冴えた光を放っている。

「満月か」

与兵は独り声に出して言った。白い雲のかけらが足

早に丸い月のそばを通つていく。月のほうが動いて
いるように見える。与兵はしばらくその光景を眺め
ていた。月も与兵を覗き込んでいるように思えて、
与兵は目が離せないような気がした。しばらく傍を
通る雲がなくなつて、月は止まったように見えた。
じつと月と向かいあつていた与兵は、ふいにこみ上
げてくるものを抑えきれずに慟哭した。ひざの上に
頭をうずめて泣いた。峰が死んでから溜まつていた

涙がすべて流れ出たかのように与兵は長い時間泣いていた。梢がまたうめくような音を立てた。

その晩、与兵の棟では寢床に帰ってくる志願兵が少なかった。後で聞くとみな妻子のところで一晩過ごしたのだそうだ。こんなことはこれまで一度もなかった。そのことでも、これまでとは違うという緊張はいつそう高まった。

総攻撃の朝、集合した者たちは志願兵も、正規の兵士たちもみな無口だった。城を抜け出して行つて町の屋敷に入り込んで盗みをした男たちも、今朝は青白く緊張した表情で槍を持って突つ立っている。甲冑に身を固めた武将がはるか上のほうで何か喚んでいるが、何を言っているのか全く聞き取れない。与兵の周りの者はみな、ただぼんやりそちらを見ているだけで、話の中身を聞き取りたいと思つてゐる

者など一人もいなかった。だれもが、まもなく死ぬかもしれない場所に突き出して行くことがわかつていて、それ以外に知らなければならぬことなど何も無かった。志願兵たちは、これからどのような場面に出くわすのか、わずかな経験の中から想像してみるのが、具体的な場面を思い浮かべることではできないでいた。ただ恐怖感だけははつきりしていて、寒さのためだけでない震えで奥歯がカチカチ鳴った。

与兵もやはり震えていたが、自分にはいま恐怖感
は無いと思つていた。

前の方が動き出した。そのとき突然、

「わあー」

と泣き喚くような大声を出して、若い男がすぐそば
の棟の中に走りこんだ。あまりに突然だったので周
りの者たちもあっけに取られ、立ち止まってそちら
を見た。すると、甲冑の武将が二人その男を追つて

棟に駆け込んだと思う間もなく、

「ぎゃあ」

と一声聞こえて静かになつた。やがて二人の武将が、藁人形のようにぐったりした若い男を両側から抱えるようにしてみなの前に出てきた。そしてその場にその男を放り出した。男の袖口から大量の血が流れ出ている。一人の武将が言った。

「よく見ておけ。これが怖気づいた者の最期だ。こ

うなりたくなかったら、戦場で戦え」

その若い男をそこに放置して、みなは前進を始めた。この一瞬の出来事を目の前にして与兵は氷のよ
うな恐怖感が全身に走った。段差のある通路でつま
ずいて転んだ。後から来た者も与兵につまずいて転
んだ。しかし、

「うっ」

と小さく声を出しただけでだれも口をきかなかつた。

与兵たちは一気に駆け下りて、正面から城を出ると右の方に向かって走った。すぐに前方からガチャガチャと音がしたかと思うと、甲冑に身を固めた武将が騎馬の早足で、いま与兵が来た方にすれ違つて行く。それに無数の騎馬の武将と小走りの兵士が続いた。天神山の陣地から作戦上別の場所から尼子を攻めるために移動する大内の軍勢であつた。一昨日、陣替えて郡山城の麓を半日かけて大内勢が天神山に

向かったことは、与兵も知っている。しかし大内勢の姿を直接目にするのは、みな初めてであった。甲冑騎馬の武将の表情は確かめようも無かったが、彼らに比べて軽装の下級兵士や足軽は表情を隠すようなものは何もつけていない。みなこわばった表情をむきだしのまま、小走りに騎馬の武将を追いかけて行く。彼らの部隊でも急に怖気づいてその場で処刑された者がいたのだらうか。それとも、あんなこと

をするのはにわか作りの志願兵だけなのだろうか。与兵は引きつったような生気のない無数の顔とすれ違いながら、相手からも自分が同じように見えてい
るのだろうかと思つた。

大内勢の長い列とすれ違い終わつたと思つたら、前方がにわか騒々しくなつた。前進していた与兵たちは、前の方から押し戻されるような形で退却し始めた。しかしすぐに、こんどは怒涛の勢いで前進

になつた。与兵が多治比川（たじひがわ）の土手の近くに達したとき、向こう岸を埋め尽くす尼子の軍勢が見えた。まだ逃げ遅れた数人が水しぶきを上げて川を渡っている。

やがて、毛利側の騎馬の武将が一人馬のまま川に一步乗り入れて何事か、尼子勢に向かつて怒鳴つた。そして見方の兵士が、

「わーっ」

と喚声を上げた。すると向こうからも華やかな甲冑の武將が進み出て大声で喚き返した。

「われこそは吉川（きつかわ）興経（おきつね）……」
と言うのが与兵たちのところにも聞こえてきた。それを聞いて、与兵の周りもどよめいた。あれが音に聞こえた猛将興経かというどよめきであった。両軍ともしばしにらみ合つて動かなかつた。しかしやがて興経の軍勢が川に飛び込んできた。前の方で誰か

が、

「引けー」

と叫ぶと、

「引けー」

という声が順送りに後ろの方まで叫ばれて、与兵の周りは一斉に退却し始めた。山裾まで引いたところで、反転して興経軍に戦いを挑んだ。前線は横に広がって、与兵もすぐ前に敵兵がいる位置になった。

与兵は味方の兵士のやや後ろから槍で身構えた。すると興経軍はまた退却をはじめ、川を渡つてさらに奥まで下がつた。今度は相手が山を背にした戦いになつた。そのとき与兵は、敵味方入り乱れて槍を交えている位置からはやや後方にいて、槍を構えながら恐る恐る前に進もうとしていた。

戦の砂煙の向こうに山が見える。その山の麓に小さく何軒かのあばら家が見える。与兵は自分の家が

焼かれもしないで、五か月前に出てきたときと同じように、ひっそりと覆い被さるような木の陰に建っているのをはつきりと見ることができた。ただ、出てきたときにはうつそうと葉を茂らせていた木は、いまはすっかり葉を落としていて与兵の家はよく見えるようになった。誰かにこのことを知らせたかと思つたが、そのとき敵兵に押し込まれてきた足軽がぶつかつてきた。追つてきた敵兵は、相手が与

兵と二人になつたのを見て引き下がった。味方の足軽はそれに勢いづいてあとを追つた。

このようない進一退が繰り返されたが、与兵の周りで殺したり殺されたりは不思議と無かつた。ときには長いにらみ合いがあり、またときには両軍遠くはなれる場面もあつた。

時間はどんどん過ぎていった。与兵自身は三対三で槍を構えてにらみ合う場面があつたりもしたが、

にらみ合うだけでそれ以上接近することもなく事なきを得ていた。にらみ合ったとき与兵は背中に脂汗が流れたが、相手の自信なさそうな目を見て恐怖感が薄らいだ。しかし、味方の三人とも突いて出ることはしなかった。三人とも志願兵であった。こちらも、相手以上に自信などなかったのである。

日が西に傾いたとき、味方はじりじりと退却し始めた。興経軍は追って来ない。十分に距離ができて

から、与兵たちは郡山城に戻った。勝ちも負けもないにらみ合いの一日であった。しかし城に帰って話を聞くと、にらみ合いだけで何もなかったと思つたのは与兵とその周りの者たちで、前線では敵の前進基地を焼き払い、数十個の首を取って帰つたのであつた。また味方にもかなりの死傷者が出ていた。陣の最縁部において、それ以上中心部に斬り込まなかつた与兵たち志願兵は、現場の一角にいながら現場の

状況も認識できないでいたのであつた。

さらに大内勢は背後から三塚山の陣地を攻め、尼子の重鎮尼子（あまご）久幸（ひさゆき）という武将を斬つたことが、郡山の城中に広まつた。三塚山の陣地はほとんど壊滅状態だったが、尼子の最後の抵抗に会い、日没になつたので一旦退却したことが興奮気味に言い伝えられた。

毛利側は勝ち戦として、折から降りだした雪の中

で勝鬨を上げた。その夜、向かい側の三塚山の陣地では赤々と焚かれる松明が垂れ込めた雪の雲を赤く焦がした。郡山城では、尼子が明朝陣を立て直して戦いを挑んでくると見て、あすこそ決着をつけるとばかり氣勢を上げた。この日は与兵もなぜか、興奮してともに氣勢を上げた。しかし、一日の疲れでぐったりと眠りに落ちていく者が、特に志願兵に多かった。与兵もその一人であった。

ところが、夜中に騒がしくなつて目を覚ますと、先に起きていた者が口々に、

「尼子が逃げ出したぞ」

と言っている。それで、寝ていた者もみな起き出してきた。夜中だが城では追撃隊が編成された。志願兵には参加命令はなかつたが、昼間の勢いで行かせてくれと自ら参加する若い者が何人もいた。その中に次平がいるのを見つけた与兵は慌てて止めるつも

りで、

「次平！」

と呼んだが、聞こえたのか聞こえなかったのか、次平は振り返りもせず、勢い込んだ追撃隊に混じって出て行った。真つ黒い空から湧き出るように雪が落ちてくる。しかし、与兵自身この追撃は勢いに乗った毛利勢の余裕の行動という印象を持っていたので特に深刻には考えなかった。

与兵はすぐに次平のことも忘れて、ふとんや筵を体に巻きつけて寒さに震えながらも眠りに落ちていった。自分の家が夢に出てきた。何をしているところかはよくわからないのだが、たしかに自分の家の中で、峰と太平と次平、それに百と源もいる。みなにこにこしているようにも見えるのだが、声が全くない夢であつた。

(十三)

追撃隊が帰つて来たのは、三日目の昼であつた。晴れていたが、まだ雪が何処からか飛んできて舞つていた。郡山城の中の道には雪がかなり積もつたままになつていて、急な坂道では滑つて転ぶ者も多かつた。厳寒中の行軍の疲れが、普段はこれくらいでは転んだりしない者までを転ばせた。追撃隊が着て

いる物はどろどろに汚れ、その一部は氷になって着ている物からぶら下がり、先端から雫が落ちていた。

報告された追撃の様子はこうだった。

雪中、松明をかかげて追撃を始めたがなかなか追いつかず、夜明け前になって一瞬敵の松明の明かりらしいものを見たが、すぐにわからなくなった。なにしろ進むにしたがって、雪が激しくなり、積もった雪で道もわかりにくくなって進むのに難儀を極

めた。夜が明けると雪が止んだので、雪に残された跡をたどって進んだが、はるか前方に江（ごう）の川（かわ）を渡ろうとする尼子勢を見つけたときには、悪路を押しして追いつける状況ではなかった。追撃は諦めることにした。帰城するのに陣を立て直そうとしたら、十数名足りないことがわかった。しばらく待ったが集まってくるけはいもないので、帰路で出会うことを期待して帰り始めた。同じ道を引

き返したが誰にも出会わないし、倒れたりしている者もなかった。

武将から足軽そして勇んで参加した若い志願兵もみな疲れきった様子であつた。与兵は次平の姿を探したが見つからない。次平だけでなくかなりの人数が帰つて来ていないらしい。

夕方になつて十人ほどが帰つてきた。尼子の後を

追っていたが、途中で見失った。気がつくとも味方も周りにいかなかった。そのあと道に迷ったがやつと帰り着いたと言うことであつた。どうやら、本隊が追つた尼子とは別の方に逃げた一隊を追ううちに、味方も道も見失つたのである。地元の者さえもこのように迷わせるほど、大雪の夜はすべてを覆い隠したのだった。

次平は遅れて帰ってきた者たちの中にもいなかっ

た。彼らも、まだ帰って来ていない者たちのことについては何も知らないという。追撃を始めたころ、激しい雪の中で隊列はかなり長く伸びていたらしい。遅れて帰ってきた十人も、前に行く者の姿を見失つて、別の道に入り込んだようであつた。そのとき自分たちより後には誰も来ていなかつたように思うと言っている。城を出たときから自分たちは最後尾だつたと言うのである。

本隊と共に帰つてきた者の中から何人かが呼ばれて、状況を詳しく聞かれた。彼らはみな、隊列が長く伸びて一人とか二人とかで歩く形になり、折からの雪で前を見逃しそうなのでそればかりを気にして必死でついて行つた。後を見る余裕などは全くなかつたと言ふのである。それに敵に追いつこうとして先頭は相当の速度で進んでいたから、ついていくだけでも大変だつたようである。つまりそういう状況

の中で、いつ誰が道をそれてしまつても全くわからないということであつた。

結局帰つてこないのは四人で志願兵三人、足輕が一人であることがわかつた。次平はその中の一人であつた。

翌日志願兵を中心とした十名の搜索隊が編成された。もちろん尼子が撤退した後だからできることで

あつた。搜索隊はそれなりの武装をしたものの、十名中八名は志願兵でそれに二名の足軽という編成であつた。足軽の一人は追撃に加わつた者であつた。しかしこれは戦闘能力が期待できる編成ではなかつた。尼子の落ち武者にでも出会つたら全滅させられるという声もあつたが、行方不明者に志願兵が多かつたためこれ以上正規の兵士を多くすることは許されなかつた。というより、この段階で搜索隊を出す

こと自体反対する声が多かつたのである。まだ本当に戦鬪が終わったのか確認されていないからである。

現に、前の日城下に調査に出た数人の兵士が、民家の中に隠れていた二人の尼子兵にふいに襲われて負傷したのである。兵士たちは尼子兵を捕らえようとしたが抵抗したため、その場で二人とも斬つてしまった。投降しようとして機を逃したのか、あるいは逃げ遅れたのか二人が郡山城下に潜んでいた理由

はわからないうままとなつた。このようなことが起きる可能性は、吉田の街中だけでなく尼子勢の退路に当たるところではいくらでもあり得るのであつた。

それでも、志願兵が自分たちだけでも行くからと言つてやつと認められたのであつた。搜索隊には与兵も加わつた。出発のとき次平の妻百が与兵たちを拝むようにして他の行方不明者の妻や親たちと城門まで出て涙ながらに、一行が見えなくなるまで見送つ

た。

雪は五十センチくらい積もつたままだったが、晴れていた。積雪のためひどく歩きにくかったが、捜索隊は一日がかりで、追撃隊が追跡を諦めた江の川の岸まで来た。川岸に転覆した船一艘と、淵に沈んだ尼子の兵士の死体が一体あつたが、次平たち行方不明の追撃隊員に関する手がかりはまつたくなかつ

た。

尼子の兵士はうつ伏せになって沈んでいた。暗い夜のこととて、溺れかけた仲間を見落としたのである。捜索が始まってはじめて見る尼子退却の印であった。そこまでの間、つい二、三日前に万余の人間が通った痕跡は、雪によつて跡形もなく消されていた。

捜索隊はそこから引き返した。途中まで引き返し

たとき、往路には先を急いでいたためか気がつかなく
かつた分かれ道があつた。搜索隊の一人が言つた。

「尼子があの江の川を渡つたことは、さつき見た通りで間違いないが、一部がこつちに分かれて行つた
ということはないかのう」

それには、追撃に加わつた足輕が答えた。

「さつきは、まずわしらが追つて行つた方を先に見るべきかと思つて言わなかつたが、確かに二手に分

かれたことは考えられる」
もう一人の足軽が言った。

「もうじき日が暮れる。きようはこれまでにして城に帰ろうではないか。いまから別の道に入っても何かが見つかるとも思えん」

たしかに日は西の山に傾きかけている。与兵たちは諦めきれなかつたが、尼子の残党が何処に潜んでいるかもしれないことを考えると、足軽の言うこと

を聞かざるを得なかつた。

搜索隊は夕方暗くなつてから郡山城に戻つた。行方不明者の肉親たちは、力なく城の坂を登つてくる一行を見てすべてを悟つた。

それから数日間、城の中も、武家屋敷の並ぶ通りも、城下の町屋も混乱を極めるといつた状態であつた。自分の家に帰れる者たちはすぐに城を出たが、

家が焼かれてたちまち帰る家がない者たちは城内に残った。被害状況の申告、戦での働きの申告などが当分続いた。戻ってみると家の中に尼子の兵士が死んでいたという届出もいくつあつた。また三塚山をはじめ周辺の山々の谷あいには尼子の兵士の死体があつたという報告は跡を絶たなかつた。中には死んでからかなり時間がたったような死体なのに、家に隠れていたのを自分が斬つたといつて、恩賞を得よ

うとするような報告さえあつた。

誰かに家の中を荒らされているという訴えはさらに無数にあつたが、それらの中には郡山城に籠城中の者が夜陰に乗じて盗みを働いたのだと訴えた者もあつた。しかし、これらの訴えはほとんど取り上げられなかつた。家を尼子に焼かれたというものだけが考慮の対象となつた。再建のために若干の援助がなされるというのである。

与兵は兵士として城に残ることにした。しかし、一旦は父太平と家に戻った。山裾にひっそりと身を隠すように立っている与兵たちの家は、無傷で残っていた。尼子の大軍が風越山から三塚山に移動するときにこのあたりを通ったはずであるが、あまりの粗末さに誰も見向きもしなかつたのであろうか。

五か月間放置された住まいは、敵兵に荒らされなくても、かなり傷み荒れていた。そんな家でも与兵

と太平にとって久しぶりのわが家は御殿のように思えた。掃除や手入れがこんなに楽しく思えたことにはなかつた。一人は疲れも忘れて働いた。留守の間に、ねずみが我が物顔で家の中を駆けずり回つたようであつた。またからすか何か隙間から入り込んだのか、かまどの上は鳥の糞だらけであつた。二人はとりあえずその晩寝られるようにした。家の中が片付いてくるにしたがつて、与兵の胸の内には寂寞とし

た感情が広がってきた。太平も同じで、

『熱い粥ができましたよ。一段落して食べましょう』
と言う峰の声が聞こえてくるような幻想まで抱いた。
家に入ったときの感動と嬉しさが静まった後には言
いようのない悲しみが二人の胸を締め付け始めてい
たのである。与兵は涙をこらえきれず、濡れた頬を
拭いもせず、働いていた。それに気づいた太平は、
与兵の顔を見ないようにしてわざと離れたところで

仕事を続けた。初めのうちは口の軽かった二人だが、この一、二時間は一言も言葉を交わしていない。二人とも胸いっぱいの思いに押しつぶされそうなのである。その思いが涙となって流れた与兵の方が少し先に気分が軽くなつて、

「親父さん、めしにしようか」と誘つた。

城を出るとき支給された握り飯がわが家での第一

夜の晩餐であつた。夕方になつてしんしんと冷える中、二人は冷たい握り飯をほうばつた。それでも白米の大きな握り飯はこれから先めつたに食べられるものではないご馳走であつた。

家には、籠城に出るとき瓶に入れて床下に埋めておいた穀物や豆、芋などが無事残つていた。一方田んぼの米はほとんど全滅であつた。それは収穫の時期を逃した為ではなく、尼子勢の通り道になつたら

しく、半分以上は踏みにじられたためであり、また踏まれていないところは、きれいに刈り取られていた。尼子が自分たちの食料として使ったのである。

しかし、雑草に覆われた畑には尼子が見落とした作物が残っていた。ほとんどは腐ったり干からびたりしているが、豆や芋など食べられそうなものも多少あった。与兵たちはそれらを丹念に雪の中から探し出して、食料の足しにすることにした。

(十四)

翌日、与兵は城に戻った。兵士として登城したのではなく、次平の妻子が城に残っていたので、心配で出かけたのであった。百と源は、戦が終わろうとする間際になって夫であり父である次平を失ったのである。いや、まだ失ったのかどうかはつきりしていないが、少なくとも行方不明の状態ですでに四日

以上消息を絶っている。

与兵が百のいる棟に行くと、いまはがらんとした薄暗い部屋の中に、百と源は身を寄せ合つてしよんぼり座っていた。他にも何人かの者が横になつたり、座つたりしていた。かれらも家を焼かれた者たちであらうか。

与兵は、百たちを見つけたが、すぐに声をかける勇気が出なかつた。百が与兵を見つけて、立ち上が

つて来た。そのうしろから源が、百の裾を掴んでついで来る。気丈な百のはずであったが、よほど心細かったのか与兵を見て泣き出してしまった。源はこのような泣き崩れる母の姿をこれまで見たことがなかった。心配そうな顔で、百の背に手を乗せて慰めるように見守っていた。やがて、百は気を取り直して、

「よく来てくれました。でもこれからどうしたらいい

いのかわからなくて……」
とまた涙があふれ出す。与兵は考えていたことを話した。

「西浦のわしのところに二人で来るか、実家に帰るかどっちかじゃのう。とりあえずそうして次平を待つといい。次平はきつとどこかで生きていると思う。わしは探し出すつもりじゃ」
「ええ……、やっぱり実家に帰ってみます。あす

こには兄嫁もいて、小さな家なので居ずらいかと思
うけど、こんなときだからちよつとくらいは置いて
くれると思います」

百の実家は、峰とおなじ北隣の村である。与兵、
百、源の二人はわずかな持ち物をまとめて城を出た。
百の里は郡山城から北に二時間くらいの所である。
百が、郷に向かう前に城下の自分の家を見たいと言
うので、回り道することにした。

百の家のあたりは籠城戦が始まった早い段階で放火や合戦があつたところである。百もきつと焼けていると覚悟していた。

近づくくと、隣にある棟梁の家の大きな屋根が半分焼け落ちているのが目に入った。やはりだめかと、諦めかけて家の前まで来ると、百と次平の家は一部が焦げただけで大部分は残っていた。

大工の棟梁が焼け跡の整理をしていた。商売物の

材木が積んであつた辺りが特によく焼けていた。百を見ると棟梁は手を休めて、

「次平は何処にいるのかのう。でもあいつのことだからきつとひよっこり姿を現すんじゃないかな」と百を慰めた。

「で、どうするんかい」

と百に聞いた。これには与兵が答えた。

「ひとまず実家で、次平のことがわかるまで待つよ

うにさせようと思うんじゃない」

「そうかね。わしのところが焼けてなかったら、ここにいてももらえるんだが。次平のところもこれじゃあ住めないしなあ。そうするしかないじゃろうね」

百は、

「家はこのままにしてしばらくあっちに行くので、よろしくお願いします」

と挨拶した。もともと次平の自分の家ではなく、棟

梁に借りて住んでいたのだから、そのままにして行くといつても、家財道具などをそのままにしておくという意味である。

三人は可愛川沿いの街道を歩いた。しばらくは、郡山城の東麓を歩くのだが、そこら辺りには焼かれた家がたくさんあつて、後片付けを始めている家も何軒かあつた。いずれも経済的に余裕のある家がはやばやと整理にかかっているようであつた。しかし

大抵の家では壊れた戸や壁に筵をぶら下げただけで暮らし始めていた。

百の実家では、歓迎とは言えないものの百に同情して、表面上は快くしばらくの滞在を引き受けた。次平のことが話題になったが、みな心配はしても、何の手立てもなかつた。百は、城で与兵の姿を見たときには涙を見せたが、その後はずっと気丈に振

舞っていた。実家には百の両親が健在であつたが、百の気丈な態度は、むしろ年老いた親に涙を流させた。与兵は昼食をよばれて百の実家を早々に出て、峰の実家に向かつた。

峰の実家ではまだ何も知らないのである。峰の父親は健在で、嫁を貰つた峰の弟の家族や、まだかたづいていない妹など、賑やかな家であつた。峰を嫁

にとつてから、与兵は数えるほどしかここに来てい
なかつたが、来るときはいつも峰と一緒にあつた。
与兵が一人で訪ねてきたので、実家では峰に何かあ
つたのだと思つた。吉田が戦の地となつて全領民が
五か月間籠城していたことは知つていたし、峰の実
家のある村に近いあたりでも小競り合いはあつたの
でみな心配していたのである。

与兵はどう切り出したらいいか迷つた。与兵が

言いにくそうにすればするほど、みなは峰に何かあつたのかと思うようになっていく。実家では峰が身籠つたことも知らなかつたので、与兵はそこから話さなければならなかつた。城中での流産とその後の病、そしてできるだけの手は尽くしたのだが、寒さに向かう中で死んでいったことをぼそぼそと話した。最期まで聞かなくても、みなは悟つたが、途中で口を挟む者はいなかつた。与兵が話し終わっても、し

ばらく誰も声を出さなかつた。峰の弟の嫁に抱かれた赤ん坊が、真ん丸い目をして、手を動かしたり声を出したりしてきよろきよろしている。

長い沈黙のあと父親が口を切つた。

「それは、与兵さんには大変お世話をかけましたのう。それで、墓はどうなつておるんじやろうか」

「城の中に埋葬して、そこに簡単な墓標があるだけじやが、それが峰の墓なんじや。でもいまは、城の

中はごった返して、墓参りなどはもうしばらくできないと思うんじゃない」

みなは説明する与兵の沈んだ顔をじつと見つめながら聞いていた。与兵は、弟の次平が行方不明になっていることも話した。父親が大きなため息をついてから、

「おしらは、尼子勢が逃げ帰ったと聞いたから、吉田の者はやつと元通りの暮らしができるようになった

たと、ただ喜んでおったが、ぜんぜん元通りなんか
じゃないんじゃない」

と言った。その声は静かだが、怒りを含んでいた。
さらに与兵は、自分は兵士として城に残ることを伝
えた。

「与兵さんは、戦は嫌いだといつも言っていたよう
に思うが、どうして兵士なんかになるんかね」
と峰の父親が聞いた。

「わしは、戦は大嫌いじゃ。でも、いまは兵士として城にいた方が、次平を探すのに都合がいいと思うんじゃ」

と与兵は答えた。だが、本当の理由は与兵自身にもよくわからなかった。峰と過ごした家に帰って暮らす気持ちにはなれなかったというのが、本当の理由であったかも知れない。あるいは、峰の墓が城の中にあるからかも知れない。

与兵は一旦西浦の家に戻ってからあらためて兵士として城に出た。それからしばらく与兵たちは、城内の整理と町屋の焼け出された家の取り壊しなど、戦の後始末の労務にたずさわる毎日であつた。

吉田の一月は、朝晴れていても午後になると雪がちらつくつくといい寒い日が続いた。武将たちは武将たちで、今度の合戦での活躍を申告して少しでも恩賞を有利に得ようと、入念な報告書作成に忙しかつた。

それとは別に、町屋のある豪商から家の中を荒らされて、隠してあつた金などが盗まれたという被害届が城にあつた。それが、ただの被害届なら尼子の仕業としてすまされてしまふところだつたのだが、雨戸をこじ開けるのに使つたと思われる七首がそのまま残されており、その柄に『一に三ツ星』の印が ついていたと言うのである。訴え出た豪商の言うには、押し入つたのは、泥だらけの足跡から推測する

と四、五人の毛利側の者ではないかと証拠の七首を添えて訴えたのであった。さすがに城側としても、毛利の印のついた七首を示されては無視できなくなつて、調べることになつた。だが調べるといつても城中ではそのことに関して、

「敵の領内に攻め込んだときならいざ知らず、わが城下の領民の家を荒らすとはもつてのほかだ。もしそういう不届き者がいたら、正直に申し出る」

という訓示があつただけであつた。しかも、籠城した者たちがほとんど下山したあとで、兵士たちに向かつて言つてみたところで何の足しにならうはずもなかつた。ただ、与兵だけはこれを聞いて、頬に鳥肌が立つほど緊張した。しかし、そのときの一味はもう城中には一人も残っていない。与兵が申し出なければ、申し出る者はいないのだ。与兵は黙つていた。追求はそれ以上には及ばなかつた。与兵の周り

では、

「大金持ちのくせに、なにせこいこと言ってるんだ」とか、

「うまいことやったやつがいるもんじやのう」などとさまざまな声がざわついたが、まじめに悪事を非難するような声は聞こえてこなかった。

さて、七日たつても次平たちは戻つてこなかった。

そして十日目になって、江の川に近い坂根村の百姓と名乗る数名が、毛利方の兵士の戦死者だと言つて、筵に包んだ二つの死体を荷車で城に運び込んだ。すぐに顔が確かめられた。それは行方不明四人の中の志願兵二人であつたが、次平はそこに含まれていなかった。

運んできた者の中の年長の男が、わざとらしい丁寧さで状況を説明した。それによると、

十四日の朝まだ暗いうちに、江の川の渡し付近がにわか騒がしくなり出したので、見ると五か月前に反対側に渡つていった尼子勢が、今度は出雲側に渡ろうとしている。初めのうちは僅かしかない船を順序よく何度もまわして使つていたが、そのうち先を争つて渡り始めた。

その日は大雪が降っていて、みなそこまで来るのに疲れきつており、けがをしている者も大勢いるよ

うであつた。そこへ、追つ手が大声を出しながらや
つて来た。はじめ毛利側の追撃隊が大勢で押しかけ
てきたのかと思つたが、飛び出してきたのは二人だ
けのようだった。しかし、渡り終えていない尼子の
者は、逃げ腰になつていたので慌てて川に飛び込む
者や、船を奪うようにして川に漕ぎ出す者などで大
騒ぎになつた。岸に残された者はまだ大勢いたので、
襲いかかる追つ手に立ち向かつた。それで二人の追

つ手はあつけなく斬られてしまった。追つ手の二人は先陣争いをあせつた者で、その後追つ手の本隊が来るのかと思つたが、来なかつた。

尼子の者たちは、それから長い時間かかつてやつと川を渡りきつた。そのあと江の川の北は大雪が続いていたから、尼子勢は出雲まで帰るのに難儀をしたと思う。

自分たちは、尼子に斬られた二人と渡し場に残さ

れていた尼子の戦死者を江の川のほとりに手厚く葬った。しかし、一旦埋葬したものの、毛利側の者だけは、郡山城に届けるのがいいということになって、こうしてやって来たと言うのであった。

「そのとき毛利の者はこの二人だけで、他にはいなかったのか」
役人が聞いた。

「わしらが見たのは、この二人だけじゃった」

これだけを言つて、ふかぶかと頭を下げた。筵からはみ出した足には、なるほど土がいつぱい付いている。運んできた者には、労をねぎらつて何がしかの金が渡された。しかし、彼らはすぐに引き上げようとしなない。

「まだ何か言うことがあるのか」

「いや、荷車を……」

二つの死体は車から降ろされた。一人は顔から首

にかけて刀傷を受けているが、傷だけが痛々しく残っていて、血は洗い落とされていた。もう一人は見事に腹から背中に槍を受けていた。

追撃隊は江の川の渡しを見下ろす位置まで行つたところで、すでに深い雪の中を降りて行つても、相手は渡りきつてしまふと見て、追撃を中止したはずであつた。もし、さっきの男の説明通りだとしたら、なぜこの二人だけが川岸まで行つて戦いを挑んだの

か。その様子は、追撃隊の位置から見えなかったのか。また行方不明になっていたのは四人であるが、あとの二人はその場にいなかったとしたらどうしたのだろうか。この二人とは行動を共にしていなかったのだろうか。

「それとも、」

ある兵士が言い出した。

「いまの者たちは百姓だと言っていたが、わしはた

だの百姓にしては鋭い目をしておつたと見た。尼子側に組する山賊かもしれん。尼子が逃げるのを助けるために、何らかの形で追いすがろうとしたこの者たちを斬つたのではないかと思う。斬つた場所も、あの渡し場とは限らん。そうしておいて、勝つた方にこのようにいかにも親切ぶつて死体を届けて、褒美をせしめようとしたに違いない」

別の兵士が付け加えた。

「それにしても、この二人は追撃隊の本隊とは別行動をしていたことになるのー」

結局真相はわからないままになつたが、運んできた者の言葉を信じて、最期まで敵を苦しめて戦死した功労者ということ、二人は正規軍と同じ墓所に葬られた。

しかしこのことがあつてから、依然として行方のわからない次平ともう一人の足軽が生きている可能

性が少なくなつたと誰もが思つた。与兵は、またつらい知らせを持つて百の実家に出かけねばならなかつた。

百は、覚悟していたようで、取り乱すことはなかつた。そして、これからどうするかを話すときには、前向きな姿勢を見せて与兵を安心させた。与兵は、「あくまでも行方不明であつて、戦死と決まつたわけではないから」

と強調して百を慰めようとした。

前の年の秋から冬にかけての戦乱で荒れた吉田にも春が巡って来た。戦のない日々のありがたさを誰もがしみじみと実感する春であつた。

与兵は田植えの時期には西浦に戻つて、父と野良仕事をしたが、それ以外は城内外の土木工事などに従事した。郡山城は、さらに充実を図るため麓に堀

をめぐらし、その内側に家臣の住居を集めるなど、大規模な工事が行われていたのである。

麓の堀の工事に出た与兵は、いつか町屋の屋敷に忍び込んだときに、出入りした藪のあたりを見つけた。そこは難波谷と呼ばれる谷の少し北側で、ずいぶんと急な斜面であつた。しかし、結構出入りがあつたと見えて、その辺りの藪が踏み均されて獣道のようになつていた。いま工事中のこの堀がそのとき

すでに完成していたら、もっと別の抜け道が必要になつていたはずであつた。

(十五)

堀の工事が完成しないうちに、毛利勢は銀山城（かなやまじょう）の武田勢を攻めることになつた。与

兵はこれに命じられて参加したのである。

銀山城は郡山城から南に約四十キロ、広島の西北にある。与兵たちはこれを二日ばかりで進軍した。与兵は重い荷車を曳いての進軍であつた。五月の太陽は容赦なく兵士たちに照りつけた。ようやく銀山城を前にしたとき、それが高くはないが非常に険しい山城であることにみな驚いた。

翌日毛利勢は正面から攻め立てたが、険しい岩山

の上から攻撃してくる武田勢を攻めあぐねてその日は退却した。その夜毛利勢は二手に分かれ、一手は山の裏手から攻めることになった。与兵は裏手組みになった。正面側の隊は松明を焚き、太田川（おおたがわ）に油を染み込ませて火をつけた草鞋を浮かべて大軍に見せかけた。武田勢が正面に気を取られている間に、裏手組みが山をよじ登って夜襲をかけたのである。この奇襲に気づくのが遅れて武田側は

狼狽したが、山上で激しい戦鬪になった。銀山城の山上は、郡山城に比べるとはるかに狭い尾根の上に来た城である。おまけに夜である。松明をたよりに敵味方を区別しながらの接近戦であつた。与兵は覚悟を決めて敵に攻撃をかけるつもりであつた。目の前の大きな岩の上に建物の柱が立っている。その向こう側で争っている音がする。与兵は岩をよじ登つた。岩の上に出ると、鎧をつけた武将、陣笠の兵

士などが入り乱れて戦っている。そして与兵が立ち上がろうとした瞬間、敵味方取っ組み合ったかたまりが与兵の方に倒れこんできた。たまらず与兵もろとも重なり合ったまま岩の下に転落してしまった。与兵ははずみでさらに急な斜面を転がり落ちて、下の方に突き出している大きな岩にぶつかって止まった。与兵はしばらく気を失ってそこに倒れていた。やがて自分が岩に挟まったようなかっこうでうつ伏

せに倒れていることに気づいて、起き上がろうとしたが、右足が動かない。無理に動かそうとしたが激痛が走った。その右足がどうなっているのか、暗い上にうつ伏せの状態なので見ることはできない。動かそうとすると堪えきれないほど痛むのでそのまま動かないでいた。そうすると足だけではなく、顔も肩も背中も腰もいたるところが痛いことがわかってきた。そのうちに与兵はまた意識が朦朧としてきた。

谷を隔てた向かいの山の緑が朝日に輝き始めたとき、与兵は気がついた。上の方で誰かが呼んでいる。振り返ろうとしたが右足の痛みでまた気を失いそうになった。振り返って見るこゝろができない。しかし、また上の方から声が聞こえた。

「いま行くから、待つとれよ」

与兵はそつと目を開けて、首の動く範囲の周囲を見た。どうやら自分は、急な斜面の中腹の岩に引つ

かかっているようである。

上の方で与兵に呼びかける声がしてから、何事も起こらないままかなりの時間が経った。あたりは静かだ。昨夜の戦いはどうなったのだろうか。与兵は建物の柱のある岩によじ登ったところまでを思い出したが、その後のことがはつきりしない。

さつき意識を取り戻したときには、まだ日が当たっていないが、いまは直接与兵に照りつけ始め

ていて暑い。右足の膝を中心に強い圧迫感があるが、じつとしていると痛みはあまり感じなくなっている。

頭の上でござござ音がしたと思つたら、一人の男が与兵の傍に降りてきた。

「与兵さん、大丈夫か」

その男は与兵の名を呼んだ。

与兵がやつと首をひねって見上げると、佐々木半兵衛であつた。

「いま助けてやる」

半兵衛はそう言つて、与兵のけがの状態を調べだした。

「足が岩の隙間に挟まっておる。なんとかせんといいかな」

半兵衛は、与兵の足が挟まっている岩の隙間を押し広げようとしたがびくともしない。なにか梃子にするものを探したが、その狭い足場の上には何もな

い。半兵衛は自分を縛って降りてきた綱を伝って再び登って行つた。

しばらくして降りてきた半兵衛は、太い木の枝を抱えている。それで岩の隙間を広げようというわけだ。なかなかうまく角度で枝を当てることができず、何度も半兵衛自身が斜面を落ちそうになつた。何度目かにはんの少し押し広げることができた、半兵衛は岩の間に差し込んだ枝に全身の力をかけながら叫

んだ、

「いまだ、足を上に挙げろ」

「だめだ、動かない」

「どうやってでも動かせ。はやく」

半兵衛の声は絶叫に近かった。

「感覚がないみたいだ」

「腰を使ってみろ」

与兵は腰を浮かすようにして、寝返りを打つときの

動きを試みた。それによつて少し右足の圧迫が緩んだ。それで仰向きになれたので、自分の両手で右足を引つ張り挙げた。半兵衛は力を抜いて大きく息をついた。

与兵はそれまで気がつかなかったが、半兵衛の左腕を真つ赤に染めて血が流れている。

「けがしているじゃないですか」

「なに、たいしたことはない。さつきまで血が止ま

つていたのじゃが、いまので傷が開いたようじゃ。

わしは大丈夫じゃ。とにかく上にあがろう」

半兵衛は、与兵に上の方の木に縛り付けてある綱を示して、

「これに掴まってよじ登れるか」

と聞いた。与兵は、

「やってみる」

と言って綱を掴んだ。腕には力が入るが、右足全体

は重い荷物をぶら下げているようにまったく言うことをきかない。それでも与兵は二本の腕と左足で綱が縛つてある木のところまで登つた。そこはやや広く平らになつていた。そこに一人の兵士がうつ伏せに倒れていた。与兵はギョツとしてその兵士を見つめた。動かない。死んでいるのか。

「どうした。その男は死んでいる。武田の者だ。綱を下ろしてくれ」

半兵衛が下から叫んだ。与兵は我に返って、自分の腰に縛り付けていた綱を解いて、半兵衛のところを下ろした。半兵衛は、それを自分の腰に巻きつけてから登り始めた。しかし、腕に力が入らないらしく、少し登ったところで傷ついた方の手を離してしまつて、元のところにずり落ちた。与兵は、半兵衛に向かつて叫んだ。

「綱を体に巻きつけて、いいほうの腕でしっかり掴

まっついていなさい。わしが引つ張り上げるから」
そう言つて、左足をあまり太くない木の幹に巻きつ
けるようにして、寝そべつたかっこうで綱を引つ張
り始めた。不安定なかつこうで人一人引き上げるの
は楽ではない。木に巻いている足はたちまち疲れて
きて、いまにも外れそうになる。外れたら与兵と半
兵衛は転落する。足がちぎれるかと思うほどの痛さ
をこらえて、与兵は両腕に渾身の力をこめて綱を手

繰った。半兵衛も右手と両足を使つて懸命に登つてきた。やつとのことで与兵のところまでたどり着いた。二人とも荒い息をつきながら、その場に倒れたままになつていた。二人とも窮地を脱した安堵感で、長い時間そうしていた。

しばらくして、与兵は上半身を起こしてそばの木にもたれるかっこうになつて、

「ありがとうございます」

まだうつ伏せのまままで荒い息をしている半兵衛に言った。

「いや、こつちこそいま助けてもらった。さつきは一度自力で登れたのに、右腕が疲れてきて力が入らなくなつてしまつたようじゃ」

「戦はどうなつたのでしよう」

「わが方の勝ち戦じゃ。武田の者たちは、負け戦と見て逃げてしもうたようじゃ。もうこの山には誰も

いないはずじゃ。わが軍も下山したと思う。いまごろはまだ麓にいるはずじゃ。急げば間に合うかも知れん」

「そうじゃったんか。でもわしはこの足では急いで下山なんかできんから、わしにかまわず、みなのことろに行ってください」

「いや、せっかくここまで登つて来られたのじゃ。一緒に帰ろう。なあに、ここから郡山城までもう敵

はおらんはずじゃ。のんびり行こうじゃないか」
半兵衛はわざとのんきそうな言い方をしてみせた。

「わしなんかにかまっていたら、いつ吉田に行き着けるかわかりませんじゃ。わしは何とかして、行けるところまで行くから、先に行つてください」

「与兵さん、もうこんな押し問答はやめにして、それより下山の方法を考えよう」

半兵衛は起き上がって、与兵の紫色に腫れ上がった

右足を見た。

「これはひどいのう。骨が折れておる」

半兵衛はまたそこに座り込んで、何事か考え始めた。その左腕からまた新たな血が流れている。与兵衛は自分の着ているものを裂いて、半兵衛の腕にきつく巻いた。たちまち、巻いた布の上に血が染み出した。

「待っててくれ」

そう言つて半兵衛は城のある方へふらふらと歩いて行つた。ずいぶんしてから荷物を運ぶ木櫃のようなものを見つけて来た。

「与兵さん。これに乗りなさい」

「そんなけがをしているのに、わしがこれに乗つたものを曳いたりなんかできんじやろう。おまけにここは険しい山の中じや」

「ぐずぐず言わずに、乗りなさい。曳けるかどうか

やれるところまでやってみるのじゃ」

「申し訳ない」

与兵は、ここで押し問答をしていたらずらに時間を費やすのもよくないと思いとりあえず言われるように木櫃に乗ることにした。

「案外具合がいいぞ」

半兵衛は、綱を曳きながら明るくそう言った。

「思ったより軽い。うまくできておるものじゃ」

しかし、狭くて傾斜のきつい山道のこと、快適に進むばかりではない。何度も木櫓は与兵もろとも転がった。また急傾斜では、木櫓が前を行く半兵衛にぶつかって行って、彼を突き倒した。二人とも泥まみれ、血まみれになりながらもだんだん木櫓の操作がうまくなつていった。急な傾斜に来ると、半兵衛が高い側に立って逆に木櫓を引つ張りながらゆつくり滑り下ろすとうまくいった。だが、こういったこ

とを半兵衛はすべて右腕一本でやらなくてはならなかつた。

山道の所々に折れた槍や盾、ちぎれた旗などが散乱して、戦鬪の跡をうかがわせていたが、何処にも人影はなかつた。遠くに大きな川の流れが光っているが、山の麓付近は目の前の木に覆われて、まったく見えない。敵も味方もどこに行ってしまったのだらうか。

山の中腹にある城門のところ三人の兵士が重なり合つて倒れていた。いずれも武田の兵士で、すでに死んでいた。半兵衛は、彼らが腰につけている瓢箪を手にとつてみた。水が入っているか確かめたのだ。

「おお、どれもまだたつぷり入っておるぞ。ありがたく頂戴して行こう。もしかしたら武田の兵士に命を救われたということになるかも知れんな」

そう言いながら、まず与兵にその瓢箪の一つから水を飲ませた。実にうまかった。いや、生ぬるくなっていたが、与兵にとっては生き返るような思いであった。半兵衛もうまそうに飲んだ。

「うまい水じやのう」

「本当にうまい水じや」

「行こうか」

「大丈夫なんですか」

「大丈夫じゃ。休み休み行くことにしよう。どうせ隊は先に郡山城に向けて出発しとるはずじゃ。この調子で麓まで降りると夕方になるじやろうからのう」

急な下りの山道がいつまでも続いた。半兵衛は何度も座り込んで長い休憩をとった。二人がやつと麓近くのなだらかな道に出たとき、長い初夏の太陽も、

いま降りてきた銀山城の山の後に隠れようとしていた。

麓に来たとき半兵衛は迷った。ここからだ、半日か一日の距離の広島に自分の親が住んでいる。一旦そこに立ち寄って、傷を癒してから吉田に帰るということもできる。しかし、重傷の与兵が広島で休んだからといってそれで回復するかどうかは微妙だと思つた。多少無理をしても、一日でも早く吉田に

与兵を送り届けるべきだ。そこには彼の父親がいる。半兵衛は、そう結論を出した。攻めて来るときには吉田から二日で来た。この状態で吉田まで帰るのには、四日はかかるだろう。途中いくつかの集落を通るが、毛利の者だと言えば食うものを出してくれ、家もあるだろう。とにかく、そういうことにして北に向かつて出発した。

「与兵さん。夕方になってしもうたが、たしかここ

から少し北に村があつたと思うから、そこまで行く
ことにするぞ」

「すみませんのう」

(十六)

歩みはひどくのろかった。それでも四時間くらい

進んだとき、小さな村にさしかかった。もうあたりは暗くなっていた。どの家も戸を閉ざしている。帰還する毛利の隊が昼間通つたはずだが、そのときに強引なことをしていなければよいがと、半兵衛は思つた。もし昼間に彼らが、強奪まがいのことをしていれば、いくら勝者の兵士だと言つても快く戸を開けてはくれまい。傷ついた二人連れでは、力ずくで言うことをきかせる訳にもいかない。

半兵衛は、一軒の大きな家の戸を叩いた。戸が開けられないまままで、中から声がした。

「どなたです」

「吉田の郡山城に帰る途中の毛利の者じゃ。けがをして本隊に遅れた。夜分すまないが、水と食料をもらえないだろうか。礼は後から必ずする」

「毛利の隊なら、昼間大勢通つて行かれた。わしらは総出で食事を出しましたんじや。殿様の命令とい

うことだな。だからもうお出しするものは何も残つとりませんのじや」

そう言ったが、戸を開けないのは怪しいものに押し入られるのを警戒しているかららしい。半兵衛は、さらに言葉を丁寧にして頼んだ。

「それは大変ありがたいことであつた。だが、いまわしらはけがをした二人で夜になつてしもうて困つておる。きょうこれ以上先には進めそうもないのじ

や。すまんが、物置でもどこでもいいから、休ませてもらいたい。食べるものはなくてもかまわないから頼む」

なかからかぬきを抜く音がして、戸が開いた。白髪のきちんとした身なりの男が出てきた。二人の惨憺たる様子を見ると、いそいで中から人を呼んで、家の中に招き入れた。与兵は意識が朦朧としかけていたが、熱い白湯を飲み、温かい食べ物を口に入れ

られて、少しはつきりしてきた。

「おう、元気が出てきたようじやのう」

半兵衛が、そばで口いっぱいに食べ物をほう張りながら言った。

与兵はまわりを見回した。半兵衛のほかには何人も男女が覗き込むようにしている。木櫃に寝そべったままの与兵には、年配の女が一口ずつ食べ物を口に運んでくれていたのである。与兵は慌てて自分で

やろうと手を動かそうとしたが、脚だけでなく手もまったくゆうことをきかなくなっていた。体全体が腫れ上がったような感じで、顔が火照って熱い。右足は石のように重たくて感覚がない。いまは痛さも感じなかった。

「お二人とも大変な傷を負っておられるが、この村には医者も祈祷師もおりませんのじゃ。あす何とか可部（かべ）まで行かれたら、あすここには医者がお

ります」

温かいもてなしに与兵と半兵衛はようやく人心地ついたが、傷の苦しみは和らぐことなく、悪くなる一方であつた。半兵衛の傷は、与兵よりは軽かつたが、それでも夜のうちに熱が出始めて、翌朝には頭が上がりないほどになつていた。それでも、用意してくれた朝飯を食べてから、半兵衛はまた与兵の乗

つた木櫛を曳いて出発しようとした。そのとき、白髪
の男が申し出た。

「差し出がましいようですが、わしの息子にその木
櫛を曳かせましょう。可部の先の上根（かみね）峠
の坂が大変でしょうから。峠の上までお供させまし
ょう」

そう言って、そばの若者に何事かこまごまと指示し
た。

「それじゃ、まいりましょう。」

若者はそれだけ言つて、半兵衛の持つていた木櫓の綱を取つた。

「何から何まで本当にすまない。好意に甘えさせてもらうが、この礼は必ずする」

「礼などいりません。まだ、吉田までは遠い道のりですから、どうぞお気をつけて」と頭を下げて見送つた。

半兵衛も、深々と頭を下げてから出発した。若者は、元気よくすたすたと歩いた。半兵衛は、きようは手ぶらで歩いているのに、若者の曳く木櫃の後をよろけるように遅れがちに必死で歩いた。

昼過ぎに可部の集落に入った。若者は父に教えられた通り医者を訪ねて、二人のために治療を頼んだ。傷に薬を塗り、それを布で被ってもらった。それだけでもずいぶんと気持ちが安らぎ、体も楽になった。

ような気がした。

可部を出ると川原に下りて握り飯を食べた。と言つても、食べたのは半兵衛と若者で、与兵は目をつぶつたまま、いらないと断つて少し水を飲んだだけだった。与兵の体全体が腫れ上がつて、やや紫色になつてきていた。半兵衛自身はさっきの治療のおかげで、少し楽になつたと感じていたが、与兵の方はほとんど効き目があつたようには見えなかつた。

上根峠の急坂はさすがの若者も汗びっしりになつて、息を荒くして登つた。登りきつてからも若者は歩みを止めず、さらに三時間近くも木櫓を引き続けた。やがて大きくはないが立派な山門のある寺の前に来た。若者は二人を残してその寺に入つて行つた。しばらくして若者は寺の和尚を伴つて出て来た。その日の宿を頼んでくれたのである。若者は、
「わしはこれで帰ります。この先お氣をつけて下さ

い」

と言つて、すぐに引き返して行つた。

和尚は、

「お前さんの足なら、宵のうちには家に着けるじやろう」

と言つて、若者を見送つた。

「あの若者は村長の息子なんじやよ。その村長とい
うのが大變よくできたお人で、このあたりで知らん

者はおらんのじゃ。あなた方はいい人に世話になつたものじゃ。ま、とにかくお入りください」
そういつて自ら木櫃の綱をとつた。

二人に食事と落ち着いて眠る部屋が提供された。和尚の話によると、毛利の隊は道すがらかなり横暴な行動をとりながら帰つて行つたようである。

「この寺は、元就殿の休憩所となつたので一般の兵士たちは寄り付きませんでしたのじゃが、道端の民

家は自分たちが食べるものも十分にはないのに、兵士に提供せざるを得なくなつて大變困つておりました。これからはこの辺りには毛利に反旗を翻す者はないのだから、安心して暮らせるようになる。だから食事の提供くらいは当然だという態度だったと聞きますじゃ。お二人のような丁寧な物言いなら、戦いに疲れた方たちをねぎらうのに不平を言う者はないのじゃがのう」

と、言葉は穏やかだが、暗に兵士たちの横柄な態度を非難した。

与兵は長話に耐えられる状態ではなかつたので、あてがわれた寢所に先に寝かされた。銀山城以来はじめて木櫓でないところに横たわつた。しかし、足の付け根から腰、首筋、後頭部にかけて脈を打つような痛みで眠れず、長く苦しい夜となつた。

半兵衛は、夜遅くまで和尚と話しこんでいた。し

かし、彼自身も決して体調は万全でなく、床に入つてからもうなされ続けた。

翌朝二人とも床から離れることができず、結局もう一日寺に世話になることになった。和尚は、薬草を煎じて二人に飲ませた。それが効いてか多少楽になつて、その翌日二人は丁重に礼を言つて寺を後にした。

ふたたび半兵衛が与兵の乗った木櫃を曳くのである。この痛々しい亀のような歩みは、初夏の太陽に照り付けられながらいまにも止まってしまうようになりながらも粘り強く続いた。たまに行き交う旅人は、なかば珍しそうに、なかば気の毒そうに見ながら通り過ぎて行く。ある民家の前を通ったときには、女が飲み水を持って来てくれたこともあった。しかし大抵は閉ざした戸の隙間から、二人が通り過ぎる

のをじつと覗き見ているのだった。別のところでは、何人かの子供が珍しそうにいつまでもついて来たが、半兵衛は子供たちを追い払う余裕もなくなっていた。半兵衛に代わって木櫓を曳こうと申し出てくれる者などついぞいなかった。

普通の脚なら寺から郡山城まで半日もかからない距離なのだが、二人は半分も行かないうちに夕方になつてしまった。半兵衛の体力は限界に近づいてい

たのである。

半兵衛は、吉田まで最後の一里塚の近くまで帰つて来ていることがわかつていたので、暗くなり始めた人氣のない道を、五歩行つては休み、十歩行つては休むといった調子で歩き続けた。与兵は木櫓の上で意識を失っていた。何度も道路の窪みに木櫓がはまつて動かなくなつた。最後の一里に何時間かかつただらうか、夜遅くなつて見慣れた吉田の町に入つ

た。青山山麓の民家の軒下にたどり着いたとき、半兵衛はその家の戸を叩いた。こんな時間に何事かと戸の中から返事をする主人に、

「夜分申し訳ないが、銀山城の武田攻めの帰りの者だ。けがをしていて、多治比川が渡れない。すまんが郡山城まで使いに行つてくれまいか」

「それはいいが、城のどこに行つて、どう言えばいいのじやろうか」

「誰でもよいから、佐々木半兵衛という者がここま
で帰ってきて動けないでいると言つてくれ」

主人は、戸を開けて出てきたが自信なさそうであ
つた。しかし目の前の相手には、あれこれ説明して
いる余裕がなさそうに見えたので、急ぎ足で城に向
かった。城までは川の渡渉を計算に入れても二十分
もかからないはずである。しかし、主人はなかなか
戻つて来なかつた。軒下の二人は待ち続けた。半兵

衛は、熱と疲労で眠りそうになりながら必死で気を確かに持とうと気力を振り絞っていたが、とうとう与兵の傍に倒れこんでしまった。

城に行つた主人は、郡山の麓に並んでいる家臣の家の一軒を訪ねて事情を話した。ところが、
「わしは財務を担当しておるので、そういうことは
いっこうにわからん。だから、三軒先の家に行つて

同じことを説明するがよい。その者なら何とかするはずじゃ」
と言われた。

主人は、言われたとおりに三軒先の戸を叩いた。いつまで叩いても誰も出てこない。しかたなく、その隣の家を訪ねた。出て来た家臣は、
「隣はいま当番で城中に詰めておるから留守のはずじゃ。こんな時間に何の用なのじゃ」

「銀山城攻めの帰りだと言う、けがをした毛利の兵士が二人、わしの家の前まで来て、動けなくなっていますのじゃ。それで城に連絡してくれと頼まれたので、こうしてやって来ましたんじや」

「して、その者たちの名前は聞いたのか」

「たしか*ささいはんべえ*と言っておりました」

「佐々井……聞かん名前じやのう」

「その者たちは本当に毛利の兵士なのか」

「そう言っております」

「その者たちが着ているもののどこかに『一に三ツ星』が付いていたか」

「いや、付いていたかも知れませんが、暗くて確かめておりませんです」

「よし、わかった。お前はもう帰ってよい。後はわしのほうで手を打つ。ご苦勞であつた」

主人は、夜中に飛んで来たのに留守の家に回され、

出てきた者にはあれこれ聞かれて不愉快な気分であつて行つた。家の軒下では、二人とも呼んでも目を覚まさない。主人は、間もなく城の者が来てくれるはずだと思つて、二人をそのままにして家に入つてしまつた。

その夜は城から誰も来なかつた。朝起きてきた人々がたちまち二人の周りに人だかりを作つた。二人は昨夜のかつこうのまままで、しつとりと夜露に濡

れていた。そこに馬で城の役人がやって来た。役人に少し遅れて二人の足輕が荷車を引いて到着した。

「なんじゃ、死んでおるじゃないか」

「いや、死んではいない。早く城まで連れて行け」

こうして、与兵と佐々木半兵衛は生死の境をさまようような状態でかろうじて郡山城に帰還したのであつた。

(十七)

与兵と半兵衛はそれから三日三晩眠りつづけた。

その後の治療で半兵衛の体は、左腕の動きが多少不自由になつたものの、ほぼ回復した。一方与兵の右脚は、紫色に腫れ上がったままで、異臭を放ちだした。城の医者の手で腿から切断され、切断したところには焼き鑊で焼いて止血された。

それから三か月、与兵は城の中で床に就いていた。その間に父太平が訪ねてきて、喜びの対面があつた。太平は、銀山城の戦いで与兵が戦死したものと思つて城に確かめに来たのであつたから、生きている与兵に会えておおいに喜んだ。だから、脚の一本くらい何でもないと思えたのである。与兵はそう言つて喜ぶ太平を見て、右脚を失つた自分を哀れと嘆く気持ちが多量薄らぐのだった。

やがて松葉杖で歩けるようになった与兵は、除隊して家に帰った。家では、野良仕事はもちろん炊事など家事のすべてを太平がやった。与兵は、この体でこれからどう生きていけばいいのか何も考えられなかった。父親の世話がありがたいことはわかっていても、つい不機嫌になることが多かった。それは父親に対してというよりも、自分の人生に対してであつた。

「糞も満足に自分で出来ないで、生きていてもしょうがないじゃないか」

と言つて太平を困らせた。太平は、与兵の気持ちが悪く落ちて着いてきて、生きる希望を取り戻すには時間が要ると思つていた。だから、気休めや安易な慰めを言つたりはしなかつた。

与兵が脚を失つてから半年が過ぎた。しかし与兵

はまだ生活の意欲を取り戻していなかった。相変わらず怒りっぽく、涙もろく、無気力であった。峰や次平を思い出してはよく涙ぐんだ。夏が過ぎて寒さがやってくると、傷跡が痛んで与兵を苦しめた。太平は、辛抱強く与兵のすべてを包み込むような包容力で支えつづけた。

正月に半兵衛が訪ねて来た。それまでにも半兵衛

は与兵を何度か訪ねたが、見舞いに来てくれた半兵衛に向かつて与兵が、

「銀山城で放っておいてくれればあすここで死ねて、こんな苦しむことはなかったのに」と怨みを言ったりしたため、だんだん足が遠のいていたのであつた。

久しぶりに半兵衛の顔を見た与兵は、以前とは違つて涙を流して礼を言うのだった。

「このころは、前と違つてすつかり涙もろくなつてしもうとる」

と、太平が言つた。半兵衛は、

「与兵さん。わしはのう、また戦に行くことになつたのじゃ。それで別れを言いに来たんじゃよ」

「今度は何処へ」

「出雲の尼子を攻めるんじや」

「まだ尼子は力を持つとるんかね」

「吉田では毛利が勝ったが、出雲では相変わらず勢力を張っておるそうじゃ。このままだといつまた攻めて来るかわからんから、こちらから攻めつぶすのじゃそうじゃ」

「毛利の戦なのじゃろうか」

「いや、大内の出雲遠征の助太刀らしい」

「出発はいつかね」

「もう間もなくらしい」

「わしの弟が、尼子勢を雪の中に追撃して戦死したのもこんな時期じゃった。なぜこんなに寒くて、雪の降る時期に行かんとならんのかのう」

「それはわしにもわからん。とにかく戻ってきたらまた会いに来るから、それまでに与兵さんも元気を取り戻してな」

こう言って、半兵衛は与兵を力づける言葉を残して帰って行ったが、与兵が佐々木半兵衛と会うのは

これが最後だった。

大内勢と毛利勢は一年四か月に亘る出雲遠征で月山（がっさん）富田城（とだじょう）を攻めきれず退却することになる。殿（しんがり）を受け持った毛利勢は追撃する尼子勢に壊滅的な打撃を受ける。毛利元就は命からがら帰還するが、多くの戦死者を出した。佐々木半兵衛もその一人となつたのである。

与兵は、家に帰って三年目の春の訪れと共に生活する意欲を徐々に取り戻していた。まず、家の中の仕事は自分が引き受けるようになった。そうなる其自然に表情も明るくなっていった。そのことを一番喜んだのは言うまでもなく太平であつた。自分とはもかく、まだ四十前の与兵には、それまでに多くを失つたとはいえ、まだまだいい人生があるはずだと言うのが太平の考えであつた。太平は口に出してそ

のことを与兵に言ったりはしなかつたが、与兵の心が癒えていくのを見て、大丈夫との確信を持つようになつていた。

そのころには、与兵は松葉杖を巧に使つて何処でも歩き回ることができるようになつていた。

(十八)

百（ひやく）は、次平（じへい）が戦死したものと諦めると間もなく、吉田に働き口を探しに出た。吉田ではまず次平が仕事をしていた大工の棟梁を訪ねたが、棟梁は家を尼子に焼かれてから、自力で立ち直れずに別の大工の下でもらい仕事をする身分になつていた。

「せつかく訪ねてくれたが、そういうわけでお前さんをを使うことは出来ないんじや。次平にはよくやつてもらったんじやが、すまんのう」

と棟梁は寂しそうに言うのだった。そして、

「回船問屋の富屋（とみや）に行ってみるといい。

あすこはいま吉田じや一番景気がいいという噂じや。なんでも瀬戸内海の海運にまで手を伸ばしているらしいからな」

と勧めた。百はさつそく富屋を訪ねた。

富屋では、番頭が出てきて百の用件を聞いた。百は、籠城戦で夫を亡くし、六才の子供を抱えて暮らしていかなくはならないこと、夫が生前大工をしていて自分はその手伝いをしたことがあるので、多少読み書きそろばんが出来ると自分を売り込んだ。そして、棟梁から勧められてここを訪ねたことも付け加えた。

「ほお、読み書きが出来るとはおなごにしては重宝なことじゃ。主人に会ってもらおう」

番頭はそう言つて屋敷の中に百を案内した。百は奥の仕事場のような部屋で富屋の主人富（とみ）三郎（さぶろう）に引き合わされた。

富三郎は、若いときから先代をたすけて回船業を切り盛りし、毛利が勢力を伸ばしてこの吉田の地が商業的にも発展すると、その時流にうまく乗つて商

売を成功させたのであつた。五か月の籠城戦は商売にとつて痛手とはなつたが、毛利が勝つたことで終戦と共にすぐ商売を再開したのであつた。

体格のいい男で、若いときからこの道にかかわつてきた自信が顔に表れていた。富三郎は、番頭の後について入つてきた百を上から下まで素早く見てから言つた。

「百さんといつたな。番頭の話ではたいそう仕事の

出来るおなごじゃそうじゃな。ぜひうちで働いても
らいたい。普通おなごは台所や掃除みたいなことを
やつてもらおうのじゃが、お前さんにはこの部屋で商
いの仕事を手伝ってもらふことにしよう。それでい
いかな」

富三郎のその言葉に、部屋で仕事をしていた三人
の男たちが一斉に顔を上げて百の方を見た。

「ありがとうございます。使ってもらえるのならど

んな仕事でもします」

「よし、ではいつからでもお前さんの準備ができ次第来てくれ」

そして、番頭に向かつて、

「百さんの部屋を準備させなさい」

富三郎はさらに、

「そうだ、子供さんはいくつかね」

「男の子で、もうすぐ六才になります」

「一人かな」

「はい」

「で、その子はいま何処にいるのかね」

「実家に預かってもらっています」

「なんだったら、ここに一緒に住み込んだらどうかね」

「そうできたら、ありがたいですけど。ご迷惑になりますから」

「いや、ここで働いているおなごの中には、子連れで住み込んでいる者もいるから心配は要らない。そうしなさい」

富三郎の気さくな勧めに、百は好意に甘えることになりました。

「では、そうさせていただきます。ありがとうございます」

「そのように手配頼みますよ」

富三郎は番頭に指示した。

百は翌日から仕事を始めることを約束して富屋を辞した。その日は、実家に帰って支度をして、翌日早く源を連れて実家を出た。富屋に着くと、年配の女の使用人が百と源を、二人のための部屋に案内した。台所のそばの狭い部屋であった。部屋の隅の物入れには、もうちゃんとうんとふとんが二組収めてあった。こうして手際よく自分の居場所が決められているの

を見て、百は、富三郎の親切をありがたいと思いな
がらも、なぜか気が重くなつた。これからいつまで
とも知れない年月を、この薄暗い部屋で暮らしてい
くのかという思いに、仕事が得られたという浮き立
つ気持ちは湧いてこなかつたのである。

源は他のおなご衆にちようど遊びごろの男の子が
いて、ここに来るとすぐに仲良くなつていた。

その日の午後から早速仕事が始まつた。百は、は

じめ回船問屋の中ではどんな仕事が行われているのか想像もつかなかった。だからただ先輩の男の店員にこれこれを書き写せとか、計算しろとか言われるものを、わからないままにこなしていった。それでも、間違わないでやろうと必死でやっていくうちに、仕事は速くて正確だと信頼されるようになっていった。初めはおなごのくせに、ちよつと器量がいいというこゝとで富三郎が鼻の下を長くして取り立てたの

だと、なんとなく反発の気持ちで接していた男たちも、有能な仕事仲間として認めるようになっていった。富三郎も自分の百に対する見立てが間違っていないなかつたことを喜んだ。

百が、初めて寝泊りする部屋に案内されたときに抱いた何となく暗いという印象はいつのまにか消えていった。それどころか、たしかに外に向いた窓がない百たちの部屋は、実際に薄暗いのだが、使用人

たちが食事する台所と接していて、いつも賑やかで活気に満ちていて、かえっていい場所にあると思えるようになっていた。

こうして最初の一年は瞬く間に過ぎていった。

西浦では、与兵がまだ生きる希望を取り戻していないころ、百はやはり大きな喪失の痛手を負いながら前向きに人生を切り開き始めていたのである。

(十九)

百が仕事に慣れてくると、富三郎はより重要な仕事を任せるようになってきた。長年この仕事に携わってきた男たちよりも、仕事ができることは、番頭の目にも富三郎の目にも明らかであった。しかし、そうなると仕事とは関係のないところで問題が出てきた。男たちは、百が番頭や富三郎に頼りにされ大

事にされることをやっかみ始めたのである。初めは百に対して、

「そんなに必死になつて仕事をしなくても間に合うことは、ゆっくりやりなさい。そうでないと疲れてしまふじやろう」

と言つていたのが、だんだん、

「そんなに旦那に認めてもらいたいんかね」
になり、

「旦那のこれが狙いじゃないんか」

と小指を立ててていやみを言うようになった。

百はそういつたひがみには頓着しなかつたが、めつたに顔を合わすことのない富三郎の女房が、ひよっこり仕事部屋に入つて来て、

「あんたが百かね」

と言つて、じろじろ眺め回してから出て行つたのは、ひどく不愉快な気持ちになつた。

そのことがあつてから、百はそれまで何の感情も持っていないなかつた富三郎の女房に対して嫌悪感を持つようになつたのであつた。

それからしばらくして、富三郎が百を呼んで仕事替えを言い渡した。倉庫の帳簿係りになつたのである。百は、別に異存もないので、そこでもてきぱきと与えられた仕事をこなした。

店が休みで、広い屋敷にはわずかの者が居残っているときに、百は富三郎から奥の部屋に呼ばれた。

富三郎と向かいあうのは久しぶりであつた。はじめ仕事のことなどを話題にしていたが、富三郎の目的は別の話をするこゝとであつた。

「実は、倉庫に仕事替えをしたのは、女房の希望だつたのじゃ。どうもあいつはわしがあんだのことを好いてると疑つてゐるらしいんじや。そう言われ

ると、仕事はできるし器量はいいし、わしは初めからあんたが気に入っていったからのう。つい生返事をしていたらだんだん癩癩をおこして、とうとうあんたを店から追い出せと言うんじや」

「お店をやめろと言うことですか」

「そうじやない。店の中にいる使用人とどうかあつたのじやあ、女房としてこけんにかかわるちゆうんじやよ。つまり、外に家でも持たせて、そこにわし

が通うんなら認めてもいいと言うんじや」

「どうにかあつたらつて言つても、旦那様とわたしとは何もないじやないですか」

「それが、あいつからみると、わしがあんたのことを気に入っているというだけで我慢ならんのじやよ」

百は、奥の部屋で仕事をしているときから、富三郎の好意には気づいていた。百自身、親切にしてく

れる富三郎を憎からず思っていたので、好意のままに親しみをもつて接していた。だからといって、それ以上のこともなく、特に問題を感じることはなかったのである。

百は、商いに成功した旦那衆が女を囲うのは知っていたし、囲われた女で親しい者もいて、そういうことに特に陰湿な感じは抱いていなかった。しかし、自分がそのような立場になることなど考えたことも

なかつた。なにしろ自分は子持ちだし、特に男を樂
しませることに長けているわけでもないと思つてい
たからである。

「旦那様が、それがいいとおつしやるのならわたし
はかまいません」

かたぎの百がそう言つたので、富三郎は自分から
言い出したにもかかわらず驚いた。

「そうか。そうしてくれるか。じゃあ、さつそくお

前さんが住むところを見つけることにするから、それまではいまのままな。それから、源といたかな、息子はこの店で小僧として働いてもらうがいいかな」

「よろしくお願いします」

数日して、富屋の店から歩いて十分くらいのところにあるこじんまりした家が百の住まいとなつた。

尼子の放火で半焼していたのを、富三郎が買い取つて修復させてあつたものである。

富三郎は三日に一度くらい訪ねてきたが、そこで百の作った飯を食つてくつろいで行くだけで、それ以上のことは何もなかつた。百も水商売の経験があるわけではなく、これといつて品をつくつて富三郎を誘ふこともしなかつた。仕事一筋の男が五十にして初めてもつた囲い女で、富三郎はそれでも満足で

あつた。

しかし、所詮男と女。やがて深い関係になり、富三郎はさらに頻繁に百を訪ねるようになった。富三郎は女房との間に子供がなかつたが、特に関係が悪いというわけでもなく、たまには夫婦の関係もあつたのだが、百の若い体は富三郎を蘇らせた。それとともに、二人の間の愛情は深まっていた。百も次平のことをすっかり忘れてしまったわけではなかつ

たが、過去を振り返らない性質の女であつたから、いまを大切にした。百にとっては、新しい幸せの日々となつたのである。

三年の月日が過ぎていった。百は富三郎の寵愛を受けて、店のものが妬むほどの待遇を受けつづけていた。富屋は、戦のない吉田の地で安定した商いを続け、毛利の発展と呼応するように商売の手を広げ

ていた。富三郎は仕事でしばしば広島に出かけて行くようになった。瀬戸内海の海運で、堺方面へ商売を拡大しつつあったのである。

吉田の地でこそ戦はなかったが、日本全土は戦乱に明け暮れており、それらに関連しても海運は重要な役割を持っていた。その波に乗って商売を発展させていた富屋にとって好都合なことは、商売の本拠地である吉田と広島が、毛利が大きくなればなるほ

ど安泰であることであつた。

富三郎は広島に出ると数日はそこに滞在した。そして広島でもある若い女に家を持たせて、そこに泊まるようになった。当然のことながら百のところ顔を出す回数も、目に見えて少なくなつていった。たまたまに広島土産と称して菓子を下げて来ることはあつたが、ちよつと立ち寄るだけですぐ帰つていくやうになつた。百への想いは驚くほど急速に冷めてい

ったのである。百もいずればそういうときが来ることを覚悟していたので、嘆き悲しんだりはしなかつた。だからといって、他にどうするとう当てもないまま、さらに月日が過ぎていった。

ある日、富屋の番頭が百を訪ねてきた。富三郎以外の店の者がこの家に来るのは初めてであつた。番頭はいまや留守が多い富三郎に代わつて、吉田の店の責任を一手に引き受けて切り盛りしていることは、

百も知っていた。

「百さん……」

もともとむつつりした感じの番頭は、言いにくいことを言おうとして一層重苦しい顔になった。

「あんたも気づいていると思うが、旦那様は広島での仕事がほとんどで、ときには堺まで出かけるようにもなられた。で、この家を引き払ってもらったときが来たのじゃ。旦那様からは、十分なものを渡して

実家なりなんなりに帰ってもらってくれとのお言い
つけなんじやが……」

百の予想通りであつた。番頭がやつて来たときに、
百には見当がついていたのであつた。ただ、こうい
うことは富三郎自身から言われたかつたと思つた。

「ええ、わかりました。でもすぐには住むところも
ないので、出て行くのはしばらく待つてください」
「わかつておる。この家はそのまま住んでいい

のじゃ。すぐに使う当てもないからのう。ただ今後は自活してくれということじゃ」

「つまり、お手当てがいただけないということですね。もちろんわかっていきます。旦那様には、大変お世話になりました。どうぞよろしくお伝えください」

楽しかった、とも言い足したかったが、番頭にそのようなことを伝えてもらうのもと、それは言わなかった。

番頭はまだ言いたいことがあるのか、立ち去らずにぐずついている。

「なにか・・・」

と百に言われてはじめて、

「わたしがお世話してもいいんだが・・・」

と語尾を濁しながら言った。相手の弱みに付け込んで、主人のお下がりを得ようとする提案のようであった。

「ありがとうございます。でもそれでは旦那様に悪いので・・・」

と百はあつさり断つた。番頭もそれ以上言い募ることもなく帰つて行つた。

富三郎と百の熱い日々が、あつけなく終わつた。百は、充実していたように思えた日々が、実は何の实りもない空虚なときでしかなかつたことをいまさらのように感じた。

百は、半年ほどそのままその家で暮らしたが、そこでの無為な日々嫌気がさして、十二才になった源を連れて吉田を出た。そのころ徐々に発展していた広島に行き、小さな飯屋の下働きとして新しい生活を始めたのである。源は、番頭に気に入られていたので、このまま店において商いを覚えさせたらと勧められたが、富屋にかかわりをもち続けるのは嫌だったので、断ったのであった。

しかし、百に安定した生活は訪れなかった。百が働き出して一年もしないうちに、その飯屋は広島を襲った大水の被害を受けてやっけていけなくなつてしまつたのである。

百と源は縁者のいない広島で路頭に迷うことになる。富三郎は広島のだこかで大きな店を構えてやっけているはずだが、自分の後釜の若い女と住んでいるところに助けを求めていくわけにはいかなかつた。

そんなとき、大水の被害のことで広島のお店に来たという、吉田の富屋の若い者が源を見つけて声をかけてきた。事情を聞いた若い者は、一緒に吉田に帰ろうと百たちに勧めた。百は吉田に帰ってもこれと行った当てもなかつたが、知らない土地よりはましだと思つて、若い者の言うまま吉田に戻つた。

吉田では、百と同じようにある商家の旦那の困い者だつたという知り合いの女の家に、源と二人で転

がり込んだ。しかし源はまもなく自ら志願して兵士への道を進むことになった。

毛利は、出雲遠征では痛手を負ったが、近隣の城主たちを次々と傘下に収めて安芸地方では不動の地歩を築きつつあった。したがって、遠征は絶え間なく、兵力の補充増強は常に必要となっていたのである。百は源が兵士になることには強く反対した。源の父親次平のこともあるし、源の伯父である与兵は

右脚を失っている。また郡山籠城戦までは順調であった棟梁も勝ち戦にもかかわらず運が傾いた。百は勝ち戦も負け戦も、戦というものを憎んでいた。それは理屈抜きで骨の髄まで染み込んだ感覚であつた。しかし、吉田の若者たちは昇竜の勢いの毛利勢に兵士として参加することに憧れていた。源もそのような若者の一人であつた。そうした血気にはやる若者に、戦に運命を翻弄されて人生にくたびれた女の、

たとえそれが母親であつても、その言葉は届かなかつた。源はすがるように引き止める百を振り切つて出て行つたのであつた。

百は吉田で、ある宿屋の下働きとして働き始めた。当時吉田は、可愛川（えのかわ）の水運で商業が盛んになり、宿屋が二軒できていた。また置屋は往来する人々を当てこんで十軒にあまる繁盛振りであつ

た。

(二十)

数年が過ぎて、与兵は自分の生活を取り戻していた。いまでは、太平と共に農作業もやるようになった。太平は年をとっていたが相変わらず元気で、

与兵の脚が不自由なことで自分がしつかりしなればと気を張ってがんばっていたのである。しかし、与兵たちが山裾の小さな田畑を耕す貧しい百姓であることには変わりなかった。

郡山城の麓には立派な堀が出来上がり、その内側に家臣たちの屋敷がずらりと建ち並んだ。家臣や兵士たちの生活も、遠征していないときは派手であつ

た。そのために吉田の城下も賑わいを増していた。遠征で戦鬪に明け暮れて何とか無事に吉田に帰ってこられた者たちが、反動のように刹那的な快樂を求めることによつても吉田は繁盛していたのである。

与兵は、ときどき城の辺りを松葉杖で歩いて昔を偲ぶのだった。城の東の麓まで堀が伸びていて、与兵が空き巣狙いの者たちに連れられて出入りした藪の辺りはもう近づけないようになっていた。いまで

は、それも懐かしい思い出になつてしまつたが、与兵は戦では何でも許されてしまふものだということ、を思い出していた。出陣を前に怖気づいた志願兵が、その場で斬られたことも思い出した。与兵にとつて、郡山城は辛い思い出しかないところだが、そうして城の周りを歩いて一つ一つ思い出すことで、過去を踏み越えていく自分を見出すことができるのであつた。また、一年に一度は許可を得て、城に入り峰の

墓を訪ねた。

吉田は、日に日に大きくなる毛利の権力、それに乗って富を築く豪商たち、それから相変わらず貧しいままで彼らの食料を生産し続ける農民を乗せて年月の輪を回していった。

長年毛利と共に戦ってきた井上一族が女子供にい

たるまで皆殺しにされる、という事件が起きて吉田の町は、そのことで持ちきりになった。毛利元就が増長した井上を誅したと言うことであつた。この血なまぐさい事件は、郡山籠城以後十年以上平穩な暮らしが続いた町の人々にとつては興味の尽きない話の種であつた。街角のどこにも人の輪ができて、近づいてみるとその話題であつた。井上一族の悲劇を憐れという者、毛利の正当性を論じる者といろいろ

であつた。

しかし時が流れて年を追うごとに、そんな大きな事件も人の口の端から消えていった。

何年かたつたあるとき街中で、与兵は百の姿を見かけたと思つた。しかし、すぐに見えなくなつた。そのとき相手も一瞬与兵の方を見たような気がした。だから、与兵は百が故意に姿を隠したのだと思つた。

与兵は、百が富屋で働いていたころよく会っていた。百の方が氣力を無くしている。与兵を訪ねて元氣付けていたのである。しかし、その後しばらくしてからぱったりと姿を見せなくなっていた。

百が与兵を訪ねなくなつてから、太平が百の消息を人に聞いたことがあるが、富屋の主人の困い者になつたらしいという噂を聞いて、それ以上確かめることもしなかつたのである。それから七年近くが過

ぎていた。

与兵は、百の姿が消えた方に行ってみた。だが松葉杖の歩みではすでに百の姿はどこにもなくなっていた。しばらくその辺りを歩き回ったが、見つけることはできなかつた。

しかし、百が吉田にいることを知って、与兵はどうしても居所を突き止めたくなつた。ちらつとしか見なかつたが、そのときの百の姿はどう見てもいま

をときめく豪商の困い者には見えなかつたのである。与兵は翌日も、その翌日も町に出かけてあてもないまま歩き回つた。誰かに百のことを尋ねる勇氣は出なかつた。それほど与兵の目に映つた百の姿は悲惨な印象であつた。

与兵は、百がよたかにでも落ちているのではないかと密かに心配した。そうでもなければ、与兵を見て姿を隠したりはしないと想つた。百は明るく、積

極的な女だったはずなのである。

発展したとは言っても、吉田の町は広くはない。捜し歩いて三日目に与兵は、物置のようなあばら家の前にぼんやり立っている百を見つけた。百は与兵に気づかず、汚れきった着物を着、埃にまみれた髪をぼうぼうにして、虚ろな目で遠くを見ていた。その姿を見たとき、与兵は一瞬立ちすくんでしまった。自分も片脚で、松葉杖にすがって歩き、着ている物

も粗末であつたが、それからさえも大きな差があつた。

与兵は気を取り直して百に近づいて行つた。松葉杖の規則的な音が近づいて百は振り向いた。ハツとして身構えるような格好をしたがすぐに諦めて、開き直つたように与兵に向かいあつた。

「あら、兄さん。どうしたんですか」

「どうしたじやないだらう。百こそどうしてたんだ。

長いあいだ何の沙汰もないし、実家にも寄り付かなかつたそうじゃないか」

「ごらんの通りですからね。知ってる人になんか会えるわけないでしょ」

「いま、どうしているんかね」

何事かと寄り集まってきたやじ馬が、百に代わって答えた。

「この格好で客をとってると言えれば決まってるじ

やないか。あんだ、この女の何なのさ」

「わしは、この人の死んだ夫の兄に当たたる者じゃ」
与兵は、そう言つてから百の腕を掴んで、

「とにかくうちに行こう」

と、掴んだ腕を引つ張つた。汚れた着物の上からでも、百の骨ばつた腕の細さが感じられた。百はその腕を振り払つたが、与兵が松葉杖で歩き始めると、やや間を置いて後からついて歩きだした。

松葉杖の男と乞食女といった感じの二人連れは、ゆっくりとした歩で西浦の与兵の家にとどり着いた。その間二人とも一言も喋らなかつた。しかし、二人の胸中では籠城以来の運命が激しく去来していたのである。

家の前では、太平が早くから帰ってくる和兵たちに気づいて待っていた。太平には、和兵の後をついてくる女が百であることは予想がついていたが、す

ぐ近くにくるまで確かに百だとは信じられなかった。顔がはつきりわかるくらい近づいたとき、太平は百だということがやつと確信できた。激しく胸騒ぎがしたが、気持ちを落ち着けて、声をかけた。

「百だね。さあ、早く中に入りなさい」

百は体を拭き、与兵が出してきた峰の着物に着替えた。それも粗末な物ではあったが、さっぱりした

姿になつてようやく見慣れた百になつた。そうして
いる間に、太平と与兵は、百に食べさせるものを作
つた。二人とも思ひはほとばしり出るほどあつたが、
何から言葉にしていいかわからず、かえつて無口に
なつていた。太平が一言だけ言つた。

「あまり聞かないでおこう。いいな」

男二人が作ったものを、百はむさぼるように食べ

た。ずっと目は伏せたまま、二人の方に顔を向けることはなかつた。二人もその姿を見ているだけで、何も話しかけなかつた。だが、その場には思いやりのある温かい空気が流れていた。

ひとしきり空腹を満たして、箸の運びがゆつくりになると百の頬に涙がとめどなく流れた。百はそれを拭おうともせず、ゆつくりと箸を動かし続けた。食べ終わると、しばらく白湯をすすっていたが、

やがてその場に倒れるように横になつて、目をつぶつた。まだ夕方早い時間だったが、百はそのまま朝まで眠り込んでしまった。

翌朝太平が目を覚ますと、百が土間で朝食を作っていた。太平を見ると、

「おはようございます。きのうはありがとうございます
ました」

と、丁寧に礼を言った。

三人で朝飯を食べるときも、百は自分のことは何も喋ろうとしなかった。太平が、

「事情はわからんが、よほどのことがあつたのじやろう。何も言わんでいい。じやが、どうじやろう。わしらは脚の悪いこいつと、年取つたわしとで細々と暮らしとる。この通りじや。勧めるようなところじやあないが、よかつたらここで一緒に暮らさんか」と言つた。

百は、すぐには返事をしないで黙っていた。与兵が言つた。

「おしも親父と同じ考えじゃ。百さえよければそうしてほしい」

百がぽつりと言つた。

「ありがたいことです。でも……」

「でも……なんじゃ」

「わたしはもう昔の百じゃないんです。よたかの乞

食女なんです。普通の人の中には入れません」

「何を言つとる。わしらにとつては次平のよくでき
た上（かみ）さんの百のままじや」

太平が叱るように言った。

「でも、……だめです」

「そうじやろうな。あんたはまだ若いからのう。年
寄りと脚がない者の世話なんか嫌じやろうな」
太平が百の表情を探るようにながら言った。

「ちがいます。わたしみたいに汚れた者が、お父さんたちのように真面目に生きている人たちの世話になるわけにはいかないんです」

このようなやりとりが続いたが、とりあえず二、三日はここで体を休めることになった。百は、台所に立ち、野良にも出て太平と与兵を助けた。そうしている百には昔の快活な面影の片鱗が見えてきた。

結局そうしているうちに二、三日は十日になりひ

と月になつた。百は、そうして居座るような自分を内心責め続けていたが、どこに行く当てもないしこの家では自分が必要とされていることがわかるので、去るきつかけもないまま日を重ねていった。

だが、百はなぜあのような落ちぶれ方をしていたのかを語ることはなかつた。源については、兵士になると言つて郡山城に入つていただけ言つた。源には長いこと会つていないということであつた。

(二十一)

百が与兵たちの所に来てから一年が経った。郡山城はますます立派になり、毛利は安芸地方一帯の覇者への道を突き進んでいた。そして、あいかわらず征途の日々であつた。

ある日、あばら家には不似合いな立派な青年が与兵たちを訪ねてきた。三人とも会つたことがない青

年だと思った。しかし百は気づいた。

「源」

そう言つて、ただまじまじと眺めるだけであつた。

「母さん。ここにいたのか」

源も、呆然と母親を見つめた。お互いに、数年前に別れたときとあまりにも違つていたのだ。

源が見覚えている母親は、広島で思うようにいかず、仕方なく吉田に戻つて来たころの生きることに

疲れきつた精彩のない女の姿だった。一方、百が知
っている源は、まだ十二才の子供で、必死で引き止
める母親をなじりながら城に入っていた姿であつ
た。その顔には幼さが残っていた。それがいま目の
前にいる青年は、自信と威厳を備えた青年兵士であ
る。我が子ながら百は気後れさえするのだつた。

源もここで百に巡り合うとは思っていなかったの
で驚いた。しかし、活気を取り戻して、以前よりも

若くさえ見える母親の姿に安堵した。

「母さん、元気そうじゃないか」

源の母への言葉はやさしかった。百は、

「おまえも・・・」

と言いかけたが、後は声にならなかつた。

源はいくつかの戦場に出て小さな手柄を重ねて、今では若くして部下を持つ正規の兵士になっていた。源の話によると、近く大きな戦があるという。その

前に母親に一目会っておきたいと城下を探し回ったが所在がつかめず、与兵のところにも母の消息の手がかりを求めて来たのであつた。

源は、その晩与兵の家に泊まつた。母と子は七年ぶりに枕を並べて寝た。

翌朝源は、今度の遠征は巖島方面で、遠くはないが激しい戦鬪になりそうなので、無事帰つてこられるかどうかかわからないと言ひ残して城に戻つて行つ

た。百には、もう止めようがないところに源はいた。

百は、歩き去る源を、その姿が見えなくなつてからも長い時間見送つていた。百にとつては、源とのかの間の邂逅であつたが、ここ数年間の地獄のよ
うな人生を越えての巡り合ひであつた。

毛利勢はその年の秋大内勢と戦い、最後は安芸の
厳島で激戦の末これを破つた。毛利が中国地方の覇

者となる歴史的な戦いであつた。

毛利勢は郡山城に凱旋した。戦勝に酔う城と城下は何日も祭りのように賑わつた。兵士たちは、戦場の苦しみと恐怖から解放されてわれを忘れて酒に酔い、女を漁つた。しかし、吉田城下でこの祭り気分に加われない者たちも少なくなかつた。百たちはその一人であつた。城下を飲み歩く兵士の中に源はいなかつたのである。

戦死した源の遺体は、多くの戦死者と共に巖島の対岸に埋葬された。百のもとには源の遺品ひとつ戻らなかつた。

それから一年、百は与兵たちと共に忙しく働いた。しかし、持ち前の快活さは影をひそめ、涙もろくなり、また沈み込むことも多くなっていた。百は四十に手が届く年になり、与兵は五十を過ぎていた。太

平は七十半ばを過ぎていたが、三人の中では一番元
氣そうに見えていた。

ある日太平は、与兵と百にこんなことを言い出し
た。

「おまえたち、夫婦になつたらどうじゃ」
与兵があきれたように、

「なにをまた寝ぼけたようなことを急に言い出すん
じゃ」

と言うと、百も、

「お父さん、きようはどうかしとるんよ」

と、二人とも真面目な話とは受け取らなかつた。が
太平は真面目なつもりであつた。

「同じ屋根の下に、他人同士の若い男とおなごが一
緒に住んどるのはおかしいんじや」

「若い男とおなごがどこにおるんじや」

「お前らのことじや。百はここに来てもう三年にな

る。ようやってくれとる。わしらは大助かりじや。

なあ与兵」

「そりやあもう、百がいなかつたらわしらはもう生きとらんかつたかも知れんわ」

「だから、もうお前らは夫婦にならんといかんのじや」

「このまんまじや何故いかんのじや」

「二人ともまだ若い。人生これからじや。それに二

人とも戦でたくさんのものを亡くした。いまからでもやり直したらいい。それに・・・」

太平は少しためらってから、

「どちらからも口に出さんようじゃが、わしにはわかつとるんじや。お互いに好いておるじやろう」

「わしは、このままでいいと思つとる。だいたいこんな体で夫婦もないじやろう」

「お父さんの言葉はありがたいけど、わたしも体の

芯まで汚れた女です。こうしてお世話させてもらうだけでもありがたいと思つてるんだから・・・」

与兵と百はそれぞれの思いを太平に言つた。太平は、「百は、いまでは与兵の脚のない暮らしぶりを知り尽くしておる。それに百の過去に何があつたかは知らんが、たとえ何であろうと、そんなものはこの三年間の暮らしですつかり洗い流されているわ。まあ、きょうあすに決めることでもないから、二人ともよ

う考えてみなさい。わしには孫一人なしだしな」
そう言ってから、太平は散歩に出て行った。あとに
残された二人は、しばらく言葉もなくそこに座つて
いた。

まず与兵が口を切った。

「百はいまの話をどう思う」

百はすぐには返事できなかつたが、

「お父さんは、自分がいなくなつたあとのことを考

えているんかも知れないわね」

「自分が死んだあとのことかね」

「ええ、もちろん先の話だけど……。それに源までいなくなつたので孫が欲しいということもあるのかも知れないし……」

「孫……。わしにはもう無理じゃ」

「与兵さんはそんなことないでしょ。わたしはだめだけど……」

「わしは百のことをぜんぜんそういふ風には思つておらん。昔のままの明るく活発ないい女じやよ」

「まあ、ありがとう。でも年も年だし、いまから孫と言われてもね」

二人が、お互いのことを話すのは初めてだった。与兵が言った。

「こんな体でもかまわなかつたら、……わしは親父の言うようになつても……」

「少し考えさせて」

百は、自分の過去にこだわり続けた。二人はすでに共同生活者として十分に親しく信頼しあっていたのだが、このことがあつてから垣根がなくなつたようにさらに親近感を増し、お互いを異性として見るようになったことも確かだつた。

それから十日もたたないある日の昼過ぎ、畑で太

平は気分が悪いから先に家に帰るといい出した。百が太平に付き添って帰ろうとしたが、大したことはないからと一人で帰って行つた。

夕方与兵と百が家に帰ると、炊事場の土間に太平が倒れていた。驚いた二人が抱き起こしたが、すでに太平は冷たくなつていた。

七十才半ばを過ぎてなお死ぬ直前まで与兵たちと畑仕事をしていたのだから、文句の言いようがない

死に方であつた。

(二十二)

与兵たちは、自分たちの周りのものを一つ一つ剥ぎ取られるように失つていく。寒さが巡つてきたあばら家の中で与兵と百は、ぽつんと座つて冬を送つ

た。

そして、そんな与兵たちのところにも春はやつて来た。野良仕事に打ち込むうちに少しずつ気力を取り戻していった。

ある暖かい夜、与兵が野良仕事の汗を行水で流している、百がいつのまにか後に来て背中を流し始めた。初めてのことであった。その夜二人は結ばれた。与兵の脚がないことも、百の過去も何の障害に

もならなかつた。二人は、生まれて初めてでもあるような新鮮な感動に包まれた。

生きる目標を手に入れた二人は、よく働いた。畑はひろがり、手入れのいい作物はよその畑よりも収穫を上げることができた。

あいかわらず遠征で拡大を続ける毛利は、兵士と年貢をとめどなく必要とされていた。与兵たちも重い

年貢に苦しみ続けていたが、それは与兵が生まれたときからのことであつたから、そんなものだと思つていた。ただこの地で戦がないことがありがたかつた。

百は、高齢出産ではあつたが、それから五年の間に三人の子を産んだ。女の子を頭に男の子が二人続いた。与兵たちの狭い家は、太平が死んで二人だけになつた六年前には想像もできなかつたような賑や

かさになった。両親が、子供たちの年からするといささか老け気味であつたが、そんなことを言つていゝる暇はなかつた。

ある日、三十才くらいの商人風の男が与兵を訪ねてきた。男は佐々木と名乗つた。そして、大切そうに布に包まれた銀貨を与兵に差し出した。そして、「これは、亡くなつた父が言い残したことによるも

のです。どうか受け取ってください」
と、丁寧な頭を下げた。話はこうであつた。

男は、二十年近く前に毛利の出雲遠征に従軍して戦死した佐々木半兵衛の息子であつた。半兵衛は出雲遠征に出る前、広島の家に戻つて家族に別れをした。そのとき半兵衛は妻に、吉田で郡山籠城のときから銀山城攻めにかけて大変世話になつた人がいる。いずれ礼をと考えてこつこつ貯めた金を置いていく

から、もしも自分に何かあつたら、その人に届けてくれと言ひ残して出雲に出かけた。半兵衛は長い遠征の末戦死してしまつた。残された家族は大変な試練に立たされたが、そんな金のことなどすっかり忘れていた。昨年半兵衛の妻、つまり訪ねてきた男の母親が病死し、遺品を片付けていたら、書き物と共にこの金が出てきたと言ふのである。それで男は正直に父半兵衛の希望通り与兵に届けることにしたの

であつた。

男は、吉田で百姓をしている人で、銀山城攻めのと
きに右脚を失つてゐるといふことを手がかりに与
兵を探し当てたのであつた。

半兵衛の書き残した物には、ほかに銀山城に近い
村の村長の家と吉田に入る手前の山門のある寺にも
礼をして欲しいとあつたが、村長の名前も寺の名前
も書いてなかつたので、男はやつとのことで探し出

して、ここに来る前に寄つてきたのであつた。

「たしかに銀山城からの帰りに大変お世話になつたところがあつたことは、わしも覚えておるが、わしのことは違つとります。あんたのお父さんに世話になつたのは、わしの方なんじゃ。礼なんてとんでもないことじゃ。礼をしなくてはならんのはわしの方じゃよ。こんな金を貰うわけにはいかんよ」

与兵は、そう言つて固辞した。

「父が出雲に遠征したときわたしはまだ子供だったので、詳しいことはわかりませんが、母から一度聞いたことがあるのですが、父にはどうしても与兵さんにこれを渡さなくてはならないという強い思いがあつたようです。わたしは父からは何も聞いていませんし、母もそれ以上のことは言わないまま亡くなつてしまつたのです。与兵さんと父の間にどういふことがあつたのかわかりませんが、どうか受け取つ

てください。そうしてもらわないと、父も母も成仏できないと思います」

与兵はこう言われて、佐々木半兵衛との郡山城以来の付き合いを思い返してみた。しかし自分が世話になったことしか思い出せない。男は、固辞する与兵の前に無理やりその金の包みを置いて、逃げるように帰って行ってしまった。

男と与兵のやり取りを聞きながら、百はふと頭に

引つかかるものがあつた。それは、籠城のときのことである。峰の流産とその後の病と死は、百と次平にとつても忘れがたい悲しい出来事であつた。その流産の後で次平が、峰さんは城の役人と何かあつたのかも知れないと言つていたのである。しかし、それ以上詳しいことはわからず、みなに慕われていた峰には、それを妬む女たちもいたのでそんな者たちが立てた噂だと思つていた。

百は、佐々木半兵衛が与兵と友達づきあいの間柄であることはよく知っていた。銀山城からの瀕死の帰還も知っている。脚を失って悶々としている与兵を慰めに何度も訪ねた百である。もちろん半兵衛が郡山籠城のとき領民の担当として真面目な役人であったことも、あるとき志願して役人の立場を捨てて兵士になったことも、百は籠城した一人として知っている。

しかし、これまで峰と何かあつたという噂の役人と、佐々木半兵衛は百の中では結びつかなくかつた。しかしいま、この意味ありげな出来事で突然一本の繋がりができたような気がしたのである。もし、そうだとしたら男が持ってきた金は、半兵衛から与兵への礼ではなく、謝罪なのかもしれない。

だが、たとえそうだとにしても、百は思い出したことを与兵に話すことはできなかつた。半兵衛はどう

の昔に死んでしまつてゐるし、金を持つてきた息子は、ただ自分は父半兵衛の遺志どおりにしたいのだと言つて金を置いて行つてしまつた。与兵はどうすることもできずに、金の包みを前にただ座つてゐるだけである。

百は遠まわしに言つた。

「半兵衛さんは担当の役人として峰さんを助けられなかつたことで、あんたにすまないと思つていたの

じゃないかねえ」

「そんなことはない。城の役人として他の誰もできないほど、峰のことをよくしてくれたのじゃ」

「それは役目として特別に責任感が強い人だったからじゃないの」

「いや、あときは他にも病気になった者はいたが、誰も峰のように医者や祈祷までしてもらったりした者はいなかった。それは半兵衛さんのおかげだった

のじゃ」

百は、

『なぜ、半兵衛さんは峰さんだけにそんなにしたの』
と言いかけたが、思いとどまった。それ以上峰と佐々
木半兵衛のことにこだわるのはまずいと思つて、

「じゃあ、銀山城であんたが何かあの人が恩に着る
ようなことをしたのじゃないの」

「それは、もう話したことがあると思うが、逆に半

兵衛さんがわしの命の恩人なんじや。自分も大けがをしてしているのに、まったく動けないわしを吉田まで連れて帰ってくれたのじやからのう。だいたい、銀山城の中でわしを助け出したりせずささと退却することだつてできたはずなんじや。もしわしが気づかんことで何か半兵衛さんがありがたいと思うようなことをしたのだとしても、あすこから連れて帰ってくれたことで、もうそれ以上の礼に代わるもの

はないくらいじゃ」

百の頭の中では、半兵衛と峰の死とこの金とが一本の線で繋がっていたが、与兵にとつてはわけがわからぬままであつた。

わけのわからない金は忘れられたように小さな瓶に入れられたまま物入れの奥に放置された。

(二十三)

数年が過ぎた。毛利はほとんど中国地方の大半を支配するまでになつていたが、あいかわらずどこかでは戦が続いていた。しかし、吉田の町は商業的に大いに賑わいを見せていた。そして与兵と百と三人の子供たちは、貧しい百姓のままだったが元気に毎日を送っていた。

富屋は郡山城とも深く繋がって、毛利にとつても重要な政商となつてはぶりをきかせていた。富三郎は隠居して吉田に住んでいた。いまは養子にとつた三代目が抜け目のない商売で、一層の富を築きつつあつた。百に言い寄つて断られた番頭は、これも引退して吉田の町の片隅で余生を送つていた。

与兵と百は昔のことを思い出す暇もなく、毎日を野良仕事に追われていた。

そんなある天気の良い午後、与兵は久しぶりの息抜きに近所を流れる多治比川の堤で釣り糸をたれていた。そこに釣り竿をかついだ老人が通りかかつて、与兵に声をかけた。これまでも二、三度この堤で見かけた老人である。

「釣れますか」

「いやあ、きょうはまだ。でも天気がいいから気持ちがよくて……」

「ほんとに気持ちがいい日ですなあ。わしもこの辺に座っていいかな」

「どうぞ、どうぞ」

老人はすぐには釣りを始めずに、ゆっくりと懐からきせるを取り出して吸い出した。煙をはきながら向かいの風越山から右の方に天神山、郡山と連なる山々の緑を眺めている。よく見ると、濃い緑の中にやや色づき始めた葉が混ざり始めていた。

いつまでも釣りを始めないので、与兵が声をかけた。

「きょうは、散歩だけかね」

「町で事件がありましたね。いや、わしには直接かわりのない事件なんじゃが、ちよつと昔のことを思い出しましたんじや。それが、昔の記憶をたどつていくとまったく関係ないことでもないようなんですね」

「このところ毛利が大きくなつたおかげで、この町は戦がなくてありがたいんじゃないやが、昔はいろいろあつたからね。わしも、昔は思い出さたくないことばつかりじゃ」

老人は与兵の言うことには上の空で、いま自分が頭の中で追っていることを口に始めた。

「やっぱりわしが面倒を見ることにしておけばよかつたのじゃなあ」

与兵に話しかけるといふより、ぼそぼそと小さな声で独り言のようであつた。聞き取れなかつた与兵が、「ええ」

と聞き返すと、老人はあらためて話し始めた。

「富屋は知っておられるじやろう。わしはあすここで番頭をしておつたのじや」

富屋は、百が働いていたがそのうち主人の思い者になつたことを与兵は知つていたので、この老人が

富屋の番頭だったと聞いて、にわかに関心が湧いてきた。

「富屋さんといえは、吉田では知らん者はおらんでしよう。その番頭さんとはお見逸れしました」

「いやいや、昔の話じゃ。いまじゃただのごくつぶしのじじいじゃよ」

「それで、事件と言うのは……」

「おお、そうじゃった。いや、事件というのはまあ、

町じやあよくあることなんじやがね、性質の悪い連中同士が喧嘩をして、そのうちの一人が死んだのじやよ。その喧嘩も、死んだ男もわしとは何の関係もないのじやがね。ちよつとその死んだ男に関連して思い出したことがあったので、その辺のことに詳しいある人に聞いてみたんじや」

老人は、きせるにタバコの葉を詰めなおしてから、「死んだ男というのは、ある女の紐だった男なんじ

や。そのある女のところに、わしが昔知っておった女が転がり込んで、しばらく暮らしておったのじゃ。転がり込んだというのは、大旦那の困い者だった女で、大旦那が広島に出て別の女を作ったので、お役ごめんになったというわけなんじゃ。転がり込んだ先の女というのは別に悪くないのじゃが、それの紐の男というのが悪で、転がり込んだ女までわがものにしようとしたんじやが、女はがんとして

応じなかつたらしい。怒った男は、その家の金を盗んだと女に濡れ衣を着せて、金が返せないならと言つて、置屋に売り飛ばしたのじゃよ。その男は、いまじゃあいい年になっているのじゃが、あいかわらず悪さをしとつたと見えて、今度の喧嘩沙汰というわけじゃ。

もちろん置屋に売られた女は、濡れ衣の借金のように客をとらされた。それも程度の悪い置屋で、客も

ろくなのはいないらしくて、女はどんどん落ちていった。もともとしつかりした女だったんじゃないやが、そういうのが案外意地を張って生きていくうちに、抜き差しならんところにはまり込んでしまふことがあるもんなんじゃよ。

大旦那がお役ごめんにしたとき、わしが面倒を見ようと言ったのじゃが、女は断った。わしもそれ以上は言わなかったのじゃが、あるとき無理にでも面

倒を見ることにしておれば、あの女もあすこまで落ちなくてすんだはずだつたと思うんじゃないよ」

与兵は、百が一切話したことがない、富屋以後のできごとについて思わぬところから聞き知ってしまった。もちろん、与兵が百を見つけたのは、よたかの溜まり場であり、これ以下はないといった姿の百であつたから、落ちるところまで落ちたということには驚かなかつたが、何故そうなつたかを知ること

になつたのである。

「その女が、世話になつた女の金を盗んだというのは、本当に濡れ衣じゃつたんかのう」

与兵は、知らず知らず真剣になつて聞いていた。

「盗まれたはずの当の女が自分から、金なんか盗まれてないと男に言つたのに、男は聞き入れなかつたということじゃから、ほんまじゃと思うよ」

「置屋に売られた女は、その後どうなつたのか知つ

てなさるのかね」

与兵は当事者としてそこから先の百のことを知つて
いるのだが、敢えて聞いてみた。

「なんでも、女と同じくらいにみすぼらしい男が何
処かに連れて行つてしまったということじゃ。その
後のことは、ぜんぜん知らん。どうせ、遊んだこと
がある男が、なにか企んだんじやろう。もう吉田に
はいないかも知れんなあ。ああいう風になつてしま

うと、いつどこで生きようが死のうが誰も気にせんからのう」

百を連れ去ったみすぼらしい男が、片脚であつたことは噂からは欠落していたらしい。与兵は、女を連れ去ったみすぼらしい男が自分であることを打ち明けるかどうか迷つた。しかし、百がその後立ち直つて、今では三人の子の母親として、片脚の夫を助けながら立派に暮らしていることを、この多少でも

百を気にかけてくれている老人に話したくなつた。

「番頭さん……」

「いや、いまは番頭じゃないんじやよ」

「ああ。実は……その話のみすぼらしい男というのは、実はこのわしなんじや」

「えっ、まさか。あんたさんには、何べんかここでお会いするが、女の弱みに付け込んで悪さをする人には見えないがのう」

「連れ去つたのは、悪いことをするためなんかじゃないんじや。実は、あれは郡山籠城のとき戦死したわしの弟の嫁なんじや。わしも、その後銀山城攻めに出了りしたので、あまり弟の嫁のことを気にしてやれなかつた。それにわし自身銀山城でご覧の大けがで、ある人の命がけの助けでやつと吉田に生きて帰つて来られたんじや。でも、しばらくは自分がこんな体で生きていく気も湧かないでいたもんでね。

幸いにわしには親父が元気でいたので、何年かかかって少しづつ生きていこうかと思うようになったんじゃない。そんなころ、町でひどい姿の弟の嫁を見つけたんじゃない」

「ほう、それは・・・そんなことがのう・・・。戦死した旦那というのは、あんたさんの弟でしたか。それでいまその女・・・、いや弟さんの嫁さんはどうしていなさるのじゃ」

百は、富屋で働いていたころ、脚を失って氣力を無くしていた与兵を何度も見舞っているのだが、番頭が自分のことを知らないと言うことは、店ではそのような話はしていなかっただと与兵は思った。

「それからずっと親父とわしと三人で暮らしとったのじゃ。親父は年をとるし、わしは片脚なんで、一所懸命面倒を見てくれてのう。もちろんわしも親父も働いたがの。で、親父が死んでから夫婦になった

んじや。今では十を頭に子供が三人じや」

「そうかね。それはよかった。あんな風になつてからでも立ち直ることがあるんじやのう。やつぱりあんたみたいない人がいたからじやろう。どん底に落ちる人も、落ちたくて落ちる者はいないからね。それぞれわけがあるということじや。」

いやあ、きようはあの死んだ男のことを聞いて、いやな気分になつていたのじやが、本当にいい話を

聞かせてもろうた。あんたさんの話しぶりじゃと、
幸せそうじゃな」

「幸せなんていうもんじゃないのう。三人の子を食
わせるために毎日必死で働いているだけじゃから」
「でもこうして釣り糸をたれている姿は、やっぱり
幸せというものじゃよ。使い切れんほどの金を稼い
だ富屋の隠居も、いまの旦那も年中豪勢に遊んでい
なさるけど、いまのおまえさんのようなのびのびし

た表情はなさつていなかつたもんじや。いつも商売の先行きを心配する気持ちから逃れられんのじやよ。なんぼう稼いでも、それでもういいと言うことがないのじやのう。

その点で言えば、いまじやあ中国路に敵がいなくなつたほどの毛利の殿様も、いまだに出雲に生き残っている尼子に手を焼いているし、とにかく気が休まることがないということじやからのう」

(二十四)

与兵は、老人と話したことを家では何も話さなかつた。

その年吉田には、被害をもたらずような嵐も、大水もなく与兵の田畑にも何とか年貢を納めるだけの物が収穫できた。だからといって毎年のことではあるが、自分たちが毎日米を食べられるわけではなか

った。拡張を続ける毛利が百姓に課す年貢は、百姓自身の暮らしに配慮するようなものでは決してない。大変な重税と言わなければならなかつた。

与兵は年貢の時期になると思うことがあつた。籠城の五か月間結局最後まで毎食米が食べられたことである。城に蓄えられている米を初めとする食料の豊富さは、考えるたびに感心させられるのである。平定した地域が広がればそれだけ吸い上げる年貢も

増えるのであろう。しかし、だから不公平だといった考えは湧いてこなかった。むしろ、吉田で戦がな
いことをありがたいと思う気持ちが強かったのである。

与兵一家は貧しいながら穏やかな正月を迎えていた。この冬は暮れから正月にかけてよく雪が降った。雪の正月になると、百は、次平が尼子追撃に出て行

つたきり帰つてこなかつたあの郡山城での正月を思い出すのだった。雪のない年にはそれほどでもないのに、この年のように雪が多いと、きのうのこのように思い出されるのだ。一面の雪野原を眺めながら悲しい顔になる百を見ることになるので、与兵は雪の正月が嫌いであつた。

だが、子供たちは子犬のように雪の中で転げまわつて遊んでいた。

与兵の家の前で、体格のいい中年の男が中をうかがっている。百が気づいて、

「何か御用ですか」

と言いかけて、

「あつ」

ほとんど二人同時に声を上げた。二十数年の歳月が経っているが、二人とも見間違ふことはなかつた。

「百か」

「あんだ……」

二人は見合つたまま身動きもできないでいた。

兄与兵を訪ねた次平だったが、まさか百に巡り合
うとは予想もしていなかった。与兵に会つて百のこ
となどを聞き出そうと思つて来たのであつた。一方
百は、一瞬自分が現実の世界にいるのかどうか混乱
してしまふほどの衝撃であつた。

次平は、ひげをはやし髪には白いものが混じつて

いる。行方不明になつたころよりもだいぶ太つてい
るようだった。だが目だけは、二十数年前のまま
あり、百は目を見て、その男が次平だとわかつたの
である。

次平は、こうしている間も百がどういう立場でこ
こに居るのかということに考えをめぐらせた。

家の中から子供の声が聞こえてきた。次平は百の
顔を見て言った。

「兄貴に世話になつてゐるのか」

百は下を向いてうなずいた。

「あれは、兄貴とお前の子供なのか」

責める調子ではなかつたが、百は悪いことをしたのが発覚したようにどぎまぎした。その様子を察した次平は、声の調子をできるだけ和らげて言つた。

「責めているのではない。二十何年ものあいだ何の連絡もしなかつたのだから仕方がない。かえつて、

こうして無事に暮らしていてくれてありがたいと思
うよ」

百は言うべき言葉を思いつかなかつた。

「兄貴は居るのか」

「はい。あ、どうぞ入ってください」

次平は誘われるままに入りかけたが、すぐ足を止め
た。

「いや、やめとこう。わしはお前が無事で暮らして

いることがわかって安心した。会わないで行くよ。

兄貴には何も言わないでくれ」

「でも……」

「うん、やっぱりそうしよう。で、源はどうしていい」

「毛利の兵士になってあちこちに遠征しましたが、安芸の厳島で大内勢と戦ったときに戦死しました。兵士になることをきつく反対したのだけど、そのこ

ろはわたしも人に説教でできるような生き方はして
なかつたもので・・・」

「そうか」

次平は力なく返事した。

「じゃあ、たっしやでな」

「ひと目だけでもうちの・・・お兄さんに会って行
ったら・・・」

「いや、いい」

次平は、さつと踵を返して早足で立ち去った。

百は、その場でなす術もなく見送りかけたが、急に思いついたように次平を追いかけて、

「どちらへ」

と聞いた。

「別に行く当てもないが、わしのことは心配しなくていい」

百には次平が怒っているように思えて、それ以上引

き止めることもできずに見送った。

そのことがあつてからの百の様子は、与兵には理解しがたいものであつた。やたらに嬉しそうに陽気にはしゃいだかと思うと、困り果てたように考え込んでしまつたりで、気分の波が大きく、しかも頻繁に変化した。

(二十五)

百と別れた次平はそのまま北に向かった。二日後、次平は出雲の松（まつ）という男の家を訪ねた。戸を叩く音に、松の女房が出て来た。

「なんだ、次平さんじゃないか。もう吉田から戻つてきたのかい」

「まあ、それはゆっくり話すから、とにかく中に入

れてくれ。寒くて、寒くて。熱い白湯でもよばれた
いから」

「あ、すみません。気がつかなくて。どうぞ。うちの
の人いますよ」

二人の会話を聞いて、松が出て来た。

「どうした、もう会うこともないとか言つて出て行
つてから十日も経つてないじゃないか」

次平は勧められるよりさきに、勝手知つたる何とや

らといった様子でいろりの縁にあぐらをかいた。

松の女房が、湯気の立つ椀を三つ運んできた。

「どうせお腹も空かしてるんでしょ。ちようどこれから夕飯にするところだから一緒にどうぞ」

「ありがたい。実は朝から何も食ってないんでね。なにしろ雪が深くて、茶屋も何もみな閉まっ
ていてね」

「泊まるところはあったのか。これじゃ野宿はでき

んじやろう」

「商人の行き来する宿場はこんな真冬でも結構賑わつていてね。だから宿はそういうところで何とか泊まれたが、それから次の宿場までは人っ子一人いないところを一日歩きどうしなんじや。よく道に迷わずに出雲に入れたと思うよ。これも尼子兵としてこの辺りをほうぼう連れまわされたおかげよ」

「ずいぶん働かされたからのう。とにかく無事ですよ

かった。で、吉田はどうじゃった……」

そう言われて、次平は雪の中を歩いているうちに洗い落としたはずの感慨が胸の内に甦ってきた。話そうとしたが、こみ上げるものがあつて声が出なかつた。次平は深呼吸を一つして、湯を喉に通した。その様子を見ていた松夫婦は、あまりいい話でないことを察した。しかし、次平は落ち着きを取り戻して話し始めた。

「だめじゃったよ。だからここに戻って来たんじゃない。これからはこっちの人間として暮らすことにするよ。もう二十何年も暮らしとるんじゃないから、今までどおりっていうことじゃ」

次平は話しながら、いまは自分の普段の話し方で喋っているが、百の前では何かぎこちなくなっていたなと思った。

「百さんは見つからなかったんか」

「見つかった。でも他人（ひと）の女房になつていた。ちやんと子供までいるみたいじゃつた」

「やっぱりそうだったか。わしも他人のことは言えんが、二十年も二十年も経てばしかたがないよなあ。百さんを責めることはできんじやろう」

松の女房が口を挟んだ。

「うちの人には、吉田の女房はもう自分が死んだものと諦めているはずだと決めて、さっさとわたしと所

帯を持ったけど、次平さんはいつかきつと吉田に帰るって言い続けて、やっと実現したのにねえ」

「その*いつか*が長すぎたね」

次平は、いろりの火を眺めながら呟いた。

「百の旦那というのは、わしの兄貴じやった」

「……」

松夫婦は、それに答える言葉が見つからなかった。次平が続けた。

「実の兄貴じゃ。籠城のとき身籠つとる女房を病気で死なせた、あの兄貴じゃ」

「連れ合いを無くした者同士、しかも親戚だから、助け合つて暮らしていたんじゃないやろ」

「まあ、そういうことじゃろう。わしらも、尼子側の山賊に捕まったとき、尼子につくからといって命乞いした身じゃから文句も言えんよな」

「絶対寝返つたりするもんか言うて突つ張つたあの

二人は、その場で殺されたもんなあ。あんとわしは死んだら元も子もないと考えて、その場は生き延びることが大事じゃと考えたのよのう。たしかにそのときはわしも、生きてさえいれば何時か何とかなる時が来ると思つたもんなあ」

「そうだったなあ。尼子では毛利との戦にも駆り出されたもんな。でも富田城が落ちるまでに二十五年もかかるとは思わんかつたなあ。あの吉田から逃げ

帰る尼子の様子だと、すぐに毛利が攻め滅ぼしてく
れると思ったんじゃないのう」

「大内と毛利がこの辺に攻めてきたときも、結局は
追い帰してしまつたしこのう」

「その大内も、毛利が嚴島で倒してしまつたそうじ
ゃないか」

「それだけ年月が経つた言うことじゃ」

「ちよつと、百さんの話じゃなかつたの。ほんとに、

この人たちは戦の話になるとすぐ、毛利だ尼子だ大内だと夢中になるんだから」

「そうじゃ。それで、えーと……その兄さんには会ったのか」

「会っても仕方ないじゃないか。『百をよろしくお願
いします』って挨拶するんか」

「でも、実の兄さんなんじゃろ」

「そうなんじゃが、わしもいまくらい落ち着いとつ

たら、ちゃんと会って話をして来られたかも知れんな。でもあの時は、いきなり百に出会って、それだけでも気が動転していたのに、兄貴の女房になつてゐるなんて……。兄貴というより、どこかの男に女房を寝取られたような気持ちになつとつたからのう」

次平は、松たちと話しているうちに、すっかり落ち着きを取り戻していた。

「どこかにいい嫁さんおらんか」

「いまさらね。わたしらが所帯持つときに、わたしの友達があんたのこと気に入ってたと言ったでしよ。あの時ならね。でも、あのころ次平さんは百さんのことで頭がいつぱいだったもんね」

「おしいことをしたな。その友達はまだ一人じやないかね」

「なに言ってるの。大昔に嫁に行つて、いまはおば

あさんになつてますよ」

「それから……」

次平が急に真面目になつて、

「そんなことだつたんで、松さんの女房、子供の消息を調べることをすっかり忘れて、ただ夢中で雪の中を歩き始めてしまつたんじゃない。すまんけど……」

「いや、かまわんよ。どうせわかつたところでどうするわけでもないんだから」

そう言いながらも松は、吉田に残した子供のことな
どを思い起こしたようであつた。

夜が更けて、次平はそのまま松のところ泊まつ
た。床についても次平はなかなか眠れなかつた。う
つらうつらしかけると、歩き去る自分をいつまでも
見送る百の姿が、どこまで歩いてもはつきりと見え
ている夢が繰り返して出てきては、胸を締め付けられ
る思いで目が覚めるのだった。

この日から数日、次平は松の家に居候を決め込んでじつとしていた。食事のとき以外は、寝場所としてあてがわれた物置のような部屋から一步も出なかつた。そして五日目の朝、

「松さん、いろいろ考えたんじやが、もう一回吉田まで行つて、百とも、兄貴ともきつちり話をしてこようと思ふんじや」

「それはいいことじやが、春になつてからではいけ

んのかね」

「百の方でも、わしの姿を見た以上いろいろ悩み始めていると思うんじや。ゆつくりしとらん方がいいと思うんじや」

「それもそうじや。道中気をつけてな。金はあるのか」

「ああ、大丈夫だ。また帰ってくるつもりだから。じやあ」

次平は、雪の残る街道を南に向かった。

(二十六)

あまりにも様子がおかしいので、与兵は百を問い詰めた。百も自分ひとりの胸に収めきれずに、次平が訪ねて来たこと、与兵と夫婦になつて子供もいる

ことを知って、次平がそのまま立ち去ったことを包み隠さず話した。

与兵は、次平が死んだものと諦めていたので驚き、そして喜んだ。

「じやが、その人は本当に次平じやったのか」

「間違いありませんよ。向こうもわたしのことを百つて呼んだし……それに、何年会っていなくても間違えるはずがないもの」

「それにしても、二十年以上もどこにいたんじや」

「そういうこと、何も聞けなかったの」

「じやあ、どこに行ってしまったのかもわからん
じやのう」

「ええ。でもわたし、びっくりしてしまつて……」

「それはそうじやろう」

「わたし、どうしたらいいんでしよう」

「どうしたら言うても……」

与兵も考えなどまとまらなかつた。

次平は、出雲を出て三日目の夜になつて吉田にたどり着いた。とりあえずその晩は町で宿に泊まつて翌朝、西浦の与兵の家に向かつた。

街道からそれて多治比川の堤に出ると、遠くの山裾の畑で春に備えた農作業をしている人々が見えた。きつとあの中に与兵や百がいると思うと、次平は足

が進まなくなつた。小一時間もその辺りをうろうろしたり堤に座つたりして考えたすえ、その日はそのまま宿に戻つてしまつた。

次の日、吉田盆地には冷たい雨が降つていた。次平は昼前まで宿でぐずついていたが、意を決して出かけた。今度は、外に人影がなかつたので与兵の家の前までやつて来た。家の中は静かだったが、突然、「きやつ」

と子供のふざける声が出たと思つたら、小さな男の子がガラツと戸を開けて飛び出してきた。男の子は次平を見ると急に怯えたように、いま出てきた戸の中に駆け込んでしまった。それで、かわりにだれか大人が、つまり百か与兵が出てくると思つた次平は思わず身構えていた。ところが男の子にかわつて出てきたのは、年上の女の子だった。

「うちに用だったら、いまとうちちゃんもかあちゃん

もいません」

「ちよつと聞くが、お前さんのとうちゃんは与兵と言うのかね」

「そうだよ。とうちゃんが与兵で、かあちゃんは百だけど」

「そうか。わしは、次平というものじゃ。そう言え
ばとうちゃんもかあちゃんもわかるはずじゃ。いま
町の宿に泊まっておると、帰ってきたら伝えてもら

えるか。忘れんでな」

次平は、そう言つて出雲から持つてきた菓子のみを女の子に渡した。見ると、入り口でさつきの男の子とそれより少し大きいもう一人の男の子が次平をじつと見ていた。

その夜、与兵が一人で宿に次平を訪ねてきた。二人は信じられないような再開に涙を流して喜び合つ

た。それから弟は、敵である尼子に寝返りながら生き長らえて、二十五年経ってやっと吉田に戻って来たいきさつを話した。一方兄は、銀山城で負傷して右脚を失いながらも、普通の生活を送るところまで立ち直ったことを話した。

そこまで二人とも百のことには触れないようにしていたが、ついにそのことを話すときが来た。与兵が話し出した。

「百とは十年前に所帯を持った。百は、お前がいなくなつてから大變な苦勞をしたんじや。最後は悪いやつに盜人の濡れ衣を着せられて、女一人ではどうにもならないところまで追い詰められたんじや」

与兵は、次平に百の過去のすべてを話せなかつたし、話すべきでもないと思つた。

「それで、うちに来てもらつて、親父とわしと三人で野良仕事をしながら暮らしていたんじや。親父が

死ぬ前に、わしらに『百には、もう三年も世話してもらつてるんじやから、夫婦になれ』言うてのう。それが十年前じや」

次平は黙つて聞いていた。与兵は、次平に対して悪いことをしたという風に、ときどき次平の顔をうかがいながらゆつくり話した。その氣遣いが、次平にとつてはかえつて氣に触つた。

「兄貴は、昔から親父の言うとおりにじやつたからの

う。でも百を助けてくれたんじやから、わしとしては礼を言わんにやならんくらいじや。気にせんでいいよ」

次平は言っている言葉とは裏腹に、少しいらいらした調子になってしまったと思つたが、敢えて言い直したりはしなかつた。

「それで、お前はこれからどうする」

「出雲に帰つて、尼子の兵士として生きていく

か・・・」

「尼子がどれくらい勢いを残しているのかわからんが、毛利に完全に滅ぼされるのは時間の問題じゃないんか。それじゃあ、お前の将来は先が見えてるってことじゃ」

「他に何かあると言うんじや」

「例えば、広島に出てまた大工でもやったらどうじや。広島はこれからは賑やかになるらしいからもう。

それにいつまでも兵士でもなかるう」

「広島か……」

次平はこれといった考えもなく、漠然とした気持ちで与兵の話聞いていた。

与兵は話題を変えた。

「いずれにしても一度うちに来て、百とも話したらどうじゃ。お互いその方がすつきりするんじゃないかのう」

「……」

「あしたすぐにといふのでなくてもいい。二、三日
気持ちの整理をしてからでいいから。どうかのう」

「……」

「このままで、わしが今晚のことを話して聞かせた
だけじゃあ百も納得できんじやろう」

「どう納得する言うんじや」

「それは……、」

「百はどう言つとるんじや」

「いや、百は何も言つとらんが、十年も十五年も一緒に暮らして、わしとの子が三人もいるんじや。いまさらどうすることもできんじやないか」

「十年じやなかつたんか」

「・・・」

「わかった。とにかく百と話そう。あした行くよ」
与兵は、夜道を一人帰って行った。

与兵は百に、次平と話したことを包み隠さず話した。そして、

「いちばん大事なのは、お前の気持ちじゃよ。お前がどうしたいかということがはつきりしないと、わしも次平もなにも決めることができんのじゃ」

「わたしの気持ちって、あの人のところに戻るかっていうこと？」

「まあ、そうじゃ」

「あんたは、そうしてほしいの」

「わしじゃなくて、お前がどうしたいかを聞いてるんじゃ」

「あんたがどうしてもほしいかは、なぜ言ってくれないの」

「じゃ言おう。わしはこのままここで家族五人暮らしていききたいんじゃ」

「じゃあ、決まりね」

「ほんとにそれでいいのか」

「くどいわね。そりゃ、複雑な気持ちだけど、子供のこともあるから、それしかないわよね」

「次平には、それをどうやってわかってもらおう」

「さっきの話じゃあ、わかってるようだったじゃないの」

「心底納得したとは思えんのじゃ」

「心底なんて、時間が経たないと……でも、松さ

んていう人は向こうで所帯を持ったっていうのに、あの人はずっとひとりで……」

百はこみ上げるもので声を詰まらせた。

与兵は、みなが心から納得できる解決方法などないと思つた。

翌日、次平がやって来た。百は昨夜与兵と話していたときの、心のゆれをまったく見せず、毅然と

して次平に相對した。もちろん、次平への思いやり
に満ちた言葉で話した。次平の方も、前の晩見せた
苛立ちのようなものはもうあらわさなかつた。

三人の、互いにやや他人行儀な雰圍氣の會話が静
かに続いた。そして、結局次平は広島で大工をやつ
てみるということになつた。そして与兵が、

「お前がその氣になつてくれるのなら、資金を出し
てやれるんじゃないが、使つてくれるか」

そう言つて、同意を求めると同時に百を見た。

「そう、とてもうちには似合わない大金があるのよ」
「……」

与兵は、すぐに奥の方の物入れから埃まみれの瓶を出してきた。百が埃を拭き払った。与兵が一気に瓶を開けると、三人の前に銀貨の山ができた。これには次平はもちろんと与兵と百も驚いた。二人も、この金を数えたことはなかつたのである。

「すごいじゃないか。なぜまたこんな大金を……」
次平が銀貨を手に拵んでみながら聞いた。与兵は、
この金のいきさつを話してから、

「じやが、わしにはどうもわからんのじやよ」
と言った。

百は次平と顔を見合わせたが、何も言わなかった。
「これだけあつたら、兄貴たちだつてもつとましましな
暮らしができるじゃないか」

「いや、わしらは、百とも話したんじやが、こんな金に手をつける気はまったくないんじや。自分たちで働いて暮らしていけるんじやから。だから、これから広島で一旗挙げようというお前が、その元手に使ってくれ。そういうことに生かすんなら、佐々木半兵衛さんも文句はいわんじやろう」

次平は、しばらく考えていたが、
「よし、借りることにするよ。そのかわり百は兄貴

にやるよ」

「それじゃあわたしを売り買いしたみたいじゃないの」

百はむくれて見せたが、みなのが持ちが開けてきたことが嬉しかった。

ずつしりと重たい銀貨をいくつにも包み分けて、次平は腰に巻きつけた。

「重たいもんじやのう。これで長く歩いたら、腰を痛めそうじや。金が重くて腰を痛めるなんて贅沢じやのー」

次平は笑顔で与兵の家を後にした。次平の目の奥にある寂しさを百は見逃さなかつたが、百も笑顔で次平を見送つた。

(了)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュアとしてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同じ時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中心から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っております。

で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))

への投稿の形でも発表していきたいと考えておりますので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴ―シユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

- 1 弦楽四重奏団 a
- 2 弦楽四重奏団 b
- 3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

ある兵士の物語

2022年11月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：www.illustr-ac.com

・タイトル：町人の相談2

作者：cocoancoさん

写真のID：1518015

・タイトル：喜ぶ やったね！女2人

作者：cocoancoさん

写真のID：2611609

・タイトル：戦国武将

作者：歩夢さん

写真のID：1077550

・タイトル：和風背景 町並み 夜

作者：cocoancoさん

写真のID：2018735

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
